



## 高齢男性のセクシュアリティと男らしさ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-06-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中原, 由望子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00002533">https://doi.org/10.24729/00002533</a>

2014 年度博士学位論文

高齢男性のセクシュアリティと男らしさ

大阪府立大学大学院

人間社会学研究科 人間科学専攻

中原由望子

# 高齢男性のセクシュアリティと男らしさ

中原由望子

## 目次

はじめに .....	4
第1章 高齢男性をめぐる社会規範—セクシュアリティとジェンダー.....	8
第1節 セクシュアリティとは何か.....	8
第2節 ジェンダー・アイデンティティと男らしさを支える他者 .....	11
1) ジェンダー・アイデンティティと男らしさの規範 .....	11
2) 親密な他者の必要性.....	13
第3節 高齢者であることと男性であること .....	14
第2章 日本社会の高齢男性へのまなざし.....	18
第1節 「高齢者」としての人生の危機.....	18
1) 定年退職.....	18
2) 配偶者との死別.....	21
第2節 高齢男性をめぐる親密なネットワーク .....	24
1) 高齢者の社会的ネットワーク .....	24
2) 単身で暮らす高齢者と社会的孤立 .....	26
第3節 高齢男性のセクシュアリティ .....	29
1) 戦後日本におけるセクシュアリティの思潮 .....	29
2) 高齢者の性的行動調査 .....	32
3) 老婚調査.....	35
4) 高齢男性のセクシュアリティのさまざまな可視化 .....	37
第3章 日本社会に内在する高齢者へのセクシュアリティ規範 .....	41
第1節 社会規範の可視化.....	41
1) 調査目的.....	41
2) 調査対象の選定：高齢男性のセクシュアリティにかかわる記事.....	41
3) 記事の分類と2誌の比較.....	43
第2節 年代別記事分析.....	44
1) 年代別推移と媒体による傾向の違い.....	44
2) 1990年代前半：脳科学の登場と規範の混在 .....	45
3) 1990年代後半：高齢者のセクシュアリティ実践に役立つ情報.....	47
4) 2000年代前半：高齢男性のセクシュアリティの取り扱い方 .....	48
5) 2000年代後半：伝統的規範と新しい規範.....	51
6) 2010年以降（2012年12月31日まで）：セクシュアリティの肯定と個人の問題.....	53
第3節 考察 .....	57

1) 高齢者であることと男性であること .....	57
2) 医療言説に規定される高齢男性のセクシュアリティ .....	58
3) 性シナリオと3情報の関係性 .....	58
4) 男性的魅力を補填する方法—差異化と承認のための他者 .....	59
5) 性産業の消費者として的高齢男性 .....	59
第4章 高齢期男女のセクシュアリティ観 .....	63
第1節 調査の概要 .....	63
1) 調査目的 .....	63
2) 調査対象 .....	63
第2節 性的行動の対象と意味 .....	65
1) 夫婦間のセクシュアルな関係 .....	67
2) 配偶者以外とのセクシュアルな関係 .....	67
第3節 親族間ネットワークと非親族間ネットワーク .....	68
1) 親族間ネットワーク .....	68
2) 非親族間ネットワーク .....	70
第4節 高齢期の異性関係 .....	72
第5節 考察 .....	75
1) 自立と活発なネットワーク .....	75
2) セクシュアリティについて .....	76
3) 高齢期の異性関係に影響するもの .....	77
第5章 高齢男性にとってのセクシュアリティの意味 .....	80
第1節 性的行動と女性との親密性 .....	80
1) 調査目的 .....	80
2) 調査対象 .....	80
3) 3人の高齢男性のセクシュアリティ .....	81
【Aさん】 .....	81
【Bさん】 .....	84
【Cさん】 .....	87
4) 考察 .....	89
① 高齢男性がもつ男らしさの概念とセクシュアリティ .....	89
② 高齢期におけるセクシュアリティの位置づけ .....	91
③ 現在のパートナーとの関係性の意味：男らしさの評価を上げるための性的行動 ..	91
第2節 性的行動と男性としての承認 .....	92
1) 調査目的 .....	93
2) 調査対象 .....	93
3) 調査結果 .....	94

【Dさん】 .....	94
【Eさん】 .....	97
【Fさん】 .....	100
4) 考察.....	103
①高齢男性がもつ男らしさの概念とセクシュアリティ.....	103
②高齢期におけるセクシュアリティの位置づけ .....	104
③現在のパートナーとの関係性の意味： 優位性と弱みを見せあうこと .....	106
第3節 セクシュアリティというツール.....	107
第6章 ジェンダー・アイデンティティとセクシュアリティの関係性.....	110
第1節 高齢男性にとってのセクシュアリティ.....	110
第2節 女性との親密性.....	112
第3節 差異化.....	114
第4節 高齢男性の男らしさのチャート.....	115
第5節 高齢男性のセクシュアリティと男らしさ .....	116
おわりに .....	119
初出一覧 .....	123
参考文献 .....	124

## はじめに

こんにち、日本は他国を先導する速さで高齢化が進んでいる。2013年10月の内閣府調査において、65歳以上の高齢者人口は3190万人、総人口に占める65歳以上人口の割合は過去最高の25.1%となったが、15歳から64歳の生産年齢人口は8000万人を下回った。さらに2060年には高齢者人口は総人口の39.9%に達し、2.5人に一人が65歳以上となることが予想されている。

高齢化の進展は、多くの社会システムの変革を余儀なくさせている。平均余命の伸長は定年退職後や老後の時間の増大をもたらし、ライフスタイルの多様化や経済的な蓄えの必要性の増大をもたらした。これを支えるべき現在のシステムは、戦後の復興期の高度成長期を経て、1960年代、1970年代に基本的な骨格の大半が作られたが、当時と現代では人口構成比が大幅に異なっている。介護保険制度の導入や年金制度改革など、時代とともに主な制度は変化してきてはいるが、生活者の実態に沿ったものになっているかどうかは判断が難しいところである。また、高齢者政策は、高齢者のみを対象とした一時的な対策となっていることも多く、体系的で長期継続的なものは少ない。そのため、実際には高齢者自身による高齢期対策が必要とされているのが現状である。近親者による無償のサービスや、市場による有償のサービスは、長期化した高齢期を生きるために確実に必要となる。

日本が現在経験し、そして今後にも経験するであろう未曾有の高齢化に対して、社会的な取組みが必須であることは云うを俟たないが、必要とされるものは、具体的に経済的な生活保障や様々な社会的サービスの保障にとどまらないのではないだろうか。人々の高齢になってからなお数十年間を生きる生のありかたを、社会が人の生の一つの様相として受け入れること、多数の人々の経験する高齢での人生を幼少や壮年での人生と同様に人々の当り前の生の一部として考えることが、基本的な視点として必要ではないだろうか。

というのも、1960年代に形成された社会保障制度や労働市場において65歳となる高齢者は、人口比率にしてわずか6%前後であり、平均余命もわずか男性が約12年間、女性が約15年間だった（国立社会保障・人口問題研究所編2014）。つまり、当時の社会は、実数として少なく人口比率としても低い一部の人々が、高齢者として送る人生が短いことを前提としていたのである。そして、高齢期に入る前に典型とされた人々の人生は、男性は成人して40年間正規雇用され、結婚して子どもを持ち60歳前後で退職、女性は成人後に結婚して専業主婦となり子どもを二、三人出産、退職後は夫婦が年金で生活するというものであった（落合2004；岩上2013）。日本社会にはこの典型的人生を過ごして高齢になるべしという社会規範が存在していたことができる。したがって、人々がより幸せに生きる社会を実現するために、社会保障制度のありかたを変更するだけでは不十分で、その前提とされる社会規範のありかたをも検討の視野に入れることが不可欠である。

しかしながら、主として1960年代に作られた年金制度等の社会保障制度が、現代の高齢化に十分に対応できていないように、高齢者にかかわる社会規範も急速な高齢化に対応で

きていないのではないだろうか。日本社会には高齢者に対してどのような社会規範が存在し、この長寿化した現代の高齢者たち自身はそれをどのように生きているのだろうか。本研究は、このような問題関心から、現代日本の高齢者に関わる社会規範をとらえるとともに、高齢者自身による意味付与と社会規範との関係性、そこに含まれる課題を明らかにしようとするものである。

高齢者に関わる社会規範というとき、最も重要な要素は高齢になることそのもの、つまり身体的な加齢による老化である。老化は、生物学的な身体能力の衰えとして経験されるが、それにくわえて加齢を前提として社会規範が変化する。これを年齢規範といい、Chudacoff (1989) は「各年齢層の人々にとって当を得た行動や技能を構成するものはなにかということ」に関する規準とし、Hendricks et al. (1986) は「その年齢にふさわしい行動の指針」であると述べている。「年相応である」とか「その年になって」、「いい年をして」といった言葉が発せられるときの根拠になっている。年齢規範から外れた態度や行動をとるものは賛否いずれの評価を受けるにしても「普通の者」とは違った特異な存在としてみなされる傾向がある。

現代の日本社会において、年齢で定められた社会制度に定年制度や年金制度があり、それは世代の交代をスムーズに行うための社会的装置になっている。つまり定年退職（とそれにともない年金を受給すること）は、人々を「高齢者」というカテゴリーに入れる装置である。そして、先に言及したように、社会保障制度は世帯を単位としており、40年間正規雇用された夫と専業主婦の妻が離婚せずに高齢期を迎えることを前提としていた。ここには、《高齢者になる前》についてのいくつもの規範的要素が含まれている。第一に、人々が異性愛であり、結婚し、離婚せずに老後に到るというセクシュアリティの関係性、第二に夫が数十年間、妻子を扶養するだけの経済力をもって労働し、退職後はその年金で夫婦が生活できるようにするという、第一のセクシュアリティにおいて親密である他者（配偶者）との経済力の関係性である。よって、高齢者が身体的な衰えをどのように経験するかということだけでなく、《高齢者になる前》に数十年間生きられる社会規範との関連において、高齢者を取り巻き、また高齢者自身が内面化して生きる社会規範を捉えねばならない。そして、そのときに重要な位置を占めているのがセクシュアリティである。なぜなら、日本の社会保障制度は夫婦世帯を単位としていて、高齢者というカテゴリーに入ることにしても、異性の親密な他者との関係性が自明視された要請として組み込まれているからである。

くわえて、この「高齢者」というカテゴリーがジェンダー中立的ではないことに注目すべきである。なぜなら、人々を「高齢者」として位置づける「定年退職」というできごとは、長年のあいだ正規雇用された労働者を想定しているが、中高年者の正規雇用者は圧倒的に男性であり、戦後日本の労働市場は男性を労働者として想定し成立してきたからである（大沢 1993）。このことから、「高齢者」になるということは、65歳という年齢に達して公的統計での「高齢者」に入るということではなく、単に身体的に老化するというだけで

もなく、社会規範やそれに支えられた社会保障等の諸制度によって数十年を生きたくて、「高齢者」というカテゴリーに入り年齢規範を生きることであるといえる。しかも、その規範は男女で異なっており、男性のほうが社会的により明示的に「高齢者」となる経験をするのである。

これをより具体的に考えると、男性にとって「高齢者」になるということは、自らの身体的な老化の経験に加えて、それまで有してきた職場のネットワークとそれに支えられた経済力ある労働者としての地位を失い、社会や周囲の人々からのまなざしとして「高齢男性」への社会規範が経験されることである。そのような激変ともいえる経験を支えると想定されているのが親密な他者（妻）の存在であろうが、高齢女性に比べて高齢男性の孤立死が相対的に多いことは、現代日本において上述の社会保障制度や社会規範が機能不全に陥りつつあることを示唆している（東京都福祉保健局東京都監察医務院 2013）。

そこで本研究は、研究対象をこのような状況に置かれた高齢男性とし、第 1 章でセクシュアリティとジェンダーに関する理論的研究を年齢規範に留意しながら整理し、第 2 章以降の具体的な考察のための基本的視点を得る。第 2 章では、これまで日本において実施された関連する実証研究の整理を行い、現代日本社会が高齢男性をどのように扱っているか、高齢男性に対してどのようなステレオタイプが存在するか、高齢男性の親密なネットワークにおけるセクシュアリティの実情や高齢男性のセクシュアリティに対する社会のまなざしについて取り上げる。

第 3 章では、セクシュアリティの規範（性シナリオ）としてマスメディアの記事を分析する。大衆週刊誌にある記事をもとに、現代社会における高齢男性のセクシュアリティ規範を示し、高齢男性のセクシュアリティについて、どのような社会規範が現代日本に内在しているのかを示す。

第 4 章と第 5 章では、高齢者当事者に対するインタビュー調査によって捉えられたデータをもとに、高齢男性が自らのセクシュアリティをどのように捉えているか、ということに焦点を当て分析する。第 4 章では男女へのインタビューから、男性と、親密な他者となる女性との観点の同異に留意し、第 5 章では独身の離別男性と死別男性へのインタビューから、女性との親密性に関する男性間の相違に留意して考察を行う。そして、インタビュー調査のデータをもとに、高齢男性のセクシュアリティ観とそれに基づく実際の行動や、高齢男性だけに特別に課されるセクシュアリティに関する社会規範をどのように捉え、どのように対処しているのか、とくに、自己欲求と矛盾する社会規範に対する抵抗の仕方に着目する。

第 6 章では、高齢男性のセクシュアリティについて、理論的な概念を用いながら考察を行う。高齢男性のセクシュアリティ、男らしさ、それらに関する年齢規範との関係性について考察し、社会規範と他者による承認とのほざまで、現代日本社会で高齢男性が生きることにかかえる課題を指摘する。最後に、「おわりに」で本研究から明らかになった点をまとめるとともに、残された研究課題を述べる。



なお、本研究における調査は大阪府立大学人間社会学研究科研究倫理委員会の承認を受けて行った。

## 第1章 高齢男性をめぐる社会規範—セクシュアリティとジェンダー—

### 第1節 セクシュアリティとは何か

「はじめに」で述べたように、セクシュアリティは戦後日本の社会保障制度に不可視な前提として組み込まれ、人々の《高齢になる前》の人生とともに高齢期の人生に大きな影響を与えている。その異性愛が正常で自然な秩序に合致したセクシュアリティであるという考えは、男女の生物学的二分法と生殖に結び付けられた説明によって揺るぎない地位を占めてきた。

しかし、近年の、ミシェル・フーコーを初めとする多くのセクシュアリティ研究の蓄積が示すように、このように異性愛を「正常」とする異性愛規範 (heteronormativity) をともなう生物学的なセクシュアリティの観念は、西欧社会での近代化とともに確立されたものである。日本へも、近代化とともに輸入され、とくに第二次世界大戦後に普及せられて戦後近代家族の形成の基盤となった。

近年のこの理論的立場から、本研究ではセクシュアリティ概念における、何を「性的」とし、あるいは「性的ではない」とするかについて、「人間行動に意味を与える多様な社会的実践の結果であり、社会的定義と自己定義の結果」(ウィークス 1996 : 37) とする社会構築主義的観点で考察を行う。「正常なセクシュアリティ」とは、社会的に構築されてきた支配的な言説によって肯定的に取り決められた社会的現象である。これらの言説は、社会が何を正常な行動であるかを定義するために、また、人々の振る舞いの正しさを監視するために作用する (Robinson 2002)。教育や宗教を通して学んだこれらの言説に沿い、仲間や見知らぬ人の前で正しく行動するために、我々は幼い頃から男らしさや女らしさを繰り返し演じ、異性への性的欲望を育てるが、他方でその「正常」さは他者によって審判されている。このように、社会において流布する規範があり、それを自己と他者が実践的に定義してゆく産物として、セクシュアリティは構築されるのである。この理論的立場によって、セクシュアリティは生物学的二元論から解放され、我々はセクシュアリティを生物学以外の他のさまざまな社会現象、つまり政治や支配構造、経済、宗教などに関係づけられた、複雑な社会現象としてみるできるようになった。

また、この理論的立場とともに、セクシュアリティは多様であり、人々の生に不可欠な一要素であるとする理解が生まれる。人間は、多様な可能性をもつセクシュアリティを、どの時代にもさまざまな実践を通して、その社会、その時代における社会現象として作りだすし、それはまた人間の個々の人生のあり方、その幸福に大きく関わっているからである。この観点から、本研究ではセクシュアリティを人々にとって重要な権利の一つとする、World Association for Sexual Health (前世界性科学会) と WHO の定義を参照する (PAHO・WHO・WAS 2000 ; WAS 2014)。それによれば、セクシュアリティは、生物学的・解剖学的特徴 (sex)、性自認 (gender identity)、性的指向 (sexual orientation)、社

会的文化的な性役割 (gender role)、エロティシズム、親密性等が関わって構築されている。これをさらに、本研究では分析のために以下のように整理する。我々は生物学的解剖学的特徴を有する身体をもち、性自認と性的指向を身体を用いて実践する（性別・性自認・性的指向が年少時に確定していない場合もある）。エロティシズム・性役割・親密性は、他者との具体的な関係性であり、その実践は社会的文化的な影響を受けつつ、人々の性自認（以下「ジェンダー・アイデンティティ」とする。）を支え、性的指向を充足させる。

以上のように、セクシュアリティは生物学的に定められた性欲ではなく、次世代となる子どもをつくれれば終わるものでもなく、まして社会保障制度のなかの高齢者ケアサービスを無償で担う親密な他者を獲得するための方便でもない。人として生涯を通じて重要不可欠な一要素であり、人々が他者と相互の存在を承認しあいながら育む実践的關係性である。これは人々の幸せに深く関わっているため、権利として尊重されねばならないが、その実践のありようは社会的、文化的、経済的等の諸要因と密接にかかわっている。

さて、セクシュアリティに関する規範はどの社会にも存在しており、それは普遍的なものではなく時代によって変化している。そのなかで、《いつ、どこで、なぜ、誰と、どのようにセクシュアルな関係を持つのが適当であるのか》という規範を、ギャニオンは性シナリオとよぶ (Gagnon 1977)。いわば狭義のセクシュアリティ規範である。この性シナリオ論を障がい者のセクシュアリティの考察に用いた平山 (1985) にならい、高齢者のセクシュアリティについて考えたい。このような適用が可能と考えるのは、障がい者のセクシュアルな欲求は他者によって否定され、実行に移すことが困難な場合が少なくなく、遺伝的な障害や、妊娠・出産後の育児や経済的問題などを理由として、彼らのセクシュアルな欲求は周囲の人々から好意的な印象をもたれないことも少なくない。社会から否定的に扱われるという点で、本研究で取り上げる高齢者の状況に類似していると考えからである。

性シナリオにある「いつ」とは、単に一日の中のどの時間帯にということだけではなく、どの年齢期間が性行為には適当かということも含まれている。最初に性交を経験する年齢は何歳頃が適当であるか、また、何歳くらいになったら性的魅力が失われるかというようなことにもその社会における一定の規範がある。高齢者の場合を考えると、社会規範によって決められた「いつ」に高齢者が含まれない場合、規範に沿わない行動をとる高齢者は社会的に批難されてしまうこともあるため、自分の人生とはいえ、社会規範を無視して自由奔放に生きることは難しいことが想像される。

また、性シナリオの「なぜ」「誰と」という部分については、生殖のため、という理由を当てはめれば人類存続という大義名分を掲げることができて説得力があるため、多くの社会がその説を好んで取り入れてきた。しかしながら、この説によると、社会に公認されるセクシュアルな関係は、妊娠・出産が社会によって望まれる男女でなければならないということになる。この理由により、これまでの性シナリオでは、高齢者は障がい者とともに除外され、その人々のセクシュアルなニーズは無視され抑圧される構成になってきたのではないかと考えられる。

結局、性シナリオの「誰が」という主役はどのような存在として想定されているのだろうか。社会において望ましいセクシュアリティの主役モデルは、若く、美しく、子どもをつくる能力をもつ人とされ、そこから外れた人は無性・中性として社会から抑圧を受けることになってしまうのではないか（東 1996）。

しかしながら、前述のように、セクシュアリティとは、生殖以外の多くの要素を含んでいる（PAHO・WHO・WAS 2000；WAS 2014）。狭義のセクシュアリティとして考えてみても、これにかかわる行為は、性器結合のみを指すのではない。肌と肌の触れ合いから得られる安心感や満足感、特定の人と身体を接触する親密的な充足感、性交の後に味わう緊張感のほぐれ、自分が男性（女性）であるという自己認識などを得られる行為でもある。その満足感が多岐にわたり、単に生理的な反応ではなく脳の反応、心理的反応でもあるため、セクシュアリティを実現する機会を失うということは（asexual というありようも含めて）、心理的満足感を味わう機会を失うことと直結し、セクシュアリティを抑圧することはその人をさまざまな意味において幸福な生活から遠ざけることになる。セクシュアリティの権利を失った人として扱われることは、自分は若い人より劣っていて醜く、自分のセクシュアルなニーズを表明したり、実践に結びつけてはならないと考えるようになるのではないか。そうした考えは、否定的な自己イメージを内面に構成し、機会があったとしても、自らがその機会を十分に活用できない結果を生じさせるだろう。こうした自己身体感覚は、その人のセクシュアリティに重要な影響を与える。なぜなら、他者との親密な関係は、ありのままの自分をさらけ出すこと、他者のそれを受容することによって進展する。特にセクシュアルな交流をするには、自分自身が自由で開放的でなければならないため、自己卑下はそうした自発的行為を妨害することになるからである。

しかし、現代日本について考えてみると、セクシュアリティはありのままの自分をさらけ出すことや他者のそれを受容することとしてでなく、ジェンダー・アイデンティティやジェンダー・ロールと深くかかわっているように思われる。たとえば、セクシュアルな関係における積極性や能動性は、社会が男性に求める男らしさとしての積極性や能動性と関連づけられている。セクシュアリティに関して受動的な男性は社会的に低い評価を受けることになってしまい、積極的で能動的なセクシュアリティにかかわる行為をすることは、男性の社会的評価をあげることにつながっているのではないか。また、社会保障制度が、男性に女性と婚姻し、子どもをつくり、妻子を扶養する能力を要請してきたことを鑑みるなら、セクシュアリティは経済力および生殖力と結びつき、社会的地位や社会的排除ともかかわっている。そのため、セクシュアリティは上述したような意味ではなく、男性としての社会的地位をあげるために行動として示すことが必要となっているのではないだろうか。高齢男性の場合、男性としての社会的地位を失いたくなければ、「まだ」男性であることを示すことが必要なのである。

では、性別としては男性である人が、「まだ」男性であるとか、「もう」男性でないということはどのような状態を指すのだろうか。次節では、男性であるということがジェンダー

としてどのように構築されるかということを見ていく。

## 第2節 ジェンダー・アイデンティティと男らしさを支える他者

### 1) ジェンダー・アイデンティティと男らしさの規範

ジェンダー・アイデンティティは、セクシュアリティの構成要素の一つで、もっとも狭義においては自分の性別に関する認識である（PAHO・WHO・WAS 2000）。この意味でのジェンダー・アイデンティティは生物学的特徴に付与されるものではなく、生物学的特徴と一致しないことがある。一致しない場合、ジェンダー・アイデンティティを変更するのは困難で、生物学的・解剖学的特徴のほうが外科的手術等によって変更されることもあることから、このアイデンティティは人々にとって非常に重要で、尊重されねばならないものだといえる。

他方、ジェンダー・アイデンティティは自己の認識として完結するわけではなく、社会がつくり出す男らしさや女らしさの規範と密接に関連すると考えられる。社会規範によって付与される社会的役割（性役割 *gender role*）が存在し、それと自己イメージ、他者から期待されるものと主観的なものが一致する感覚がそれを安定させる。社会規範は個々人の生活の中で培われるが、それは同時に個人を超えた存在でもあり、生きる時代や個人的な都合で変化する（コンネル 2000）。外見や振る舞いにはその人のジェンダー・アイデンティティが表出されると考えられるが（Money 1957）、そういった行為は規範によって方向づけられているのである（ギルモア 1994）。そして、男らしさは、社会が作り出す男らしさの規範と、個人が形成するジェンダー・アイデンティティの両方が折り合いをつけられる境界が規準として選択され、態度や行動として表出される実践であり、また社会規範であるから他者によるその承認が必要である。よって、セクシュアリティの研究には、個人を超えて社会規範として存在する性役割を理解すること、男性の周囲で彼のジェンダー・アイデンティティを承認する立場の人々のあり方、その関係性のなかで折り合いをつけ選択し性役割を表出する男性を考察することが必要であると考えられる。

さて、性役割として男らしさを論じる際、西欧ではいくつかの言葉が使われている。マンリネス（*manliness*）という言葉は、克己心、犠牲、奉仕といった道徳的に抑制のきいた男らしさを示すのに対し、マスキュリニティ（*masculinity*）は、男性の野性的な資質、高い生殖能力、闘争能力、筋肉質な身体を示し肯定するものである（Bederman 1995）。19世紀前半から概して否定的に捉えられていた男性の荒々しい資質は、19世紀後半から肯定的なニュアンスを伴って語られるようになった。19世紀末頃を境に、英語圏ではマスキュリニティという言葉を使って男らしさの再構築が議論されはじめた（小玉 2004：30；Bederman 1995）。

このように、男らしさの定義は時代や文化によって異なる。男らしさとは象徴的表象であり、文化的構築物である。日本では、近代以降に西欧から輸入した男らしさの価値観を基にして、つまりマンリネスからマスキュリニティに転換しつつある欧米の男らしさに対し峙しながら、日本特有の男らしさを構築してきたといわれている（小玉 2004：30）。日本

の男らしさの道徳は、道徳的な男性性の構築を課題にする男性論が展開されはじめるなど（福澤 1888）、一夫一婦制を支持する欧米に影響を受けて変化した（丹原 2004 : 131）。現代の日本社会において男性が評価される傾向として、福島（1995 : 100）は、高い経済力・行動力・決断力、強い信念を持っていること、意志が強いこと、を条件としてあげている。男性学では、男らしさを構成する主な要素として、伊藤（2000）が優越志向、権力志向、所有志向があると述べている。また、男らしさと性機能や性欲のありようが、男性のジェンダー・アイデンティティの形成において密接な関係にあることもわかっている。男性自身が男らしさを定義するときには性欲や性機能に関する項目があげられる傾向がある（Connell 1995）。ジェンダー・アイデンティティが性機能や性欲などセクシュアリティと強く結びつき、社会的に構築されるとすれば、彼らはどのような男らしさの実践によって、男性であることのジェンダー・アイデンティティを維持し、セクシュアリティを経験するのだろうか。まさにそこに、社会的なるものが現れるに違いない。

これまでの男性のジェンダー・アイデンティティについての研究によって、男らしさのイデオロギイ的な力は、社会の中での排除と包摂の力学に影響を及ぼしていることが明らかになっている。そのため、男性が男らしさの概念を無視したり全く意識したりせずに生きることは非常に難しいと思われる。ことに攻撃性など男らしさの度合いが高いとされる行為は、男性の立場を高くしたり、男性にだけ許可を与えられたりする文脈に強い影響を与えるとみられ、それらの男らしさを十分に持たないと評価された男性は社会的に排除される危険にさらされる可能性が高まってしまう（スコット 1992）。

そのような排除の権力作用のなか、男らしさとは個々の男性が自らの人生において社会的に好ましい評価を得るための振る舞いであると考えれば、「男」を演じる規準（ギルモア 1994 : 5）として男性が何を学び、何を強調して表現しようとしているかを注視することは、男性が内面化している理想像を構成する男らしさの概念の一部を表すことになるだろう。

また、男性がセクシュアリティについて学ぶときには、雑誌などのメディアが伝える情報に接することが多く、セクシュアリティの観念と密接な関係にあるとされるアイデンティティや男らしさの規範もまた、メディアを通して獲得される傾向があることがわかっている（Stibbe 2004）。記事は二種に分類することができ、メディアの伝統的規範に忠実な記事は規範を再生産・強化し（Knobloch-Westerwick et al. 2011 ; Stibbe 2004）、規範を風刺的に扱う記事は規範を更新・改定するという影響力が明らかにされている（Carpenters 2001 ; Benwell 2004 ; Rogers 2005）。では、現代日本において、高齢男性たちはどのようなメディアの情報のなかで生きているのか。

また、男らしさは、同じ社会に生きる者同士でもおかれた社会状況によってセクシュアリティに関する規範を变形させる。生殖を目的とするかどうか、未成年か成人か、未婚か既婚か、婚内性交か婚外性交か、そうした状況に対応したものを適用するのである。社会階層・人種・地域・世代などによって多様であるだけでなく、一人の男性の中にも複数の男らしさがあるとされている（Spector-Mercel 2006 : 68）。そこで、これらの先行研究の

知見をふまえ、現代日本社会での男らしさとはどのようなものか、経済力や優越性、社会的地位がどのように関わっているのか、それらがセクシュアリティとどのように関連しているのかを、高齢男性について、高齢男性の実践をとりまく社会状況から（第2章・第3章）、および彼ら自身の実践から（第4章・第5章）明らかにしていく。

## 2) 親密な他者の必要性

社会状況と人々による実践を考察するとき、欠くことができない存在は、それらの実践を承認する他者である。

これまでのジェンダー・アイデンティティ研究は、社会規範となっているステレオタイプに基づいた性役割を望むかどうか、受容しているかどうかを測定するものが多かった（石田 1994; 伊藤 2001）。そこでは異性愛かつシスジェンダーであることが前提とされており、男性が真の男性となりうるのは異性としての女性と出会った時で、異性との関係性においてジェンダー・アイデンティティは形成されていくとされている（鐘 2002）。また、恋愛経験や親密な恋人からの評価がアイデンティティを補強することも指摘されてきた。恋愛経験は異性とのコミュニケーション・スキルを向上させるとともに自分に対する信頼を高める効果があることや（菊池他 1994）、交際経験が多い人、複数の交際を同時進行した経験がある人、失恋経験が多い人は、注目・賞賛欲求や自己主張性が高いことや、自己愛傾向が強いことも明らかにされている（小塩 2000）。他方、アイデンティティが確立していない未熟な男性は、常に交際人数が多く、希薄な短い交際に終始する傾向があるとされている（北原他 2008）。これらの研究に共通するのは、ジェンダー・アイデンティティが狭義の生物学的・解剖学的特徴の認識にとどまるものではなく、異性愛というセクシュアリティ、およびその関係を成立させるためのセクシュアルに親密な他者（異性）を不可欠な要素として成立する社会的構築だということである。

また、伝統的な男性役割意識を問う調査においては、攻撃性、自信、強引さ、独立性、さらにストレスに対する安定度において女性より優位に立つこと、という事項が男性を高く評価すると意識されていることが明らかになっている（コマロフスキー 1984; Kaatz et al. 1970; Bell et al. 1970）。男性自身も、男らしさを、経済的扶養能力や親密な他者を保護する能力の高さ、生殖による家族の生産性と密接に関係づけて捉えていることが明らかにされている（ギルモア 1994）。

以上をまとめると、男性は男性であることを実践によって証明するために、セクシュアルに親密な他者としての女性を必要としており、さらに扶養や保護の対象として、また男らしさが社会的に優位であることに結びついている場合には劣位者として女性を必要としているといえる。特に、親密な異性から評価を得ることによってアイデンティティを補強しようとする行為が、恋愛である（北原他 2008）。異性愛と男らしさの社会規範が支配する社会で男性が親密な女性を獲得するためには、社会規範に同調して自身の男性としての魅力を高め、女性の関心を引くことが必要となる。すなわち、男性のアイデンティティを強

化するためには、女性の関心を惹く能力が必要となるだろう。このようなジェンダー・アイデンティティの不安定さとどのような関係があるのかは不明であるが、男性は一人でいることやパートナーがいないことを回避しようとする傾向があることや (Schrock et al. 2009)、異性を心理的支えとする傾向が女性よりも強いことが明らかにされている (伊福他 2008)。また、男性のアイデンティティは、特別な関係にある女性からの影響を受けやすく、特定の交際相手からの賞賛によって有能感を高めながら自信を獲得する傾向があること (北原他 2008)、恋愛における過去の否定的体験が異性に対する不安を生じさせやすいこと (富重 1993) などが指摘されている。

また、本研究にとって興味深いのは離別者についての研究である。離別体験から回復するためには女性よりも年数が必要で、男性のアイデンティティ回復には平均 2 年以上を要するという (池内 2006)。夫婦が離別した後の追跡調査においては、男性のセクシュアリティやネットワークに負の変化が顕著にみられた。離別した妻が男性の友人関係を連れ去ってしまうことになり、男性は社会的孤立を余儀なくされ、結果的に非常に限られた社会的援助しか受けていないという事例もある。また、男女のセクシュアルな関係についても、実際には、妻帯者の方が性交の頻度は高く性生活に満足しており、離別者は不満足な状態であることが明らかにされている (Felix et al. 2013)。

高齢者の場合、若い世代よりも離別を経験する可能性が高くなり、さらに加齢や退職、配偶者の死別等、高齢者ならではのアイデンティティの危機が考えられる。特に退職は、それまで長年アイデンティティを承認する役割を担ってきた職場のネットワークが失われることを意味するから、それに代わっての親密な他者としての妻との離別や死別は、高齢男性ならではの危機となるのではないか。また、戦後に労働者としての役割に専心してきた高齢男性は、生活面において家事能力が劣り、女性の支援を切望する傾向があるため、配偶関係を望むことが多いことも推測される。高齢男性は、親密な他者としての女性をどのように意味づけているのか、また危機はどのように乗り越えられるのか。これらは、当事者の語りから明かされるしか知る術はない。そこで、第 5 章では、特に高齢男性のなかで離別独身者と死別独身者とを比較する。

### 第 3 節 高齢者であることと男性であること

以上、セクシュアリティの概念をてがかりにして、ジェンダー・アイデンティティ、男らしさ、親密な他者との関係性などについて述べてきた。多くの男性のジェンダー・アイデンティティに関する先行研究は、生殖期の若い男性に関心をおいてきた。それらの知見から得られるものも多いが、高齢男性のセクシュアリティという観点からすると、残された課題があることがわかった。本節ではさらに、高齢男性の研究に絞りレビューする。

欧米の男らしさの研究における議論は、若い男性を主な対象にしており、高齢者を対象にはしてこなかった (Spector-Mercel 2006 : 68)。65 歳を過ぎると個性や属性、特徴を無視され、「老人」として認識されるようになる (Spector-Mercel 2006 : 75)。このような状



況の中、老人の男らしさはいかに扱われているのだろうか、そして年齢による性役割の差異は認識されているのだろうか。

結論から述べれば、これまでの研究では老人の男らしさに何が期待され、どう捉えられているのかなどは十分に解明がなされていない。なぜなら、老人は男性ではないとみなされていたため、男らしさの調査の対象にもされてこなかったからである。

一般的な老人のイメージに関する調査の回答でも、男らしさに関するものは見当たらないという結果が多い (Brewer et al. 1981 ; Hummert et al. 1995 ; Kite et al. 2002)。ある高齢男性のイメージ調査では、若い男性の男らしさの特徴としてあげられている男性的形質、習性、身体的特徴は、老人男性の特徴としてはあげられず、老人のイメージには性別の属性よりも年齢の属性の方が影響を及ぼしていることが明らかにされた (Kite et al. 2002)。他の年齢と男らしさの関連に関する調査では、大学生に、一人の男性の年齢の異なる 3 枚の写真を見せたところ、年齢が上がるにつれて男らしさに関連した属性を減らしていると述べられ、加齢と男らしさは反比例するというイメージを持つことが明らかにされている (Levin 1988)。

また、いくつかの研究によって、若者が男性を老人であるかどうかを認識する際の重要な判断基準として、その社会にあるセクシュアリティの規範を用いる傾向が示されている (Canetto et al. 1995 ; Deusch et al. 1986 ; Zepelin et al. 1986-87)。例えば、若者が老人に対して持っているマイナス・イメージとして、加齢による生理的側面や役割喪失があげられた。こうした老人のイメージは「ああはなりたくない」という若者自身の将来の自己像が重ねられて述べられたと考えられる。この調査からは、年をとると男らしさはどんどん減少すると捉えられていること、年齢規範が高齢男性を青年よりも社会に受容されにくくしていることなどが明らかにされた (Thompson 2006)。このように、高齢男性の男らしさの扱われ方には社会規範が関与しており、年齢規範が高齢男性の女性とのセクシュアルな関係性を含む男らしさを否定する作用が明らかにされている。

ところで、20 世紀半ばから、高齢者の加齢過程に関する研究が老年学の領域で盛んになされてきたが、ジェンダー学領域との交流研究はなされてこなかった (Spector-Mercel 2006 : 75)。老年学は、「老いを生理的変化と捉え」、「老人を暦年齢で規定し」、「老いは社会問題であると考え」、「量的、統計的調査が主流であり」、「老化のプロセスは基本的にどこでも同じだと考え」てきたのである (片多 2004 : 223)。

対して、人類学は「老いもまた文化的に作られる」、「年齢を数えない社会にも老人はいる」、「多くの老人は役割をもち生き生きしている」、「老化はダイナミックなプロセスで、人は皆同じようには年をとらない」などの事実をフィールドワークから把握しており、また、小さな社会で質的調査を行うことが少なくないため、老いの見方、捉え方が幅広く多様である。例えば老年医療において、中国ではどの年齢の患者に対しても病は陰陽のアンバランスからくると捉えられ、そのバランスを回復すれば健康を取り戻すという診断がなされるが、アメリカでは高齢者の病は年のせいだから治療できないと医師が診断すること

が珍しくない (Kertzer & Keith eds. 1984)。

アメリカのような高度産業社会では、生産、労働、若さ、という価値志向を強く持つ文化であるため、老後も青年時代や壮年時代と同じような価値体系なり人生目標を維持し持続させようとする者たちは、その多くが結果として老後不適応現象を起こして精神疾患に陥る危険性が高いと分析されている。老後生活にうまく適応するためには、青壮年時代の価値や目標を一段下げるなり、肉体的・精神的衰えを素直に認めて行動範囲を狭めるとか、仕事や責任の量を少し減らすなどの作業が必要であること、また、アメリカ社会には高齢者層に特有の、その社会の中心的価値とは異なる、そこから幾分ずれた所に別の価値構造、すなわち文化があり、それは再社会化の過程で獲得されていくものと分析されている (Clark et al. 1967)。

いずれにせよ、高齢者がいない文化はなく、それぞれの文化に人が高齢者になり、高齢者であることを示す文化的規準がある (Linton 1942)。つまり、それぞれの文化に独特の、成人から「老人」のような別カテゴリーへ移行する規準があり、リントンは、その基準を「文化的老人線」と呼んでいる。そして、それぞれの文化は期待されるべきライフサイクルの標準的なモデルを持ち、一定の年齢において期待される、一定のモデルがあることも明らかにされている (Spector-Mercel 2006 : 70)。多くの社会では、文化的老人線として生理的变化、とりわけセクシュアルな行為と排泄の行為が大きな基準として用いられている。現代の欧米や日本では、人工的な生殖技術や種々の医薬品によって、セクシュアルな能力を延長できるようになっているため、その境界線は曖昧になっている (片多 2004 : 236)。たとえば現代、男らしい容姿やセクシュアルな機能を維持し高める医療技術や薬剤が多数用意され、どれもが容易に入手できるようになっている。男らしさやセクシュアリティに対する一定の自由と権利が個人に認められていることが明確に示され (WAS 2014)、社会でそれらを利用するニーズは確実に増加している<sup>1</sup>。

「はじめに」で言及した「定年退職」もこの「文化的老人線」の一つであるが、これも近年、日本型経営が崩壊するにつれて明確ではなくなってきた。日本の老いを通文化的に捉えた研究でも、日本の高齢者像は大きく変化してきていることが明らかにされている (Holmes et al. 1995)。人類学では、こうした境界線の定義などの男らしさの研究は多くなされてきたが、個人の内面に焦点を当てた研究や高齢者のジェンダー・アイデンティティの研究はあまりない。早くから男性の性別役割研究が行われてきたアメリカにおいても男子大学生を対象にした調査が多い。よって、文化的規準が流動するなかで生きる人々が、どのように「高齢者」であることを生きているのかを明らかにすることには、意義があると考えられる。

とりわけ、セクシュアリティというテーマから高齢男性を考察することによって、従来

---

<sup>1</sup> このようなアンチエイジングの医療技術についても男らしさやセクシュアリティに関連する社会規範と同様、それぞれの文化や社会において異なると考えられるため、それぞれの社会がそれらの医療技術に関する文化規範をもつ必要性も生じよう。

のセクシュアリティ研究にも高齢者研究にも見えなかった論点が明らかになる。それは、セクシュアリティの複雑な現象において、年齢というものが、重要な一つの軸をなしているということである。ウィークスがセクシュアリティの世界における支配と従属、対立と抵抗の軸として挙げる階級・ジェンダー・人種（ウィークス 1996：57）に、年齢を加えようとするのが、本研究の主張である。

以上から、本研究の中心的な問いは、異性愛の高齢男性にとってセクシュアリティはどのように生きられているかということである。この問いを探求するため、次の3つのリサーチクエスチョンを立てる。①高齢男性が生きる現代日本は、高齢男性についてどのような性シナリオを持っているのか、②高齢男性は、自らのセクシュアリティをどのように捉えているのか、すなわち、自らをセクシュアルな存在としてどう生きたいと考えているのか、③その意思と社会に内在する規範は一致しているのか、もし一致していない場合にはどのように対処しているのか、である。これらについて、本研究は社会規範をあぶり出すためのメディア言説分析（第3章と）、高齢男女を対象としたインタビュー調査という手法（第4章・第5章）をとり考察を行う。いずれにおいても、本研究は、社会規範は人々の言説によって構築され改訂され続けているという社会構築主義的立場に立つ。

セクシュアリティと男らしさの研究においてこれまで軽視されがちであった高齢男性に焦点を当てることと、高齢男性本人の意識を聞き取ることに、本研究の意義がある。そして、第2章以降で詳しく論じるが、高齢男性を取り巻く環境は、高齢男性が配偶女性を求める姿を肯定的に捉えない、積極的に推奨しない傾向がある。しかし、当然のことながら、男性は年齢にかかわらず男性としてのジェンダー・アイデンティティに一貫性をもっているため、高齢男性が求めるセクシュアリティや理想とする男性像と社会が期待する像が異なっている可能性が高い。セクシュアリティに関する様々な欲求についても、生きていく限り消滅しないという調査結果もあり、実態と社会がつくりあげた理想像には大きな食い違いがみられる可能性が示唆される。そこで、高齢男性自身の意識、実際の欲求や行為を調査し、齟齬がどのようなものであるかを調べるのがなおさらに必要であると考えられる。これらの、当事者へのインタビューを通して彼らの実践としてのセクシュアリティを明らかにすることが、本研究の最終的な目的である。次章では、第3章以降でデータを分析するための作業として、日本社会における高齢男性にかかわる諸研究を中心にレビューしていく。

## 第2章 日本社会の高齢男性へのまなざし

### 第1節 「高齢者」としての人生の危機

#### 1) 定年退職

「文化的老人線」、すなわち人々が「高齢者」のカテゴリーに入る規準は社会によってさまざまである。日本に伝統的な「隠居」制度は、高齢者自身の肉体的衰への自覚などを契機に自発的に行われ、その後の高齢者自身の新たな役割が明確であった。隠居後は、イエ制度において家督を譲り、祖先祭祀での役割が決まっておき、生産的立場から宗教的立場への移行が行われることになっていた。それらを支えるものとして、日本には東アジアと共有の高齢者に肯定的な敬老文化があったと言われている（小松 2002）。

60歳を「還暦」として迎える儀式もその一つと考えられる。これは伝統的の死生観と接合しており、その儀式は地域の祝いとして行われ、高齢者自身が死に向き合う契機となったといわれている（柴田 1985）。「還暦」を迎えることは、前近代には平均寿命からして長寿を意味し、高齢者となることを祝うものである。しかし、これを一つの人生サイクルの終了と見做す棄老文化だという主張もあり（宮田 1996）、それが高齢者は死の近くに位置した社会的役割をもたない存在とみなされる原型になったという説もある（小松 2002）。

また、かつては親孝行などの価値観の植え付けのために、敬老の日に地域の首長による高齢者訪問が行われた例もある。しかし現代では、長く生きているということ自体が尊敬に値する時代ではなくなってしまったため、それらは表面的儀式になってしまったり、あるいは100歳以上の高齢者のみに限るなど、高齢であることの社会的価値は希薄化している。日本の老いを通文化的に捉えた研究でも、日本の高齢者像は大きく変化してきていることが明らかにされている（Holmes et al. 1995）。かつては祖先祭祀という重要な役割を担う尊敬された存在であった高齢者は、現在その地位を失いつつあり、若者とのコミュニケーションすら失う傾向にある。伝統的な生活に関する知識は社会で必要とされることは少なくなり、日本人のアイデンティティにほとんど影響を与えることがなくなってきている。

現代では、イエ制度や地域社会における「隠居」等の制度は失われ、そのかわりに定年退職制度がある。これは、老後の生活保障という意味をほとんどもたない退職金と、強制解雇という二重の意味をもち、戦後の高度成長期に行われた産業構造の再編において労働者の世代交替を保障するとともに、退職後には年金制度に接合して子どもによる扶養負担をなくそうとする制度であった。その後、1980年代半ばに行われた行政改革や、1990年代初期のバブル経済崩壊の不況というできごとが、定年後の余生を悠々自適に安楽に過ごすイメージから遠ざけた。もちろん、生業を定年のない自営業主として、地域社会に根付いた生活を送ってきた男性は、高齢期にまた異なる経験をすることになるだろう。しかし、就業者に占める雇用者の割合が60歳で約8割を占める現在（国立社会保障・人口問題研究所編 2014）、定年退職は大多数の男性にとって、いまだ大きな危機的機会であるといえる。

くわえて、寿命は伸長して 65 歳の退職後の男性の平均余命は約 22 年で、「高齢者」としての人生は誕生から成人するまでの 20 年間を超える長さとなっている（国立社会保障・人口問題研究所編 2014）。

国の政策においても、高齢者の扱いは時代とともに変わってきた。老人福祉法（1963 年制定）の第二条においては、老人は社会に貢献してきた敬愛すべき存在であるとうたわれていた。その後 1970 年代初期には、上述した高度産業社会の米国と同じように高齢者を弱者として囲い込むべきだという風潮があったが（厚生省 1974）、急速な高齢社会化と 1999 年の世界高齢者年を境に、高齢者を捉える視座を「支援」から「自立」に転向して高齢者の自立を促す姿勢をとるようになり、対等な存在として社会に積極的に取り込むべきだという考え方に变化した（内閣府 1999）<sup>2</sup>。まず、高齢者に対する世間の見方を変えるために、高齢者の分類定義を 65 歳から 100 歳までと幅を持たせ、その中で介護を必要とする高齢者に対して介護保険制度を開始させた（内閣府 2000）。

さらに、欧米からの影響を受け、2003 年に「年齢にかかわらず均等な機会を与えるよう努めなければならない」という努力目標を雇用対策法のなかに掲げた。2004 年には「改正高年齢者雇用安定法」を、2006 年には定年を 65 歳にするか定年制を廃止するかを選択を義務化する流れとなった。また、高齢者が他世代と比較して決して劣る存在ではないことを強調したうえで（内閣府 2003）、健康な高齢者に対しては豊富な経験を地域社会の子育て支援に活用するよう求めた（内閣府 2006）。さらに、健康な高齢者が、孤立してしまう高齢者や支援が必要な高齢者の支え手になるよう期待を寄せられるようになってきた（内閣府 2007 ; 2010）。

さて、定年退職が男性にもたらすものは、それまで仕事によって成立していた人間関係の喪失、それによって承認されていたアイデンティティの喪失、そして収入の喪失である。収入は年金によって一定程度保障されることになるが、人間関係とアイデンティティの代替を地域や家庭で得ることは、一朝一夕では難しい（西村 1993）。ジェンダー規範は、近代産業社会である日本においても、男性は強者で女性は弱者と位置づけてきたが、定年退職によって生産の場から排除された高齢男性は、女性や無収入の専業主婦と同じカテゴリーに入ることを余儀なくされ、それまでの稼ぎ手・扶養役割と職業上の地位というアイデンティティの中核を一気に失う。近代産業社会が公的領域から排除してきた対象には、女性だけでなく、高齢者も含まれていたのである。性役割に沿ったライフコースは、定年後の男性にアイデンティティの不連続をもたらす。

その後、幸福感が減少する男性は少なくない。男性たちは、「近代産業社会の原理によりよく適応した分だけ、定年後の生活との落差は大きくなり、それが男性の老後を生きにくくしている」（天野 2003 : 255-282）。男性に課された性役割を担い、近代産業社会の原理に適応努力を行ってきたのに、定年退職後の人生においては、全く別の役割・社会に適応

---

<sup>2</sup> 副田（1986）はこれらを「離脱理論」「活動理論」とし、政策が前者から後者に変化したと述べている。

努力が求められるのである(多賀 2001)。帰属する社会は産業社会から地域社会へと移行し、付き合う人間関係が一新されることが多いということも男性に負荷を与える(高橋 1980、岡村 1992a)。この危機的な変化を下図に示す。

近年、定年退職の年齢基準は 60 歳から 65 歳に移行しつつある(内閣府 2013)。これらの制度には通過儀礼としての意味もあり、企業や国家からは定年退職者への感謝状の授与、慰労会の開催、などが行われる。しかしながら地域社会においては、受け入れの儀礼も義務もないに等しく、退職金や年金はそういった新しい社会での社会的身分や役割の保障にはならない。退職後の新たな地位や役割を保障したり、その移行を促したりするような通過儀礼はないのである。高齢男性が職場との関係を失うことにより、重要な社会関係が妻、家族や地域社会になるわけだが、地域社会との関係はこれまでの男性としての生き方の結果として往々にして希薄であるから、親密な他者である妻の重要性が高まると推測される。

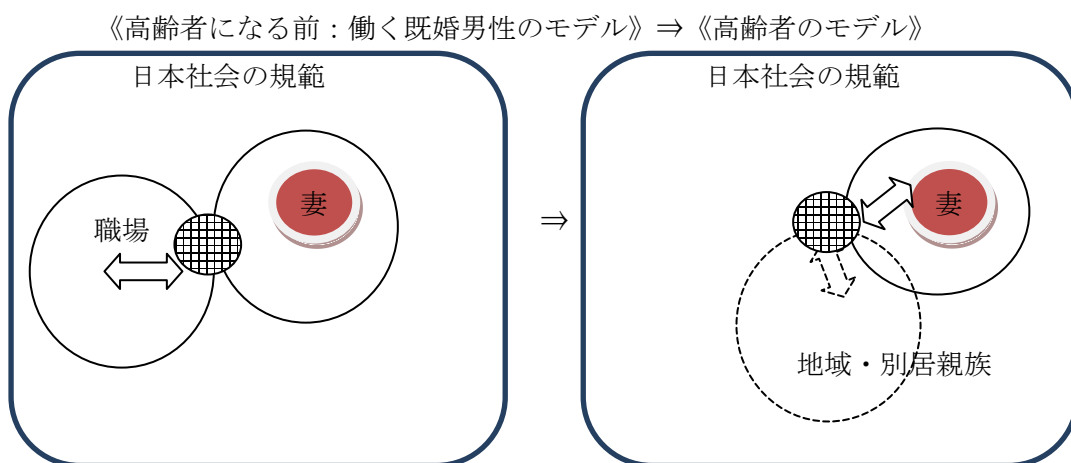


図 2-1 「高齢者」への移行モデル

(⇔は男性にとってアイデンティティを承認してくれる他者との関係)

定年退職後の男性がこの変化に対処する方法として、幾つかの可能性が考えられる。あらたに職場を見つけることによって「高齢者」へ移行しないようにすること、退職を受けて地域や家庭での役割を見出すこと、また後者の場合にこれまでの自己の性役割を保持する場合と、性役割のあり方を変革する場合が考えられる。

この最後の対処方法について、関村は、退職後のサークル活動を契機に男らしさの捉え方が再構築された過程をライフストーリーから読み取った。その結果、生産領域から離れた男性は、これまで女性の性役割であった家事やケア労働など再生産役割の分担意識や態度を変化させることで、地域社会の構成員としての承認を求めていることが明らかになっている(関村 2009)。このように、高齢期に男性の性役割行動が自発的に変更されることもある。発達心理学において、高齢期には性役割が変化するという性役割逆転理論と両性性理論の 2 つの理論がある。男性は性役割の逆転がみられることが示され、その理由として、

それまで規範によって抑圧されてきた願望、すなわち養育的、受身的な立場になることが許され、性役割から解放されたとプラスに感じることがあげられている (Gutman 1997)。また、高齢期に両性性を獲得しえたものほど自尊心が高いことがわかっている (下仲他 1990)。これらの研究から、性役割を変化させたいという願望を持つ男性もいることが明らかにされ、そういった男性の役割変更は、外側から強制的に押し付けられたものではないために幸福感を上昇させることになっている。

いずれにしても、高齢男性にとっては、配偶者と地域社会・親族がその新しい生き方を承認することが必要となる。配偶者への依存関係は、生活、価値観、交友関係、ライフスタイルなどによって多様ではあるが (上野 2009 : 33)、政府の調査では、高齢期に配偶者に依存的になりがちであることがわかっている (総務庁 1996)。依存度は特に高学歴、家事能力の低さ、夫婦愛意識の強さ、と高い相関を示していることが指摘されている (松田 2001)。

## 2) 配偶者との死別

そこで、高齢男性にとっての第 2 の危機として、そのような重要性をもつ配偶者と死別した場合を考えねばならない。

日本人の寿命の伸びは長い高齢期をもたらす、その間に配偶者を亡くす経験をする人も少なくない。国勢調査 (総務省統計局 2005) によると、60 歳以上で配偶者を亡くした女性は 7,016,711 人 (60 歳以上女性人口の約 36.5%、60 歳以上総人口の約 20.5%)、男性は 1,331,890 人 (60 歳以上男性人口の約 8.8%、60 歳以上総人口の約 3.8%) であった。配偶者と死別した女性の割合の方が男性より多いため、日本では、配偶者を喪失した高齢女性を取り巻く人間関係やサポートへの関心が向けられ、その研究は多くなされてきたが、高齢男性に関する研究はあまりない。

配偶者と死別した高齢男性の単身世帯は、女性高齢単身世帯と比較すると少ないが、それは平均寿命の男女差や、死別後に子どもと同居を開始する男性が多いことが影響していると考えられる。国立社会保障・人口問題研究所 (2003) によると、60 歳以上の単身世帯は、2005 年から 2030 年までの間に 2 倍以上に増加すると予測されている。男性単身世帯ではあっても、現役で職に就いている場合は組織のサポートや交流する人物は確保されるが、定年退職後はそれらが途絶えることで問題化される。健康面では職場の健康診断を受検する機会を失うことで健康管理が手薄になり、社縁の減少があったとしてもそれまで関わりをもたなかった地域社会とのつながりは希薄なままというケースも少なくない。

そのため、現在、定年退職後の単身男性の孤独が社会問題化してきている。高齢男性単身者の自殺率は女性の二倍以上を示し (内閣府 2013)、その精神的ケアやサポートの方法が模索されている。また、火災による死亡率も 65 歳以上の男性単身者が 64.5% を占めていることから (東京消防庁 2010)、男性単身者の生活技術やその能力の不足への対応策も講じられている。現代の長寿社会においては、男性が妻を看取り寡夫になる可能性も増加すると考えられるため、こうした問題への対策は必須となっている。

配偶者と死別した男性についての先行研究としては、悲嘆からの立ち直り過程やそのための支援策（小此木 1983）、残された方の生活保障や福祉・介護に関する研究（袖井 1993；岡林他 1999）、依存対象の移行、親族関係などネットワークの変化に着目する研究（森岡他 2007）や、配偶者の有無が生活幸福度の関係に着目したものなどがある。

夫婦は一定期間の共同生活や親密関係を経ており、介護等のケアはおもに配偶者間で行われていることから（春日井 2003）、死別の際の悲嘆は大きいといわれている。親しい家族と別れる悲しみへの適応や役割移行に関する研究からは多くの知見が得られている。健康な生活を脅かす社会的ストレスの指標において、配偶者の死は 100、離婚は 73、別居は 65、けがや病気は 53、退職は 45 と数値化されており（Holmes et al. 1967）、死別や離別などパートナーとの関係性の変化はストレスとして最高（悪）得点を与えられている。高齢期は、配偶者の死、定年退職後の離婚や別居、けがや病気が他年代より多く経験されることが予測できるため、アイデンティティが不安定な状態にある高齢者も少なくないだろう。死別後の孤独感の解消・減少については、男女ともに、非親族によって解消される傾向にあることや、子どものいない人は心理的安定感が低いことがわかっている。死別後 4 年で新生活を始めることができるようになる人が多い（赤澤他 2008）。

配偶者を亡くした高齢者の死別後のネットワークについての研究では、既存の人間関係のなかのどの親密な関係を強化させるかをみるものが多い。その対象は、実子やきょうだいなどの親族、および、社縁や地縁などの非親族、などに絞られ、既存のネットワークをいかに再編し新生活に適応していくのかに焦点が当てられてきた（岡村 1992b；玉野 1991；古谷野 1992；前田 1993；赤澤他 2008）。実子や実母の介護を引き受けねばならない男性もいるし、実子やきょうだいに依存するようになる男性もいることがわかっている。

他方、女性については、数十年前の調査ではあるが、夫との死別がその後の妻の孤独感に大きな影響を与えないことを明らかにした結果もあり（湯沢 1986；厚生省社会局 1973）、こうした結果を導いた理由として結婚制度内における性役割が女性に対して厳しいものであるということが挙げられている。より近年の高齢者夫婦に関する研究をみても、日本の高齢者夫婦に関する研究には、情緒的関係の指標として、行動次元（コミュニケーション行動、役割行動）で捉えたもの、意識次元（結婚満足度、役割意識）で捉えたものがある（袖井他 1985；高橋 1990；河合他 1991）。定年退職後の夫婦を対象に、生活変化と結婚満足度の変化を 4 年間隔で調査した研究（高橋 1980；袖井他 1985）や、都内公団賃貸住宅居住高齢者を対象とした調査もある（高橋 1991）。おおむね夫婦共に結婚には満足しているが、その満足度に性差があり、男性の方が高い満足度を示したこと、夫婦間の会話量が妻の満足度に大きな影響力があることなどが示された。

死別かどうかにかかわらず、配偶者の有無による幸福感の変化をみた調査においても、性差があることが明らかになっている（前田他 2009；古谷野 1992）。女性は配偶者が無い方が幸福度は上昇するが、男性はパートナーが無い群の幸福度は低い（岡村 1992a）。高齢者にとって親密な他者の存在の重要性を考察するとき、ジェンダー規範を配慮しなければ



ならないゆえんである。

しかしながら、これらの先行研究において、高齢者が死別した配偶者に替わるあらたな配偶者を得ているかどうか、婚姻せずともセクシュアルに親密な他者を得ているかどうかということや、配偶者を得ていない場合に実子と同居しているにもかかわらず生じる孤独の感覚については、ほとんど明らかにされていない。

これを日本に普及している夫婦家族制の視座から考えれば、核家族は、子どもの結婚と、配偶者の死をもって、小集団ではなくなる。配偶者との死別は、高齢者自身が形成した生殖家族を失うことになり、配偶者喪失高齢者は、地域社会やきょうだいなどのネットワークに投入されることになるが、高齢期の幸福感の高低を左右するのは、家族や親族よりも友人関係であることがわかっている（直井 1990）。高齢期の間関係の再編成の際に、古い友人と同世代の友人を人間関係に組み込んでいく傾向にあるのは、共通の時代背景をもつからである。再編成に、きょうだい関係が重要な位置を占めるのは（藤崎 1998; 安達 1999）、きょうだい関係が同世代の友人の機能を果たし得るからである（アラン 1993）。また、配偶者を亡くした高齢者が依存関係の再構築を、実子とのあいだで望むこともある。だが、核家族の自律性規範により、夫婦の問題すなわち男女のダイアド関係は、一つのカップル単位の中で解決すべきだと考えられている（野々山 2007）。すなわち、子どもは独立した別の家族の主要な成員であるので、親が子の生活を脅かすような依存関係を形成すべきではないという考えに至ることも少なくないようだ。

以上をまとめると、これまでの調査研究において、日本では高齢男性は高齢女性よりも、配偶者への依存度が高く、死別による悲嘆が大きく、無配偶や無子の場合には幸福度が低いという結果があり、高齢男性にとって特に親密な他者としての配偶者の重要性が示唆された<sup>3</sup>。くわえて、夫婦家族制という価値観から、かつてのような三世代世帯のように高齢者が実子に依存することは選好されなくなっている。よって、ますます高齢者にとっての配偶者、あるいはそれに相応するセクシュアルに親密な他者の存在が重要になると考えられる。にもかかわらず、セクシュアリティを考慮して配偶者喪失後の新たな異性との関係に焦点を当てた研究は見当たらない。高齢者が、死別後に新たな異性と親密なセクシュアルな関係を結ぶ場合、再婚というかたちと、再婚しないで親密な関係を結ぶかたちがありうるが、いずれについても先行研究が存在しないのである。

その理由として、高齢者の余命が一般的に残り少ないとみなされてきたことや、研究者自身の年齢規範によって結婚が生殖をおこなう《高齢者になる前》の人々の行為と考えられていて、再生産に繋がらない高齢期の再婚が関心をもたれないことなどが考えられる。実際には、高齢期の性的行動は生殖を目的とすることが少なく、生活の相互支援や親密性の強化を目的として結婚を望むことがあるようだ（高橋 1984）。セクシュアリティにかかわ

---

<sup>3</sup> こうした傾向は現代社会の熟年離婚やいわゆる「ワシも族」（生活場面で判断を下さず、「自分も」と言って妻に従い行動する夫）という現象の牽引力となっているといわれている（石蔵 2011）。

る欲求が無くなるわけではなく、配偶者との死別後、特に男性に不満が募りやすいことを指摘する研究もある（荒木 2005）。それにくわえて、高齢者のセクシュアリティに対する社会的偏見や高齢男性自身の身体機能の変化などが恋愛に踏み出す際の足かせになることがある（Nakahara 2010）。また、高齢者の親族にとって、高齢者の再婚は新たな家族メンバーを迎えることになるが、必ずしも結婚制度でつながる必要がないと考えられがちである。なぜなら、現在の結婚制度は、夫婦間に生まれた子を保護するための制度が主となっており、夫婦の絆を保障するものではないからである。高齢者に限らず、個人主義の結婚が主流化している現在、夫婦をつなぐものは愛や性愛といわれる感情のみで、いつ解消するかわからない不安定さを常に含んでいる親密関係といえる。現代における結婚の不安定さ自体が、生殖という目的をもたない高齢者の再婚を阻んでいるのではないだろうか。

そのような社会のなか、配偶者を失って特定の異性との長期的な親密性を形成することを望む男性は、どのようにその相手を獲得し、その関係性に何を求めているのだろうか。人生の伴侶を失った高齢者にとって、家族の位置づけ方や今後の人生設計、およびセクシュアリティの捉え方は高齢期といえども、否、高齢期であるからこそ大きな課題なのではないだろうか。

## 第2節 高齢男性をめぐる親密なネットワーク

### 1) 高齢者の社会的ネットワーク

第1章では、日本で男性が男性として生きる際、さまざまな理由から女性を必要とすることを指摘した。さらに、本章第1節では、男性は定年退職のような高齢者カテゴリーへの移行期に特に親密な他者として女性を必要とするであろうこと、また死別や離別が高齢女性より高齢男性にとって危機となる可能性が高いことが示唆された。そのことから、セクシュアルに親密な関係を他者と結ぶセクシュアリティは、高齢男性のより良い生にとって非常に重要な役割を果たすであろうことが推測される。

くわえて、すでに考察したように、高齢男性は数十年間を男性として男らしく生きてきた存在であるのに、年齢規範はその男らしさの規範と相反する要求を彼らに「高齢者だから」といつて突きつけるものであるから、その矛盾を生きねばならない。よって、高齢男性が直面する、セクシュアルに親密な他者との関係性の問題を考えていくことが重要である。

しかしその点を論じる前に、本節では社会的ネットワークについて、先行研究の知見を整理する。なぜなら、高齢男性は異性の配偶者だけと社会関係をもつわけではなく、本来、1人の社会人としてより広いネットワークをもつはずだからである。本項で現代日本におけるその現状と問題点を考察したうえで、次項でその環境下にあるセクシュアリティとセクシュアルに親密な他者との関係性を考察していく。

社会的ネットワークとは、個人の社会的ニーズを充足することを助ける人物をさす（Meeusen2006:37）。日本の高齢者の社会的ネットワーク研究には、生き甲斐（金子 1987）、

満足感(杉井他 1992)、モラール(平野 1998)、孤独感(小窪他 1998)、健康度(笹谷 2000 ; 2003)などの視点から主観的幸福感につながる要因を解析するものが多い。1980年代からは親族に限定しない非親族ネットワークの研究も増えたが、1990年代後半までの都市部における調査から、日本の高齢者は家族依存が強いという日本的特質が明らかにされている(藤崎 1984 ; 笹谷 2003)。

これは、日本にはこれまで老親を同居によって扶養する慣行が存在したため、独居となった高齢者は、社会的ネットワークや社会的サポートを欠き孤立した状況にあるとみなされ問題視されている。たとえば1970年には、65歳以上人口の約8割が配偶者以外の親族(子どもや子ども夫婦、孫等)を含む世帯で暮らしており、単独世帯は6%だったが、2010年には前者は43.7%に減り、後者は16.4%、高齢者夫婦のみの世帯が33.7%に増加している(国立社会保障・人口問題研究所編 2014)。

また、2005年の総務省調査によると、高齢者の18.9%が子ども家族と同居しているが(総務省統計局 2005)、同居していても孤独を感じている高齢者もいる。そこには高齢者への敬愛意識の希薄化などの影響があると言われている(湯沢 1986)。そのため、物理的に孤立していない状況にある高齢者に対しても社会的支援の必要性を考えねばならない。

他方、超高齢化社会に突入した2007年頃から、高齢者の孤独死の急増が問題視されるようになった(URL 都市機構 2007)。その背景にも、社会的に孤立しやすい独居高齢者の急増があげられる。今後、未婚者の増加が見込まれていることから、独居単身者の割合が高くなり、この現象はさらに悪化すると予想されている。

独居と孤立と孤独は必ずしも同じではないが、高齢者の社会的孤立と孤独は、関連付けて議論されてきた。先行研究の結果には、両者に相関があるというもの(藤原他 1988 ; 高橋 1990 ; 岡村 1992a)、両者に相関がないというもの(タウンゼント 1957 ; 一番ヶ瀬編 2004 ; 則定他 2009)がある。前者は、社会的ネットワークの欠乏が孤独につながることを示し、後者は、社会的ネットワークの質や量にかかわらず孤独は生じることを示している。

そこで、高齢者に必要なネットワークには以下のようなものが挙げられている。血縁関係以外の社会的サポーター、古くからの友人、対面して交流できる血縁関係(藤原他 1988)の存在である。これらは、高齢者の孤独感を低減させることが明らかにされている。すなわち、高齢期のありのままの自己を理解し肯定してくれる人物、依存したい時に容易に対面可能な人物、高齢期に入る前からの自己を連続的に捉えてくれる人びとが必要なのである。

実際には、日本の高齢者の社会的ネットワークは、親族と非親族の双方にわたり、社会参加を積極的に行いながら、その交友関係を形成する傾向にある(前田 2006 ; 安達 1999)。小窪他(1998)は孤独感が、非親族との付き合い、地域への愛着と強い関係にあることを明らかにし、笹谷(2000)はネットワークの質・量が幸福感と密接に関連し、過疎地と大都市の地域差とジェンダー差があることを明らかにした。高齢期になってからの新たな社会的ネットワークの再構成は難しく(藤原他 1988)、特に男性は、定年退職や配偶者との死

別というライフイベントの後に新たなつながりを作り出すことができず、社会的に孤立しやすい傾向がある。

## 2) 単身で暮らす高齢者と社会的孤立

単身で暮らす高齢者（以下「シングル高齢者」とする）の社会的孤立や孤独に関する研究は、社会的ネットワークの形成規模、人間関係形成に関する傾向をみるものがある。

まず、高齢期には社会的ネットワークは徐々に失われて孤立する傾向に向かい、その結果孤独感が高まると考えられている（金子（勇）1987）。ここでいう孤立とは、「家族やコミュニティとほとんど接触がない状態」をさす（Townsend 1963）。孤独感とは、仲間づきあいの欠如や喪失によって好ましからざる感じを持つに至る状態をさし（タウンゼント 1974：227）、社会的相互作用の不完全に由来する主観的な不快感や苦痛を伴う経験をさす（日本健康心理学会編 1997）。社会的孤立は、これまで主に高齢者の問題として扱われてきた（河合 1996；河合他 2007；斎藤 2006；2007；UNH 2005）。それは、孤立の発端となりがちな死別というライフイベントを経験する割合が高いことがその要因として考えられる。

また、シングル高齢者の社会的ネットワークや孤立・孤独という点に注目した研究<sup>4</sup>では、実子やきょうだいなど親族との同居の割合、別居親族との接触頻度、非親族との接触頻度などを調査するものが多い（湯沢 1986）。高度成長期以降、地縁や血縁も希薄化しているため（中川 1982：49-50）、高齢者の他者との接触頻度も低下傾向をみせている。しかしながら当のシングル高齢者への意識調査によると、家族や親族との付き合い観は「時々会って食事や会話をするのがよい」とする割合が高く、高齢者自身が以前の3世代同居を望まない傾向も示唆されている（総務庁 1997；玉井 1990）。

また、社会的孤立の問題は、社会的ネットワークの形成と同様に男女に違いがあり、特に男性に生じやすいといわれている（河合 1996；2006；斎藤 2006；2007；UNH 2005）。女性は近隣や友人も含めたネットワークを形成する傾向にあるが、男性は配偶者を中心とした狭いネットワークを形成する傾向にある（笹谷 1994）。その結果、男性は女性と比べて友人が少なく、得られる社会的サポートも少ない（UNH 2005；笹谷 1994）。これは、高齢男性の社会的ネットワークが配偶者や過去の職縁に限定されがちだからである（野辺 1999）。とりわけ配偶者を亡くしたひとり暮らしの孤独な高齢男性と、配偶者に限定しない多様な

---

<sup>4</sup> こうした社会的孤立に関する社会学的調査には、しばしば、社会的ネットワークの数や交流頻度が指標として使われてきた。対面的接触回数（タウンゼント 1974[1957]）を問う質問紙調査が多い。通信や交通の発達に伴う人間関係の変化を受け、電話での交流頻度（浅野 1982、後藤他 1991）、メールやウェブでの接触頻度（内閣府 2010）を問うなど調査指標も変化している。しかしながら、一人で過ごす時間や一人暮らしを自発的に選択する場合もあることを考えると、孤立と孤独が必ずしも連鎖しているとはいえない。具体的には、一人暮らしで友人はいないと回答していても孤独だと感じていない人もいるし、逆に、友人の数は100名を超しているし実子家族と同居をしているのに孤独を感じている人もいる（Nakahara 2010）。

ネットワークを利用しながら生きる高齢女性の違いは顕著で、この性差については海外の研究においても同様な知見が報告されている(笹谷 1994)。また、女性は親族との交際頻度、男性は友人との交際頻度が、主観的幸福感に影響することも明らかにされている(直井 1990)。そのため、男性は、妻を亡くした後に孤独に陥ることが多い。

他国との比較調査によると、日本の高齢者はそもそも家族以外の人との社交が少ない(経済協力開発機構(OECD) 編 2006)。すなわち、夫婦以外の人間関係が希薄で、夫婦間の精神的な相互依存が高いため、日本の夫婦の死別は大きなストレスになることが多い。高齢者の社会的ネットワークの乏しさが孤独感を高め(藤原他 1988)、うつ病などの健康問題を抱えやすい傾向にあるといわれている(House 2001)。これを裏付けるものとして、内閣府が60歳以上の人を対象に実施した調査によると、シングル高齢男性には近所づきあいがほとんどない人が多く、家族や地域社会との交流が客観的に見て著しく乏しい状態におかれている(内閣府 2010)。

シングル高齢者の増加と孤立予備軍<sup>5</sup>の実態をうけ、内閣府は高齢者と地域社会とのつながりを強める策を進めようとしている。たとえば、東京都足立区の「あんしんネットワーク事業」は地域の高齢者同士で見守りを行い、新潟県は高齢者の居場所作りを目的に「地域の茶の間」を県内に200か所以上設置した。そうした努力にもかかわらず、日本の高齢者の社会活動に対する意識は低く参加者の数は伸び悩んでいる。なぜなら、高齢者たちは地域において若年世代から弱者のように扱われることを好まないし、高齢者のみの集まりに関心が低いからである(内閣府 2010)。

こうしたシングル高齢者に、結婚をすすめる風潮が近年顕著になってきている。高齢者の日常生活に異性との出会いの場が少ないためか、近年、高齢者のための結婚相談所の役割を果たそうとするウェブサイトをいくつも目にするようになった。その表紙ではしばしば、会員の身元を保証する安全性を強調することで、躊躇する高齢者の参加を促している。

しかしながら、経済的問題や子ども世代との関係性維持、および高齢者自身による恋愛への否定的意識など、新たな出会いを求めるには様々な制約がありすぎるようである(高橋 1984)<sup>6</sup>。

また、高齢者自身が他者への依存についてネガティブな評価をもっていることもあるの

---

<sup>5</sup> 近年の日本の特徴として、高齢者夫婦とともに、未婚化傾向による高齢独身男性の増加が孤立予備軍として危惧されている(内閣府 2012)。

<sup>6</sup> 高齢者の孤立については、老年学の領域においても検証が行われてきた。結果、孤立した高齢者はごく少数であることが確認されているが(金子(勇) 1987)、その少数の孤立者に関する事例研究には至らず、社会的ネットワークやサポートの相対的な多少に言及することどまっている。それらの調査において、社会的孤立の客観的指標とされてきたのは社会的ネットワークやサポートの規模や頻度で、調査は直近の過去1週間から1カ月ほどの状態を主観的に回答する形式が多い(河合 2002 ; 2006 ; 浅野 1982)。一方、高齢者の孤独感の調査には、主観的な孤独感や生きがいを問う既製の質問紙を用いた統計的手法が使われている。その分析指標には改訂版 UCLA 孤独感尺度(工藤他 1983)やPGC モラール尺度、社会的ネットワークの数や親族との面会頻度などがある。一定の尺度を使った先行研究が多いことで、様々な比較研究が可能になっている。

ではないだろうか。高齢期が、経済的にも健康状態においても自立性を維持するのに不安定な時期であることは、高齢者自身によって十分に自覚されている。ゆえに、意識的に自立を自身に課す傾向にある。他者に依存することはネガティブなこととして捉えられ、社会的弱者となることを極力回避したいと願う。他者から受ける援助をありがたいと思いつつも、厄介者にはなりたくないという気持ちがあるのではないだろうか。そのため、自身の身体の変化や、それに伴う生活の変化に対応しながら、生活基盤や人間関係を再構築していく必要に迫られる。その人間関係において、実は配偶者の存在が生活の幸福感に大きく影響することがわかっているが（赤澤他 2008）、配偶者がいない場合に高齢者はどのようにこの問題を解決するのだろうか。

米国では、配偶者を亡くした男性高齢者の再婚は、女性高齢者の 7 倍にもなっている。その理由として、高齢期人口の女性比が高いこと、女性のひとり暮らしに適応する能力が高いことが挙げられているが（パウエル 2001）、同時に男性が配偶者無しには暮らしがたいという現実を示している<sup>7</sup>。男性の社会的ネットワーク形成能力は低いといわれており、男性の生活適応には他者の支援が必要だといわれている。日本に限らず外国の研究においても同様の知見を得ていることから（笹谷 1994）、それは文化の問題ではなく男性の特徴であると言えるかもしれない。

また対人関係形成にも男性特有の傾向があることがわかっている。自分は寂しいと素直に認める度合いが女性よりも低い（Cramer et al. 1998）、親密な関係を築くのが女性よりも下手で（笹谷 1994）、対人関係を配偶者に限定する傾向がある（玉野他 1989）などの特徴が明らかになっている。

親族との関係形成においても、男女の性差があることがわかっている。高齢期はきょうだい関係を再構築していく時期ともいわれている。日本の男きょうだいの関係は、イエ制度の影響で、その他の社会のきょうだい関係より希薄であり、家族内の姉妹間の強いつながりによって結び付けられてきた。つまり、女きょうだいの有無がその関係性を大きく左右するといわれている（中根 1977）<sup>8</sup>。

このように高齢者の社会的ネットワークの先行研究は孤立や死別、ジェンダーなどについて多くの知見を含み、高齢男性にとってのセクシュアルに親密な他者（妻）の重要性を示唆している。しかし、配偶者を亡くした高齢男性の新たなセクシュアルなパートナー関係についての調査が存在しない。もし、同性や異性の単なる友人は少なかったとしても、セクシュアルな関係を含む特別な関係にある一人の異性との親密関係がそれを補っている可能性があるのではないか。しかし、こうした感じ方には、日本社会にある高齢者やセク

---

<sup>7</sup> セクシュアルな関係についても、実際には、妻帯者の方が性交の頻度は高く性生活に満足しており、離別者は不満足な状態であることが明らかにされている。（Felix et al. 2013）。

<sup>8</sup> 米国の研究においても、女きょうだいの有無がきょうだい関係に影響を与えることが明らかになっている。きょうだい間の情緒的な親密性、信頼性、接触度は、女性、独身者、女きょうだいを持つ人、子のない人、きょうだい数が多い人、地理的な距離が近い人、年齢が若い、などの条件に一致する人ほどきょうだいとの活発な交流が維持される（Connidis et al. 1995）。

シュアリティについての不可視の規範やステレオタイプの影響があることが予想される。そこで次節では、高齢男性をとりまき、高齢者研究の背景ともなっている日本社会のセクシュアリティについて関連する研究をレビューする。

### 第3節 高齢男性のセクシュアリティ

#### 1) 戦後日本におけるセクシュアリティの思潮

高齢男性のセクシュアリティのあり方に、日本社会はどのように関わっているだろうか。

近世日本においてセクシュアリティは大らかに捉えられていたようで、たとえば貞操観念については、明治初期までは処女膜の存在すら知られていなかったことから、その観念はなかったに等しいとみられている。明治期から徐々に抑圧されはじめ、1910～20年代頃にはセクシュアリティに対する規制強化が行われ、1920～30年代頃には「貞操・純潔の男女平等」が叫ばれ、1930～40年代頃には一夫一婦制婚姻における性愛一致の理念が普及した。戦後期以降になると性解放の方向へ向かっており（赤川 2006）、『キンゼイ報告-男版』（1950）、『キンゼイ報告-女版』（1953）が相次いでアメリカで出版されたこともあり、1940～50年代頃には婚姻外性行動の社会的規制緩和がみられ、1960年代に入ってから処女性・童貞は、選択可能なオプショナルな規範と捉えられるようになった。1970年代頃からはあらゆる性的行動の領域について「愛」や「親密性」が語られ、「愛があれば」許される恋愛至上主義、セックス<sup>9</sup>至上主義という観念が表われた（赤川 2006）。

この考え方は、愛する相手と性交の相手が一致することを理想としており、「お金で買えない」愛を伴うセクシュアリティに高い評価がおかれた。そのため、「金銭で買えるセックス（商品としての性）」を愛のない状態で行う女性に対して、特にそれが快楽や金銭の取得に結び付けられて語られる場合には、スティグマが付与されることになる。一方、「タダでやるセックス（商品ではない性）」は愛を伴う行為として認識され、特権化した行為とされていった（上野 1998）。

結婚に対する考え方も時代を追って変化してきた。戦前の日本では、恋愛と結婚は別物として捉えられ、夫婦は愛情の単位であるとは全く考えられていなかった（山田 2005: 183）。明治の畜妾制度廃止、一夫一婦制の成立、廃娼運動の推進や恋愛結婚の誕生に力を貸したといわれるキリスト教の結婚原則は、家父長制と一夫一婦制の非解消原則が日本人に受け入れられたと思われる（荒木 2006: 243）。1920年頃の恋愛至上主義は明治の文明開化の流れのなか結婚に関する個人の人権や自由の尊重を謳うものではあったが、そこには貞操、純潔を守るという「プラトニック・ラブ至上主義」と結婚外の男女のセクシュアルな関係を非道徳とする「夫婦愛至上主義」が共存していると考えられるため（佐伯 2004）、セクシュアリティを夫婦間に限定する意味で類似している。

ノッターはこの恋愛至上主義からなる結婚を、大正10年（1922年）を境に2分類して

---

<sup>9</sup> 以下、セックスという語は、生物学的解剖学的特徴という意味で用いるほか、引用文献にしたがい性交と同じ意味を持たせて用いる場合がある。

いる。配偶者選択において、少しでも本人の意思が尊重され、また、結婚後に夫婦間に多少でも愛情が生じれば（個人の幸福や夫婦の愛情を優先させる立場）家庭愛重視の「友愛結婚型：恋愛結婚」、恋愛そのものが重視される結婚を「恋愛至上型：恋愛結婚」と呼ぶ（ノッター2007）。

その後、欧米の性革命、フェミニズムにおける女性の主張の影響で、日本においても男女のセクシュアルな関係の倫理観は大きく変化し、制度的結婚と性的行動の乖離が生じていくことになっていく（佐伯 2004）。戦後、恋愛や性関係が国家に統制されたのは社会体制維持の目的であったと考えられるが、あたかも人道の倫理的規範であるかのようにすりかえられた面も否定できない（佐伯 2004）。ここで用いられたのが、恋愛結婚の理念、ロマンティック・ラブ・イデオロギーであった。ロマンティック・ラブ・イデオロギーとは、セクシュアリティ＝愛＝結婚の三位一体の観念で、結婚によって完結する恋愛を正しいとみなす考え方である。これは西欧から入ってきた観念で、日本では 1945 年頃から普及し始めたとみられ、1960 年代半ばに定着したと考えられている（山田 1996；落合 2004）。「他とは取り替えられない欲求をもつ個人化に基礎づけられた崇高な人格愛」という理想をとまない、性別役割分業を強制する近代家族形成のための神話の役割を果たした（荒木 2006：247）。

ロマンティック・ラブ・イデオロギーは、近代家族を形成させただけではない。核家族化と同時進行することで、恋愛感情を家族の中に閉じ込めたといわれる（山田 1996：102）。山田によれば、1955～1973 年の高度経済成長期、様々な領域で男女交際の行動が規制され、自由に恋愛できる雰囲気ではなかった（山田 1996：103-107）。家族制度に重きを置かない風潮が主流になった。「愛情あふれる家族」像が打ち出され、表面的には、婚前・婚外の男女関係は禁止されたと山田は述べている（山田 2005：183）。

一方、性的行動の自由を緩和するレトリックも台頭したという指摘がある。1960 年代に「恋愛至上主義」、1970 年代に「セックス至上主義」の考え方があらわれ（赤川 1999：364）、ラブホテル、盛り場などの施設も充実し、婚前・婚外の性的行動が緩和された。（山田 1996：117）。ここでいう「恋愛至上主義」とは恋愛や結婚に関する個人の自由意志の尊重を謳うものだが、1920 年当時のそれとは異なり、性愛行動の自由をも個人に決定権があることが特徴的であろう。

1990 年代からは、「性の規制緩和」が一層おこなわれる傾向にあり、1998 年頃には日本の学術界で「性愛論」ブームが起きた（赤川 1999：43）。セックスレス、熟年離婚という現象が表面化し始めたのはこの頃からである。現代、ロマンティック・ラブ・イデオロギーは、「性と生殖の分離（生殖技術・避妊技術）、性愛の分離（性の商品化）、性と結婚の分離（婚前交渉・婚外恋愛）」により、崩壊の兆しを見せる。婚姻外の性的行動への規制緩和は現在も進行中であるといわれている（赤川 1999）。しかし一方では、「恋愛結婚」を理想として「カップル強制」を押し付ける圧倒的なマスコミの影響力もあって、依然として無視できない力として存在しているとも考えられる（荒木 2006：232）。



ここで、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの普及をもう少し詳しく、1947年から25年間、文部省によって進められた戦後の「純潔教育」の普及政策と関連付けて考えておきたい。本稿で取り上げるインフォーマント世代がこの政策を受けて、家庭教育を受けた可能性があること、また、純潔教育の理念とロマンティック・ラブ・イデオロギーの理念が合致していることから、両者の普及には関係性があると考えられるからである。

1947年から始まる純潔教育は1960年代に家族政策として、また1970年代の性教育へと受け継がれ、1965年頃政府が打ち出した家族像は、母子保健政策や家庭教育方策と合流しつつ、1960年代後半、政府の求める家族像として定着し、家庭教育学級等を通じて普及された。一方、ロマンティック・ラブ・イデオロギーは、1945年頃普及をはじめ、1965年の恋愛結婚増加をもってその定着とみなされている。時期的に重複することが興味深い。また、その理念が類似していることも興味深い（純潔教育：恋愛＝結婚＝セクシュアリティ、ロマンティック・ラブ・イデオロギー：セクシュアリティ＝愛＝結婚）。

文部省によって使用された「純潔」とは、結婚までは性交を控え、結婚後は夫婦間以外に性交をしないことを意味する。基本理念は、①「健全で幸福な家族」像、②「恋愛＝結婚＝セクシュアリティ」原理、③「セクシュアリティ＝人間性＝人格」原理、④「母性」、⑤優生思想の5点で、戦後の混乱時期において青少年の不良化及び男女の不純な交遊の問題の対策推進を目的とされている。文部省社会教育局は、純潔教育普及のために、純潔教育委員会（1947年6月～49年9月）、純潔教育分科審議会（1949年12月～55年3月）、純潔教育懇談会（1958年9月～63年3月）を設けた。1972年3月の文部省社会教育局婦人課第60号裁定「純潔教育と性教育の関係について」で、「純潔教育」と「性教育」が同義とされて以降、「純潔教育」という用語は公式には用いられなくなった。25年間だけの政策であった。

1960年代に展開される家族政策に打ち出される家族像の基本理念は、それまでの純潔教育の理念に含まれるもので、同時に、純潔教育自身も家庭教育振興方策と緊密に結びつきながら各地方教育委員会によって積極的に展開された。それらは、1970年代の性教育論においても否定されることなく、受け継がれていった（池谷2001）。

本研究のインフォーマントの世代は、男女平等の精神を掲げた学校教育を受けている。男女共学が教育基本法に明記されたのは1947年、男女共同参画社会基本法が制定されたのは1999年であった。純潔教育が、性別役割分業、ジェンダーに基づく人格育成に力を注いだ一方、男女平等の教育も同時期から開始されていた。純潔教育を引き継いだ性教育において、エロスの身体や自主的な意思決定は軽視されたが、「健全な」セクシュアリティのモラルの育成は重視されており、純潔教育の「恋愛＝結婚＝セクシュアリティ」原理が受け継がれたと考えられる。

1970年代以降、性別役割分業は否定されはじめたが、家庭におけるジェンダー社会化の機能が問題視されはじめたのは1990年代以降であった。セクシュアリティは国家の関知しかねる家庭内での出来事であるというプライバシー原理がようやく日本にも浸透し、戦後

期と現代で私的領域と公的領域の境界に関する考え方が変化したことから生じた変化ではないかと考えられる。

## 2) 高齢者の性的行動調査

さて、このような日本社会において、高齢者のセクシュアリティはどのように意味づけられていると言えるのか。

高齢男性のセクシュアリティは、社会学的研究の対象としてそれほど関心を持たれてこなかった。第一に、高齢者人口のうち男性人口の方が女性より少ないうえ、配偶者と死別した高齢男性はその年齢階級において少数派にあたるという事実が理由としてあげられる(内閣府 2010 : 18)。第二に、より安定的な雇用経歴とより高い収入のおかげで、高齢男性は女性に比べ公的年金のほかに企業年金や私的年金を受給する可能性が高く、社会的に不利な立場に置かれているとはみなされていないということである。第三に、狭義のセクシュアリティの問題として、一般的に高齢男性のセクシュアルな活動が生殖と結びつかないためそのセクシュアルな欲求が否定的にみなされてきたことである。

狭義のセクシュアリティに関する数少ない先行研究としては、家族や婚姻という制度的な視点から捉えたものや、社会制度や文化的背景との関連を比較文化的に論じたもの、そして実態調査がある。

ベッカー (Becker 1984) は、セクシュアルな活動の促進と抑制を基軸として社会を性肯定社会と性否定社会、性両義的社会、性無関心社会に 4 分類した。この分類には婚姻制度や財産所有や相続に関する規制のあり方が関与しており、中央集権的な政治や厳格な宗教に拘束されない小規模社会がセクシュアリティに肯定的な傾向があることがわかった。日本は性両義的社会に分類され、その両義性は生殖能力、すなわちインフォーマントの年齢によって振り分けられる基準が異なっている。青年期のセクシュアリティが生殖能力の高さから肯定的に捉えられたとしても、高齢期のセクシュアリティは再生産を伴わないため否定的に捉えられる。つまり、性的行動にかかわる規範に年齢にふさわしい行動様式がある。セクシュアルな能力が年齢に応じて変わっていくと考えられ、セクシュアルに成熟して生殖と関連が高い青年期のセクシュアリティと、セクシュアルに未熟な未成年や高齢期のセクシュアリティの社会的な扱いは異なる。高齢者のセクシュアルな欲求は、恥ずかしい、汚いものとして見られ、時として高齢者の困った問題として扱われることもある (Glass et al. 1988)。日本も、ベッカーによれば高齢者のセクシュアリティに否定的であり、高齢者の性的行動や恋愛行動に対して尊敬の念を向けられることは一般的に少ない (吉沢 1986)。金水も、日本ではセクシュアルな欲求は煩惱とされ、高齢者は生臭い煩惱から卓越・超越し、若い世代を良い方に導く役割が期待される存在だとしている (金水 2004)。

また、福屋は高齢者の性的行動の他国との比較から、高齢男性のセクシュアリティについて、日本社会には精神的な老いの受容がセクシュアリティ活動を自制させるという特徴があるのではないかとこの見方があることを示唆している (福屋他 1996)。

高齢男性のセクシュアリティ自体についての先行研究では、セクシュアルな欲求が加齢とともに消滅する方向にむかうと認識される傾向と、死ぬまで変化しないとされる傾向 (Thompson 2006)、また変化しないとみる場合に、ジェンダー・アイデンティティとの関係である一定の条件を失うと男としてみなされない傾向と、死ぬまで男として存在するとされる傾向があり、どちらの議論にも確固とした答はない。こうした議論について、現代日本社会ではどのようなことが明らかにされているのだろう。

まず、高齢男性の性的行動や意識に関する研究は、心理学 (福屋他 1993)、医学・看護学 (森木 2008 ; 森田他 2000 ; 大工原 1979 ; 1991 ; 堀口 2008)、性科学 (東 2007 ; 2008 ; 荒木他 2005 ; 日本性科学会 2007) の分野に蓄積がある。これらの研究は、人間はセクシュアルな存在で、セクシュアリティに終わりはなく (第 17 回世界性科学会 2005)、高齢期においてもセクシュアルな欲求は維持されるという視点から実施されている (荒木 2005 ; 大工原 1979 ; 堀口 2008)。

これらの研究を対象で分けると、狭義のセクシュアリティ研究としてセクシュアリティへの関心と性的行動の関係性を論じるものと、性的行動や意識の実態調査がある。前者では、高齢期男性のセクシュアリティへの関心は青年期・壮年期とそれほど変化せず、欲求は加齢に伴い減少は認められるものの消失はしないことがあきらかにされている (井上他 1991 ; 高橋 1984)。実態調査 (荒木 2005 ; 日本性科学会 2007) においてもセクシュアルな関心や欲求が認められ、シングル高齢男性がセクシュアルなパートナーを求めていることが明らかにされた。しかしながら、実生活において性的行動を行っている高齢男性は多くはない (荒木 1999)。高齢男性の 70% はセクシュアルな欲求不満に陥っており、なかでも無配偶男性の 45% は性交相手が見つからないことに不満を感じているという調査結果もある (大工原 1979)。

性交相手を消失した原因は、配偶者喪失であることが多い (日本性科学会 2007)。配偶者を喪失した後に、高齢者が異性との親密関係を求めたとしても、財産分与の問題や家族の感情的な反対、自己の役割葛藤などが障害となり、親密なパートナー関係を築きにくい現状が明らかになっている (高橋 1985)。これまで述べてきた配偶者との死別が、セクシュアリティにかかわっており、高齢者自身にとって重要な課題になっていることがわかる。

他方、性交相手がいるのに欲求不満を感じる高齢者も存在し、これは加齢による性機能の衰退と関係がある (大工原 1979)。高齢者が自慰行為や性交を行うための補助道具が開発されるなど、高齢者のセクシュアルな欲求への支援がなされつつあるが (Redelman 2010)、高齢者は、肉体的な快楽だけを求めているのではなく、精神的な親密性への欲求を満たす思いやりや、体温を感じさせる肉体的親密さなどが総合されたセクシュアリティを求めている (日本性科学会 2007)。

いずれにせよ、性意識や性的行動に関する研究は、性科学、医学、看護学の分野でのデータ蓄積が多いが、60代から70代の高齢者の性に関する調査はそう多くはない。そのなかで、日本性科学会セクシュアリティ研究会の荒木他が行った以下の3調査は貴重である。

1990年8～10月に行われた「老年期のセクシュアリティ調査」、1999年10月～2000年3月に行われた「40～70代のセクシュアリティ調査」、2002年9月～2003年12月に行われた「熟年シングルのセクシュアリティ調査」である。ここには、40代から70代の性に関するアンケート調査結果があり、年代ごとの性的行動の動向をみる際に必要なデータである。特に、配偶者を亡くした男女のセクシュアリティに関するデータがあるということが、極めて画期的である。

これらの調査データを以下に示す。配偶者を亡くしてから新たな交際相手のいる人は、60～70歳代で男性55%、女性16%だった。新たな交際相手がない人で、欲しいと思っている人は、男性55%、女性17%だった。また、性生活の重要度を「重要」「どちらかと言えば重要」と回答した人は、男性78%、女性39%だった（この設問回答には、40～70歳代のデータが混在している）。この1年間の性交の頻度を問う問いには、この1年間全くない人は、60代男性35%、70代男性60%、60代女性69%、70代女性70%だった。この1年間に、性交を経験した人は、60代男性63%、70代男性39%、60代女性26%、70代女性8%だった（日本性科学会2007）。

荒木ら（荒木2005）が行った幅広い年齢層の男性を対象としたこの性的行動の実態調査は、日本におけるセクシュアリティ研究に大きな進展をもたらすことになった。これまで無いに等しいものとして捉えられてきた高齢男性のセクシュアリティへの関心が意外にも高いことがわかり、医学領域においても高齢者のセクシュアリティ研究の重要性が再認識された。しかしながら、こうした実態調査は、社会が高齢男性のセクシュアリティに向ける視線についての言及が十分ではないという課題を指摘できる。

高齢者の性的行動の性差についても、既に、いくつかの報告がある。

まず、福屋他（1993）は先行研究から次の5つの知見をまとめている。1) 性交渉頻度に性差があり、男性が高い（井上他1991）、2) セクシュアルな欲求に性差があり、男性が高い（井上他1991；大工原1991；高橋1984）、3) 年齢に対応して性交渉・セクシュアルな欲求の減少傾向がみられるが、全くなくなるわけではない（井上他1991；大工原1991；吉沢1986）、4) 女性は、配偶者の有無が、性交渉・セクシュアルな欲求の有無にきわめて密接に関連する（大工原1991；高橋1984）、5) 老年期の性的行動は、青年期・壮年期のセクシュアルな活動と相関関係をもつ（福屋他1993）ことである。これらをさらにまとめると、高齢男性のセクシュアリティを論じるにあたって、第1にセクシュアルな欲求や交渉は年齢差があるものの生涯続くこと（上記3）、第2に男女の差異に留意すべきこと（上記1) 2) 4）、第3に高齢者のセクシュアリティは《高齢者になる前》のセクシュアリティのあり方と関連する、ということが出来る。

また、セクシュアルに親密な他者を求めることは、当事者にとっては、精神的満足を求めるなど、人間としての絆を求める自然なセクシュアルな衝動の発現である（三宅2000）。そのような意味においても、人生の晩期にも特定の他者との愛着欲求はなくなるわけではなく（柴田他1993：138）、セクシュアルな行為を通じた精神的・身体的満足感を得たいと

いう欲求があることを理解する必要がある（大工原 1979）。

また、日本に独特とされている性的行動に関する問題として、夫婦間のセックスレス（森木 2008）があげられる。しかしながら、日本人全体の性交頻度が世界的にみて少ないこともわかっているため（DUREX 2005）、それを問題視するかどうか自体が議論されている。日本においては、そもそもカップル単位での行動が、他国と比べてそれほど頻繁なものではないと言われている。カップル関係はセクシュアリティや愛よりも家族内の役割を重視した関係にあり、性交の頻度の低さが特徴的である。日本の夫婦関係において頻度の高いタッチングは、指圧やマッサージなどがあげられており（堀口 2000）、広義の意味での性的行動に含まれる癒し合いの行動が相互満足度を高めているといえよう。この現象を、日本の性規範や性文化が愛ある性交を重視する傾向に帰する論もある（石蔵 2011）。

社会学的研究の場においても、高齢者の異性との親密性や交際行動は重要な課題として扱われてこなかった。それは、セクシュアリティに関する観念が私的なもので公的領域への影響が少ないと考えられていたことや、研究者が個人のセクシュアリティに関する私的領域に踏み込むことの難しさもその理由であろう。すなわち、男らしさ女らしさというジェンダー定義、婚前・婚内・婚外の性的行動に関する観念が、個々の社会成員の行動指標となるにすぎず、次世代に継承されていくものではないという考え方から（松園 1987）、それらは社会的意味の小さなことだとみなされてきたのだ。

しかし、個人の行動決定には意思と社会的規範の双方が関与し合うため、性的行動に関する事項についても私的領域に封じ込めておくべきではない。社会の側が高齢者のセクシュアリティを否定する背景には、高齢者のセクシュアリティに関する社会的認識の誤解、残存余命の期間の短さに起因する軽視、高齢期の再婚や性的行動が再生産につながらないために社会的に無価値なことであるという評価などがある。

ここまでに、高齢期において性的行動を含めた異性との交際を望む人が少なくないこと、その実践の形式には年齢規範、性規範、ジェンダー規範などの内在化された社会的規範や、エイジズムやセクシズムという他者からの偏見が影響を及ぼすことを示してきた。こうした性的行動に関する研究には、個別の質的な調査が必要で、インフォーマントの社会的・文化的背景やその生活における周辺の状態を把握する必要がある<sup>10</sup>。

### 3) 老婚調査

厚生労働省の調べによると、2005年の60歳以上の男性の婚姻件数は8388件で、この10年で高齢男性の婚姻件数は約1.7倍に増えており、高齢期の結婚への関心は少なくない（厚生労働省 2009）。高齢男性独身者の交際相手の有無を調査した結果によると、60代60%、70代49%に交際相手がいる（日本性科学会 2007）。配偶者喪失高齢者が異性との親密関係を求めることは珍しくないが、高齢期の再婚を望む人はさほど多くない（日本性科学会

---

<sup>10</sup> しかしながら、セクシュアリティというテーマについて個別の事例を聞き取る際には、事実が誇張されたり歪曲されたりする可能性も念頭におく必要がある（佐藤 2008）。

2007)。外国の高齢期の結婚の調査には、米国のマケイン (McKain 1969) が行った研究がある。高齢者の再婚における実態とその抑制因子を明らかにし、高齢期の性への偏見が大きな問題であることや、老婚を成功させるためのいくつかの示唆を示している。森 (1980) は、マケインによる調査をもとに日本の老婚率が世界で最も低い実態が、感情的抵抗、家制度における結婚の夫婦関係が米国と異なること、日本の遺産相続の方法、高齢者のセクシュアリティへの誤認識などが影響していることを示した。

赤井 (1984) は、京都府向日市が 1980 年に開設した茶のみ友達紹介所、神奈川県横浜市が県立老人福祉センターに 1973 年に開始した茶飲み友達相談事業、東京都小平市が福祉会館に 1976 年に開設した小平市老人結婚相談所における高齢期男女の出会いの事例を報告している。ここでも、高齢期のセクシュアリティへの偏見が根強いことが再婚の障害になっていることが明らかにされている。

現代でも、高齢者と共有体験のある若年層は高齢者を否定的に捉えない傾向があることがわかっているが (前田他 2009)、核家族化した日本において敬老の要素としての伝承知や経験知はその価値を失いつつあり、高齢者の家族内における地位は揺らいでいる。すなわち、男女に不平等な性別役割分業規範、核家族の自律性規範と財産の分与や相続、介護問題などの調整が直接的・間接的に親族にまで影響すること、高齢者に対するエイジズムが、高齢者の性的行動を規定する要因になりうると考えられる。

その結果として、入籍をせずに同居するカップルや、別居したまま恋人関係を維持するカップルが生まれているのが現実である (高橋 1985 ; 文部省高等教育局医学教育課監修 2000 : 47)。これまで夫婦単位で生活してきた人がその片割れを失う経験の後、またその単位の再構築を希望するかどうかはわからない。死別後、配偶者を代替する人間関係として、子どもへの依存、きょうだい関係の再編成、新たな異性親密関係の構築、単身のままでいい、という選択肢がある。これら的高齢者の配偶者喪失後に新たに構築される異性関係に関する研究が、家族や夫婦をあつかう先行研究のなかで多くないのは、高齢者の性に関する社会的認知の誤解と残存余命の期間の短さにくわえて、高齢期の再婚や性的行動が再生産につながらないため社会的に無価値なこととみなされがちだからではないだろうか。

日本における、配偶者を亡くした高齢男性の、特定の異性との間に形成する新しい人間関係、すなわち新たな異性パートナーとの関係形成についての研究はまだ数少ないが、1980 年代からなされはじめた。高橋 (1985 ; 1989) は、配偶者喪失後の再婚を希望する男女の配偶者選択に関する研究を行っている。結婚紹介所に登録する男女 230 名に質問紙調査を行い、男女ともに内縁のまま通い婚をおこなうことを希望していることを明らかにした。ここで高橋は高齢者の結婚を、内縁と入籍、別居と同居に着目し 4 分類している。男女ともに入籍を望む者は少なく、同別居について男性は子どもと同居をする者は別居を望む傾向がみられ、女性は独居の者でもパートナーとの別居を望む傾向がみられた。その背景には、性別役割分業において女性側の過大な負担の存在があることが示されている。また、高橋 (1984) は、老年期のセクシュアリティと結婚を抑圧する要因をさぐるため高齢者の

性意識、再婚意思の実態と特徴を調査し、高齢者自身のもつ規範が本来の自己の欲求に対して否定的に作用していることを明らかにした。

このように、高齢者自身のもつ規範や他者からの偏見が、異性パートナーとの関係を構築する行動を規制することが明らかにされているが、実生活における行動をみるには、セクシュアリティの規範だけではなく、その社会の文化から導き出される諸規範と、個人の関係性をみる必要がある。上記の老婚研究においては、再婚を目的としたパートナー探しをする男女の意識や観念調査がなされ、彼らを取り巻く負の諸事情が示されているが（高橋 1985；赤井 1984；森 1980）、当事者がそれらの規範や差別意識をどのように内面化し、適応して生きているかという側面は取り上げられていない。

第 1 章で指摘したように、高齢男性が直面する「高齢者」であることと「男性であること」の相克は、男性自身によってどのように解決されうるだろうか。男性が男性であり続けるために、男らしさの規範に忠実な行動を最優先した場合、その他の社会規範に対しては逆らう、無視するなどの扱いをすることになる。高齢期のセクシュアリティが社会から否定される事項であるとしても、それに反することがより男らしいことにつながるとすれば、男性は性的行動を実行に移すことが考えられる。また、男性自身が女性とのセクシュアルな関係を形成することを望んでいるのであれば、性的行動を妨げる様々な障害を掻い潜り、なんとしても乗り越える戦略を打ち出すだろう。

そういったシングル高齢男性が女性との親密圏を新たに形成することを望むとき、男として評価を与えてくれる特定の女性を探すために、男性は女性に対してどのように男らしさを強調するのだろうか。しかし、このようにセクシュアリティの視点を含めた高齢男性の親密圏形成に関する先行研究はみあたらない。

#### 4) 高齢男性のセクシュアリティのさまざまな可視化

これまで述べてきたように、高齢者のセクシュアルな欲求は、社会規範によって規制されることがある。高齢期のセクシュアリティへの不可視の抑圧については、エイジズム研究において研究がなされ、セクシュアリティ規範が、生殖能力の有無や年齢によって異なる倫理観を内在していて多様であることに加え、セクシュアリティや年齢に関する他者からの偏見も性的行動の決定に影響を与えると指摘されてきた（パルモア 1995；小松 2002；吉沢 1986）。たとえば、恋愛は若い人がするもので高齢者がするべきではないなどと、自他共に抑圧してしまうのだ（吉沢 1986）。

また、沼崎は、現代日本において高齢男性は「どう見ても男力（男性的な魅力）」など備えていない」とみなされる傾向があると述べている（沼崎 2001：309）。「男力」の一部に女性へのセクシュアルな欲求を含むとすれば、高齢男性の身体機能に関する調査において、若い世代が、高齢者のセクシュアルな欲求が若い世代よりも低いか消えかかっていると考えていることも指摘されている（森田他 2000）。

次章以降、マスメディア分析や当事者へのインタビューを通してその検証を行っていく

が、これまでの先行研究レビューによって、高齢男性にとって年齢規範とジェンダー規範が相克するものであるらしいこと、またセクシュアルに親密な他者としての女性が重要な存在であり、定年退職等の「高齢者」カテゴリーへの移行によってその依存性がいっそう高まるが、その困難（特にセクシュアリティを視野に含めた）に関わる研究は少ないことなどが明らかになった。本章の最後に本項では、現在、日本において高齢男性のセクシュアリティをとりまくさまざまな社会現象に言及しておく。それらは、次章で分析するマスメディアの言説や、高齢男性をとりまく環境の一部をなす。高齢男性が自身の理想に沿う性的行動を実現するためには、そのなかで方法を模索していかなければならない立場に置かれている。

公的に、高齢男性がセクシュアリティをもつ存在として可視化されたのは、国際高齢者年に関連して諸政策が変化していった1990年代後半のことである。たとえば福祉領域において、高齢男性のセクシュアルな問題の対策の一環として、高齢男性の介護に当たる女性に対して行動指針が呼びかけられた。ホームヘルパー協会副会長の松本玲子は、全国的女性ヘルパーに、介護をする男性の前でひざを立てて座らない、お尻を向けて作業をしない、ミニスカートををはかないなどを提案した。こうした実態をふまえ、ヘルパーを目指す人が持つべき知識だとして、1999年11月、厚生省はホームヘルパーを育てるための教材に、高齢者のセクシュアリティについて盛り込むよう求める「テキスト作成指針」を出した（荒木1999）。

そのほか、高齢期の異性関係について、近年、高齢者の介護や医療の場で問題とされる報告が少なくない。それらの報告では、高齢者の性的行動が、家族や介護者や周囲の人を不愉快にし、異常行動として忌み嫌われることが多いことが明らかにされている。高齢者は無性欲、高齢者のセクシュアルな行為に対する不潔感、高齢者に対する聖人像の押しつけ、高齢者のセクシュアルな活動は病気の原因になる、という偏った見方がある（吉沢1986）。

このように高齢者の性的行動は蔑視されがちで、社会的に容認されにくいのが実情であるが、看護の現場においては高齢者のセクシュアルな欲求への介助法が模索され続けており、高齢男性のセクシュアリティは問題視されるほど活発であることが明らかにされている（荒木1999）。

一方、第3章で詳しく論じるが、マスメディアでは高齢男性のセクシュアルな欲求を真正面から支持する立場もでてきた。たとえば、1998年1月3日、宝島社が新聞に全面広告を出した（朝日新聞朝刊全国版、読売新聞朝刊全国版、毎日新聞朝刊東京版）。紙面一面に詩人の田村隆一氏の写真が起用され、大きな文字で「おじいちゃんにも、セックスを」というメッセージが掲載された（『別冊宝島』1502巻）。この標語は、定年年齢の引き上げや、バイアグラ<sup>11</sup>の解禁など、老いてもなお盛んでありたいと願う老人が増えてきた90年代末に、従来の老いと若さの基準を問い直そうというメッセージが込められている。サブタイ

---

<sup>11</sup> 高齢男性のセクシュアルな機能を補助する薬剤。1998年、米国ファイザー製薬から発売された。日本では1999年に認可販売された。



トルとして、以下の文章がある。「平均寿命が伸び続けている高齢化社会。老後はもはや“余生”ではありません。おじいちゃんだって、恋愛もするし、セックスもする。老いとは、枯れ衰えることではなく、年齢にふさわしい状態へ心身をチューンナップしていくこと。お年寄りだから……とワクに閉じ込めるのではなく、今こそ、老人の基準を見直してみませんか」。近年のオンライン結婚・恋人探しサービスのサイト「マッチ・ドットコム ジャパン」の、61 歳以上の会員数の急激な増加も、恋愛を含め、高齢者のライフスタイル<sup>12</sup>が多様化していることを示している（リクルート 2008）。

現代日本では高齢者が増加し、医療化、政策や介護・看護の現場、マスメディアなどさまざまな面で変化が生じているように思われる。他方で、《高齢者になる前》の人生に影響する男女間の性役割は、他の先進諸国に比較して非常に強固であり変化がない。そのような社会で長年「男性」として生きてきた高齢男性は、どのようにセクシュアリティを生きることができるのか。

意思に反して進行する生物学的老化、年齢と関連付けられた日本の諸制度や役割は、高齢者の経済的・身体的・精神的問題と切り離せない。船津は、老いを隠し、衰えを認めないのではなく、老いていく過程を正面から受容しながら生きていくという新たな規範が必要であると主張している（船津 2003：49-54）。くわえて、高齢男性がセクシュアリティを希求することは、人間の基本的欲求の一つであるから、それをウェルビーイングの一環として受容することが必要ではないだろうか。次章以降では、それを抑圧する社会規範や、また高齢男性自身がセクシュアリティをどのように捉え、利用し、ジェンダー・アイデンティティとどのように関係づけているのかを明らかにしていく。

ここで、次章以降のデータの考察にあたり、セクシュアリティの概念に作業的定義を与える。その理由は、以下のとおりである。

本稿の最初に述べたように、セクシュアリティという概念は非常に広範囲にわたり多様な事象を含む。しかし、第 2 章の先行研究レビューでは、セクシュアリティは性機能や異性への性欲、性交といった事項を中心とする狭義の意味で用いられることが多かった。そこで、本稿ではセクシュアリティがこのように狭義に収れんされることの問題性を認識しつつ狭義に用いることで、データ分析の焦点を絞り、それによって却ってその問題性を明らかにすることを意図する。この立場から次章以降で用いる狭義のセクシュアリティを、個人の性的指向に基づく、身体を通した実践であると定義する。そして、その実践はその個人の性的指向だけに依拠しているのではなく、その人が生きる社会・文化において支配

---

<sup>12</sup> 高齢男性がセクシュアルな欲求をもちながらもそれを抑制される立場に置かれていると考えれば、また、性は金銭を媒介させれば正当化されるというダブル・スタンダードが存在するという前提とすれば、高齢男性の性に関する市場へのニーズが生じよう。近年、高齢者向けの AV 動画の流通が増加しているのは、高齢者層にそういうニーズがあるからだと思う。高齢者向け AV 制作会社の製作本数と売上は上昇傾向にある。高齢男性が自分一人で性的欲求を処理できるように、高齢者向け AV 動画は高齢男性の目線で制作されている。高齢者向け AV の特徴は、高齢男性が若い女性を対象に性的行動をとることを許可される文脈が含まれていること、また、加齢によって性欲を抑制しなくてもよいというメッセージが含まれていることである。

的な評価を得ている言説（性シナリオを含む）を参照しながら、他者による承認／非承認の関係性のなかで意味づけられつつ行われるものであると考える。

## 第3章 日本社会に内在する高齢者へのセクシュアリティ規範

### 第1節 社会規範の可視化

#### 1) 調査目的

前章で日本の結婚や恋愛など男女間のセクシュアリティに関する文化的背景をみた。

本章では実際の生活に根付いている日本人の意識をとらえるため、雑誌記事の内容を分析する手法をとる。大衆誌には日本で生活する日本人が当然とするロジックが使われ、それに反する行動についての批難や称賛が文章化されている(牧野 2012)。そこで、高齢者のセクシュアリティがどのように表現され、どういった行為が批難(称賛)されているのかといった記事内容を読み取ることによって、高齢男性のセクシュアリティに関する社会規範の可視化を試みる。

欧米のセクシュアリティ研究は、セクシュアルな欲求を行動にうつす是非の判断指標として、高齢者のセクシュアリティと男らしさに抑圧的な性シナリオの存在を示唆してきた。日本社会にも同様のシナリオは存在するのだろうか。性欲の有無や衰退について社会側が高齢男性をどのように扱っているのか。男性が男らしくあり続けるためにいかなる方法があり、男性がセクシュアルに親密な女性を獲得するのに必要な条件とはいかなるものか。セクシュアリティに課される年齢規範があるのか、高齢男性のための性シナリオは存在するのか。このような、現代日本社会が常識とするセクシュアリティおよび男らしさの規範を読み取る。

また、高齢男性のセクシュアリティに関する認識の時代的变化は、性シナリオの内容を変化させるのだろうか。これまで述べたように、日本社会においても時代によってセクシュアリティが変容してきたことが分かっている。高齢男性のセクシュアリティについても、時代による変容があるのかどうかを、雑誌の記事を、国際高齢者年をはさむ前後約20年間分たどることによって明らかにする。

#### 2) 調査対象の選定：高齢男性のセクシュアリティにかかわる記事

本研究では、一般大衆誌を分析対象とするため、記事の抽出のデータベースとして「大宅壮一文庫」を利用した。記事選定のための検索は、まず、「高齢者」「老人」というキーワードで行った。15218件の記事が該当し、さらに「性」「セックス」「SEX」「恋愛」「結婚」というキーワードをAND検索、および、「老人性」「痴呆性」「活性化」「急性」というキーワードをNOT検索した場合には1505件の記事が該当した(フリーワード:(高齢者+老人) \* (性+恋愛+結婚+セックス+SEX) - (痴呆性+老人性+急性+活性))。「活性化」「急性」をNOT検索に用いたのは、これらの語を含む本研究に無関係な多くの記事が検出されていたからである。

しかし、ここに分類された記事すべてが、本研究で焦点を当てようとしている高齢者のセクシュアリティという事項に合致するものではなかった。そこで抽出された記事の内容

に目を通し、その内容が高齢者のセクシュアリティに関連していると考えられる記事をさらに選定する作業を行った。記事の選定にはその内容が高齢男性のセクシュアリティに関連すると思われるもので、高齢期のセクシュアリティがどうあるべきか、実態はどうか、といったことに関連性があると考えられるものを選ぶようにした。

その結果、高齢男性のセクシュアリティに関する記事数は、1990年から2012年までの23年間で延べ127誌における540件であった。記事数は図3-1のように、1990-94年53件、1995-99年87件、2000-04年110件、2005-09年144件、2010年以降146件となり（計540件）、徐々に増加している。なお、2000年以降の記事数の増加は、一誌が扱う記事数が増加したからではなく、高齢者のセクシュアリティをとりあげる雑誌の数が増加したためである。文芸誌もこのテーマを取り上げるようになった。

また、2010年から2012年の2年間で、2005年からの5年間の記事数を超え、高齢者のセクシュアリティへの社会的関心が高くなりつつあることが読み取れる。

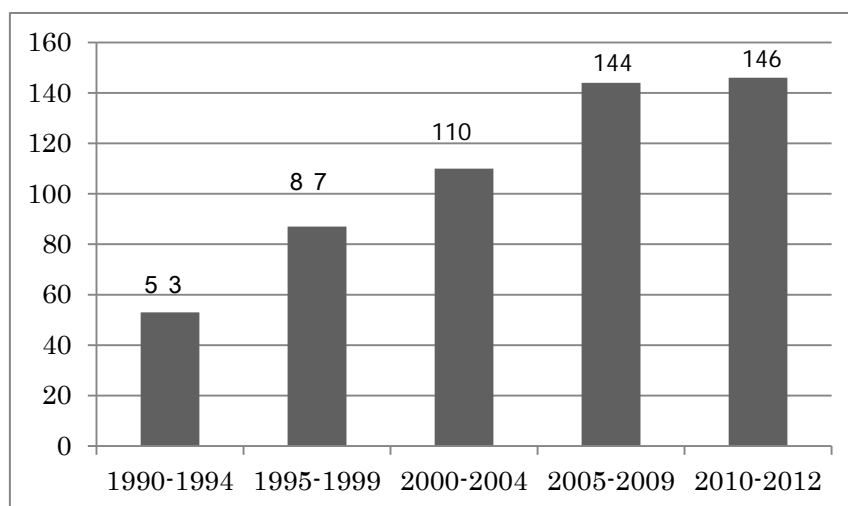


図3-1 高齢者のセクシュアリティをとりあげる記事数の変遷  
5年毎記事数 1990-2012年

この127誌のうち記事数の上位5誌を整理したものが表3-1である。上位5位の雑誌に収録される記事数に大差は無いが、本章で週刊新潮と週刊ポストを分析対象とするのは、他誌と比較した際の発行部数の多さを理由とする<sup>13</sup>。『週刊新潮』は、新潮社が毎週発行する週刊誌で、1956年2月創刊から現在まで、常に「人間という存在」を強く意識した記事づくりを方針として刊行されている。新潮社のHPには、「世の中が左に揺れても右に揺れても、常に変わらぬ主張を堅持し、その一貫した姿勢が読者に支持されてきました」と述べられている（新潮社2014）。『週刊ポスト』は、小学館が毎週発行する週刊誌で、1969

<sup>13</sup> この表に含まれないが、これらの2誌と並ぶ週刊誌とされる『週刊現代』には15件、『週刊文春』には17件が収録されていた。週刊現代は高齢女性のセクシュアリティを取り上げる記事が、男性を取り上げる記事よりも多かった。また、2013年1月号で高齢男性の性特集が掲載されて以降、高齢男性のセクシュアリティに関する記事が増加している。

年 8 月創刊された。「政治、経済から事件、風俗まで、日本と世界の今を読むNo.1 総合週刊誌」として現在まで刊行され、30 代から 40 代の男性サラリーマンを主な読者層としている (M.R.C. 2012)。

さらに、これらの記事から、高齢男性のセクシュアリティや異性関係の実態、高齢男性のセクシュアリティに関する知識（性機能、アンチエイジング方法等）を内容に含む記事であることを基準とし、男性の介護や定年後の家事や、高齢女性のセクシュアリティに関する記事を除外して、1990 年から 2012 年末までに発行された号までの目次に掲載されている記事から抽出を行った。その結果も表 3-1 に示すとおりで、分析対象とする週刊新潮と週刊ポストの記事数は、合計 31 件と 22 件である。週刊新潮は、1990 年から比較的コンスタントに高齢者のセクシュアリティを取り上げ、週刊ポストは、2000 年後半から高齢者のセクシュアリティ関連記事を増やしている。

表 3-1 年代別記事数の上位 5 位

	雑誌名	1990-94	1995-99	2000-04	2005-09	2010-12	合計	発行部数 <sup>[注]</sup>
1	週刊新潮	6	4	8	1	12	31	580676
2	週刊朝日	1	0	5	4	18	28	199016
3	サンデー毎日	0	3	3	10	12	28	120039
4	AERA	1	7	9	5	5	27	124093
5	週刊ポスト	1	2	1	5	13	22	477792

注) 発行部数：一般社団法人日本雑誌協会の印刷部数公表による数値のうち、2012 年 10 月から 12 月の印刷証明付き発行部数を示す。

### 3) 記事の分類と 2 誌の比較

対象記事を高齢男性の、セクシュアルな欲求の有無や男としての存在意義が社会でどう捉えられているかということに着目して整理し、その後 KJ 法を用いてカテゴリーを整理統合した後、記事において問題とされている点を、表 3-2 のように大きく 3 つに分類できた。記事カテゴリーは、高齢男性の社会的孤立、男性の性的行動が社会的な迷惑行動として問題視されたもの、男性の心身の問題として取り扱われるものである。

これらの記事を、佐藤 (2007) の 3 情報に照合して考察してみたい。佐藤は視覚障がい者のセクシュアリティ研究において、情報をセクシュアリティへの機能から 3 種類に区別している。ロジスティクス情報は、具体的に性的行動の初動（道具や施設の利用方法等）を指示する。リプロダクツ・セクシュアルヘルス情報は、セクシュアリティと生殖の機能について教示する科学的専門家的な言説である。エロス情報は、生理的な興奮を惹起する情報である。

本研究の分析対象においては、ロジスティクス情報は、高齢者向けの出会いの場や風俗店やデートスポット、異性を口説くテクニック等を紹介し、リプロダクツ・セクシュアル

ヘルス情報は、高齢男性が性交を行う前後の身体的注意事項や性機能維持・体に負担をかけない性交の知識、バイアグラやシアリスなど性行為を補助する薬品等を紹介している。しかし、エロス情報に相当するものが見当たらなかった。これは、エロス情報は男性一般が同じものを求めるとして年齢区分がなされていないからではないかと考察した。つまり、このエロス情報の不在は、男性のセクシュアルな欲求の若い男性中心主義的な規範を示唆しているのである（考察は後述）。

表 3-2 記事において問題とされている点の分類カテゴリー

カテゴリー	問題とされている点	週刊新潮 件数	週刊新潮 合計件数	週刊ポスト 件数	週刊ポスト 合計件数
孤立	・資金の無い高齢男性は社会的に孤立する	2	10	1	4
	・社会的規則を守れない高齢者の性・恋愛は孤立、死につながる	3		0	
	・高齢男性の孤立/パートナーがいない	4		3	
	・妻にしか相手にされない	1		0	
セクシュアリティ の問題視	・高齢者の性への社会的(相互)無理解	8	10	5	7
	・社会的に許可される性交相手の枠	1		0	
	・若者よりも性欲旺盛な高齢者の存在	1		2	
心身の問題	・性欲の心身アンバランス(老いを自覚できない)	1	11	3	11
	・夫妻のアンバランスな性欲	2		0	
	・性機能を自己コントロールできないことによる不満足	3		0	
	・高齢男性の内面/本音の無理解	3		8	
	・ビジネス社会と決別できない内的問題(定年後に柔軟に変化できない)	2		0	

エロス情報の不在とは対照的に、選出された全ての記事に高齢男性の性的行動の理想像が示され、高齢男性のセクシュアリティが社会で逸脱とみなされる境界が示唆され、社会における高齢者のセクシュアリティの常識やマナーの類が紹介されている。次節で、より詳しくみていく。

## 第2節 年代別記事分析

### 1) 年代別推移と媒体による傾向の違い

各年代の記事をカテゴリー分類し、記事件数を整理したものが表 3-3 である。全体の傾向として、2010 年以降に心身内面的事項が取り上げられる記事数が増えている。

記事内で高齢者のセクシュアリティに解説を添えるのは、その分野に関する権威的存在

とされる専門的職種の研究者や医師（老年学、心理学、社会学、医学、泌尿器科・内科・脳神経科の医療技術者）であることが多い。年代によって権威者は異なり、1990年代には性科学者や医療関係者が中心であったが2000年代には社会福祉分野の専門家が登場する。また、科学的根拠の提示だけでは読み手を説得しにくい側面については、高齢者の周辺に身を置き実態を観察する立場にある人物のエビデンスとして、老人施設の介護職員や風俗店経営者、近隣住人の証言が添えられる。

以下に年代ごとに、週刊新潮と週刊ポストの順で、記事内容の傾向を示す。

表 3-3 カテゴリー分類記事数の推移

年代	孤立		セクシュアリティの問題視		心身の問題	
	新潮	ポスト	新潮	ポスト	新潮	ポスト
1990前半	3	0	2	0	1	1
1990後半	0	0	3	1	1	1
2000前半	4	0	3	1	1	0
2000後半	0	1	1	3	1	1
2010以降	3	2	1	2	7	9

雑誌毎の傾向を見ると、「新潮」は高齢男性のセクシュアリティについて客観的に解説する手法をとる傾向、「ポスト」は読み手に直接語りかける表現をする傾向がある。

以下、年代別に詳しく見ていくが、「新潮」の記事にはどの年代にも高齢男性のセクシュアルな欲求が「ある」ことを肯定する言い訳が示され、その言い訳が時代によって変化している。その管理やコントロールに重点をおき慎重な行動を促す記事と、活発な行動を促すための具体的方法を提案する記事がある。「ポスト」の記事には、高齢になっても恋愛への関心、異性への関心があることを当然とし、それが社会的にどのような扱いを受けているか、また、不当な扱いを受けた場合の対処策が示される傾向がみられた。

## 2) 1990年代前半：脳価格の登場と規範の混在

この年代の抽出記事に多い高齢男性のセクシュアリティ問題は、孤立であった。高齢男性が社会的に孤立すること、異性のパートナーがいなかったことが問題視される。以下の記事では独身者のパートナー探しを取り上げられ、高齢期での独り暮らしを回避することを勧めるような内容になっている。

中年過ぎてから離婚したり、連れ合いに先立たれたりして独身になってしまった老人が、日本には一説に一千万人もいるのだが、その老いた独身者たちが、これからの「長い人生」を送るために、老後の伴侶を必死に探し始めたのだ。

[1990.2.22.老婚の困難『花盛り「老人仲介業」の男女の履歴書』] 『週刊新潮』

この記事は「老いた独身者」であってはならないような焦燥感を作り出し、不幸にもそうなってしまった男性が新しいパートナーを「必死に探す」姿を紹介する。「独身になってしまった老人」は、新しい伴侶を獲得することが今後幸福な人生を送れるかどうかの分岐点になると示され、高齢期の男性の異性関係の理想像が仄めかされている。

これを裏付けるのが、新しく登場しつつあった脳科学の言説である。セクシュアリティに関する議論は、1980年代の脳科学分野におけるセクシュアリティ研究によって通俗的な俗信・迷信の域を抜け出して、科学的な事項として扱われるようになった(大島 1984; 1989)。たとえば、性的行動によって得られる快感が脳を活性化するという説は、高齢期を生き生きと過ごしたいと願う人々の関心をとらえ、ボケ防止、セクシュアルな魅力や関心を維持する具体策が待たれるようになった。

中脳に発した快感神経は、性欲、食欲の中枢から攻撃性と関係の深い扁桃核、学習、記憶に関する海馬を上行し、精神活動と関係の深い大脳新皮質系に情報をもたらしていく。...快感を求めることが、脳を活性化させる方法なのである。

[1990.6.7.性科学者の大島清氏が書いた『老人のセックス』] 『週刊新潮』

しかし、このような論調と並んで、以下の記事では、若者よりも旺盛な欲求を持つ高齢男性は「色情狂」という言葉で表現されるなど、記事においてそのセクシュアリティが社会的に危険視されていることが読み取れる。

(新しい薬は) 歳と共に衰えた男性にとっては、下手な強壮剤よりもありがたい回春剤かもしれない。逆に、こんなに簡単に(男性不能症が)回復してしまうと、色情狂の老人が世に溢れ出るのでは、といういらぬ心配もしてしまう。

[1992.10.22.「不能症に特効薬」で老人の色情狂が増える?] 『週刊新潮』

若い元気な連中が淡泊になる一方で、老人はギラギラと性欲に燃えているなんて社会は、どう考えても病んでいるとしかいいようがない。

[1994.4.28.「美しい性」「醜い性」] 『週刊新潮』

これらの記事から読み取れるのは、高齢男性のセクシュアリティのシナリオには矛盾する言説が混在するということである。幸福とセクシュアルな行為は密接に関連して語られ、脳科学の言説が、セクシュアルな欲求が脳によって統制可能なことを明確にし、高齢男性のセクシュアリティに対する社会的扱いを再検討する機会をつくったにもかかわらず、社会は高齢者のセクシュアリティを危険視し、「狂」「症」「病」といったかつて医学的言説が用いた表現を用いて制御しようとしている。



### 3) 1990 年代後半：高齢者のセクシュアリティ実践に役立つ情報

この時期には、脳科学によって活発なセクシュアルな活動が脳活性化に良い影響を与えることが明らかにされたという「知」を基盤にして、その実践方法が高齢男性に向けて発信されるようになった。高齢期の性機能のメカニズム理論、衰えをカバーする方法や製品（映画、ビデオ、精力剤）が紹介される。

画面の中から語りかけるのは、性科学者のリースケンス女史とベリング博士。オランダで製作されたビデオ。高齢者に性の楽しみ方を指南したこの作品が今、日本でもひそかな人気を呼んでいる。通信販売を中心に三カ月で六千本が売られています。日本では特にタブー視されている高齢者の性を、真正面から扱った点が受けているのでは。

[1996.5.23. 老人向け「性指南ビデオ」の凄い中身] 『週刊新潮』

昨年の秋からこの種の指南ビデオの制作に乗り出したところ、既に一万本を突破する売行きだという。…セックスへの関心を棄てると、おカネやモノに執着するようになり、ボケにつながることもあります。生き生きとした性生活は健康を促進し、免疫力を高めると言われています。

[1997.7.10. 「楽しい中高年の性生活」ビデオの中身] 『週刊新潮』

アダルトショップや通販などの怪しい精力剤に手を出す人もいますが、あれは効果が無いどころか無駄な出費と言えます。…精力を保つ努力は健康に生きることと同義なんですよ。…薬剤師と相談の上で症状にあった精力剤を使えば、男も女も八十代まで確実に通用します。いえ、“灰になるまで”性は謳歌できるものなのです。

[1998.2.19. バカと性欲剤は使いようか 中高年向き SEX 指南書] 『週刊新潮』

高齢者向けの「性指南ビデオ」や書籍が販売数を伸ばし、高齢者自身のセクシュアリティへの関心の高まりや、欲求を実際に行動に移す積極性が示される。また、「タブー視」されるセクシュアリティの悩みを一人抱え込むことに警鐘を鳴らしつつ、「セックスへの関心」を維持することが推奨される。性「科学者」や「博士」という科学的権威に言及し、活発な行動が全身の「健康」問題を解決する策として示され、それを可能にする具体的方法が紹介される。

「勃起力低下」に悲観するな、「男はいつまで可能なのか」…高齢化社会の伴い、高年齢セックスの問題は他人事ではない。…米国の性科学者・マスターズ博士は、「男女とも 80 歳を過ぎても、なお満足な性生活を楽しむ能力がある」と説明しているほどです。…性の衰えを気にするようになったミドルエイジの読者にも安心してください、と言いたいのです。…「もう年だから」と諦めることが、いちばん悪いのです。…つねに脳細胞に性的刺激を与えておくことによって、性能力も維

持されるということは事実なのです。興味を失った時点で「男は終わる」と考えてください。

[1998.7.24.「笠井先生が解決！ミドルエイジ『働き盛りのSEXトラブル』】『週刊ポスト』

題名はミドルエイジ向けだが、内容に高齢期のセクシュアリティに関する言及がみられる。ミドルエイジの安心感を誘うため、米国性科学者マスターズ博士の説や米国の調査研究結果が紹介される。

60歳を超えてもセクシュアルな能力を維持する男性のその原因を、脳細胞の活性化におき、「もう年だからと諦めることが、いちばん悪い」、「つねに脳細胞に性的刺激を与えておくことによって、性能力も維持される」とする。男が「終わる」ことへの不安を除去するための科学的根拠が並べられている。そして、「若い頃とは異なる肉体的、生理的変化」は受容するように促すが、セクシュアルな欲求を消失する事態だけは回避するよう提言がなされる。男性であることがあくまで「性能力」にかかっている、というこの言説は、ジェンダー・アイデンティティを性別の自己認知の問題ではなく、異性愛的セクシュアリティに依拠する欲望と身体として構築する。

「73歳でそんなに絶倫なのか」、この事件を聞いて、思わず自分の下半身を見つめた中年男性も多かったに違いない。...このP容疑者、ちゃんと妻も...孫娘もいる。(あるジャーナリストが)「かつて老人とセックスを取材したんですが、今の老人たちには性欲があるにもかかわらず、世間は、いい年をしてと揶揄する風潮があります。...今の70歳は、昔の栄養状態が悪い時の50歳くらいの性欲があると思う。老人だって“やりたい”もんだと思うことです。...老人の性について考えさせられる象徴的な事件である。

[1997.1.31.「コギャル100人以上を相手した73歳老人の『性』】『週刊ポスト』

この記事では、60代から10数年もわいせつ行為を重ねた老人を例に、「老人たちには性欲があるにもかかわらず」世間がそれを抑制する傾向にあることを示す。また、昔の70歳の性欲よりも今の70歳のそれが高い理由を栄養状態が良くなったことに帰し、社会環境の変化に伴い、高齢者の性の捉え方を変化させる必要性が示される。

しかしそれと同時に、高齢男性のセクシュアリティの対象が女子高生であることは、性シナリオから外れた作法であることがわかるように語られている。「ちゃんと」家族を持つ高齢男性がこのような性的行動をとることに疑問が付されるところには、性的行動は夫婦間で行われるべき、高齢者の性的行動は家族によって監視されるべきとの考え方が含まれるのである。

#### 4) 2000年代前半：高齢男性のセクシュアリティの取り扱い方

1999年は、セクシュアリティに関する基本的かつ普遍的な権利を掲げた「性の権利宣

言」<sup>14</sup>がなされ、性機能を補助するバイアグラの発売がなされるなど、世界的にセクシュアリティへの関心を高める契機となった年であった。

高齢者のセクシュアリティに社会の関心が向き、社会と高齢者の双方がいかにかそれを受け止めるか、その方法が模索され始める。記事には、高齢男性のセクシュアリティの実態報告として成功・失敗の事例が紹介され、高齢者のセクシュアリティを受容する作法が示される。

以下の記事では、高齢者の恋愛の失敗例は死と関連付けられる。セクシュアリティを謳歌する老人の悲劇的な事例は、高齢男性が異性と交際する際のガイドラインとなると思われる。セクシュアリティによる脳活性化の効果も、人間関係を上手にこなす技術を伴わなければ無駄になってしまう、という文意が含まれている。

恋愛は生きる活力の源。いくつになっても男女のドキメキは忘れたくないものだが、あまりに年を取ってからの激しい恋はキケンそのもの。下手をすると、生きる力を奪ってしまいかねないのである。... (老人ホーム内で一人の女性を奪い合う男性二人のけんかの末) 健康そのものだったダニエルは喧嘩からわずか 11 日後...この世を去る。...彼女はストレス性の卒中で入院中。やはり高齢者に恋愛のゴタゴタは毒なのである。

[2001.2.15.「老人の恋」もいい加減にしないと死を招く] 『週刊新潮』

還暦を過ぎて...独り身になった後、彼が同棲したのは 38 歳も若い女性だった。...だが、生活に足る収入が得られなくなると、厄介者扱いをされ、捨てられてしまったのである。...だが...彼女に対する気持ちは真剣だった。...親族が誰も参列しない葬儀の後、遺体は茶毘に付された。

[2001.11.15.38 歳年下「ホステス」に溺れペットのように捨てられた「老醜の性」] 『週刊新潮』

「26 歳の女性をめぐるトラブル」...年金証書を形にサラ金から金を借りて彼女に貢いだ。...激しい責め立てに遭い、この先を悲観して焼身自殺したのでしょうか。...職を転々とかえ、かつて女房、子供にも逃げられた男が最後に科した罰、それは懲役よりも、辛いものだった。

[2003.12.11.若い女を愛し友を刺した 75 歳の「自裁」] 『週刊新潮』

老人ホームは恋愛ブームとか。老人の“性”の明るい面ばかり強調されているが、色恋沙汰は時には妄執を生み、狂気を孕む。...

[2004.5.20.大流行「老人ホーム」の恋愛に水を差す 67 歳女性の「純愛殺人」] 『週刊新潮』

既存の性シナリオにあるルールに反することは悪とされ、そのルールを無視した男性自身に責任は課される。「いつ」(「あまりに年を取ってからの激しい恋はキケンそのもの」「や

---

<sup>14</sup> 第 14 回世界性科学学会総会香港 1999 年 8 月 26 日。

はり高齢者に恋愛のゴタゴタは毒)、**「誰と」**(**「38 歳“も”若い女性」**) というシナリオは、高齢期の恋愛や、高齢男性と年齢差のある女性との恋愛を正常とはみなさないことが読み取れる。しかしながら、なぜそれが正常とみなされないのかという理由づけは見当たらない。理由の不在は、読み手が記者と不問のうちに規範を共有していなければならないことを示しているのだろうか。とすれば、これらの記事は読み手に、積極的に道徳的な読み手となることを暗に要請しているといえよう。

次にあげる高齢者向けセクシュアリティ関連商品の紹介記事は、高齢者が実際に性産業に関心を向ける最初のステップとなる可能性があるため、高齢男性のセクシュアリティを肯定することに加担するものかもしれない。高齢男性のセクシュアルな欲求に対して、社会が選択肢を用意する必要性意識の芽生えがみられる。このように他者を介さずにセクシュアリティに関する情報を入手することは、水面下でのセクシュアルな活動を可能にする。読み手が、記事から得た情報を元に通信販売で商品を購入し、店舗検索のカタログとして使用できるからである。

...高齢者のための CD **「成人向け音訳図書」**。市販のエロチック系の本をそのまま、女性朗読者が語って聴かせる。... **「...エッチ物を選ぶ機会があってもいいと思って」** ...。

[2004.3.18.ご清聴、ご清聴の「ポルノ」朗読] 『週刊新潮』

業界初**「老人御用達」**をうたい文句に、**「美人風俗嬢」**が会員制のヘルスを始めた。...今までありそうでなかった老人向け性風俗というわけだ...。客層は、医者、弁護士、...管理職。むろん、リタイアした年金生活者も多い。...システムは 90 分が基本で 3 万円。30 分延長する毎に 1 万円が加算される。客は、あらかじめ予約を入れて、事務所で受け付けを済ませた後に、提携しているホテルの部屋へ向かう。...細かいオプションは一切なし。90 分間、好きなように過ごしてもらいます。

[2004.11.18.「美人風俗嬢」が始めた業界初「老人御用達」高級ヘルス] 『週刊新潮』

この記事は「業界初」の「今までありそうでなかった老人向けの性風俗」の利用方法を詳細に紹介する。これらの情報は消費活動へと直接的に働きかけることによって、高齢男性のセクシュアリティ意識の改革を促すことにつながる。自己のセクシュアリティの位置づけに迷う高齢男性に、許可や援護の意味を与えることになると考えられる。

セクシュアリティにどのような意味づけを与え、どのようにふるまっていくかは、読み手の「必要」や「志向」に委ねられる。つまり、性シナリオとして記事に求められるのは、自己決定を行うための伝統的、もしくは革新的なセクシュアリティ概念の選択肢の提示であろう。

...**「うちのオヤジ (80 代) が浮気してさ」** ...生きていれば人を好きになるし、嫉妬の心も死

ぬまで消えない。まさにそれが現実だ。このままホームドラマにしたら、どんなにか面白いドラマができるだろう。今日の問題をすべて含んでいる。少子化、世代間ギャップ、老人の性、…。…しかし、ドラマにした時、…彼のお父さんのキスシーンを視聴者が見たいかという、それはどうだかわからない。外国人のラブシーンは、男と女が何歳でも抵抗はないけれど、日本人の場合はなんだか気恥ずかしい。…日本の文化の問題だろう。…恋愛感情というやっかいなものから解放されたいと思ったこともあるが、生きている限り、解放されないみたいね。

[2004.6.4.「痛快エッセイ『オヤジの浮気』』『週刊ホスト』

80代夫婦の浮気問題を「ドラマ化した時」、視聴者が「お父さんの（浮気相手との）キスシーンを見たいか」というと、それはどうだかわからないし、高齢者の恋愛シーンを見ることには「正直なところ、ちょっと抵抗がある」とエッセイスト大石静香は明かす。これは「日本の文化」から生じる抵抗感情であると説明されるが、一方、恋愛感情は生涯失われられないものと認識されている。

この記事は、日本人の恋愛が、好意の感情とセクシュアリティが別の次元で捉えられる傾向を明らかにしており、高齢者のセクシュアリティが抑圧される世間の風潮は、こうした文化的背景から生じていることが示唆される。

## 5) 2000年代後半：伝統的規範と新しい規範

高齢男性のセクシュアリティにかかわる記事は、少ないながらもコンスタントに取り上げられてきた主題であるが、この時期の記事数は減少する。

以下の記事には「誰と」を示すシナリオが見られ、セクシュアリティが許可される関係性は夫婦間に限定されるという伝統的な規範が示される。

ブラジル中西部の小さな町で…60歳以上の男性にバイアグラを無料配布している…最初は該当男性に直接支給していたが、妻以外の女性相手に使用する“不届きじいさん”が続出し、…妻だけが受け取れるようにした。

[2006.12.7.老後“性”策] 『週刊新潮』

精力剤を無料配布した行政の狙いは高齢男性の家庭内のセクシュアルな関係と男性の自信の好転にあったと思われ、「不届きじいさん」が性機能回復後に性シナリオを無視する態度をとったことが批難される。

記事は読み手に伝統的な性シナリオを示し、その規範を強化し再生産することになっている。同時に、高齢男性が妻以外に対して活発な性的行動をとっているという情報を読み手に示すことにもなっている。

不幸な死を迎える老人が続出…歓迎されない”年金難民“たち…1980年代後半「シルバーコロンビ

ア計画」...が進んだ...しかし、計画はあっさり頓挫する。現地で「日本人は老人まで輸出するのか」との批判が巻き起きたのだ。...（タイの日本人社会でも）年金難民に対し「あの人たちが日本人の評判を落としている」との声が強い。みずぼらしい恰好で、娘のようなタイ人女性を連れてくる姿が嫌われるのだ。しかし、男たちにとって「現地妻」を持つのも、介護など老後への備えという側面がある。...日本で惨めな生活しか送れないのであれば、ある意味、彼らも社会の犠牲者とは言えまいか。...日本社会のセーフティネットが崩れかけている。周囲から疎んじられ、寄り添い暮らすチェンマイの老人たちの姿は、現代日本を映す鏡でもある。

[2006.9.15.「夢の海外移住『話が違う』タイ 年金老人たちを襲う『楽園の孤独死』」  
『週刊ホスト』]

この記事では、日本社会の中で生きづらさを感じる高齢男性が定年後にタイに移住した例が紹介されている。経済的打算に基づいた現地女性の冷酷さが描かれ、老後の備えを現地妻に求める日本人男性の甘さを指摘する。

次の記事は高齢者に先人の実態を伝えるとともに、若い世代に対して日本社会の高齢者対策のあり方を見直すよう促す。高齢者に自立を促し始めた日本社会ではあるが、その方法に疑問が投げられる。

東京の...風俗店「P」は“大人の癒し”を謳う会員制の店。「いつも指名してくれる 70 代の男性は少し足腰が弱そうなのですがアッチはすごい」。...（数件の事件を例に）オーバー60 男の性欲が暴走して、“事件化”することさえある。...「性は脳なり」という言葉があります。若いときに活発な性的行動を取ってきた人は脳にその経験がインプットされるため、年をとっても同様の行動を取るとされています（医師）。...「今の 60 代、70 代の方々は、ケータイやインターネットなどがなく、生身の人間、生身の女性と対峙して生きてきた世代です。...女性を口説いたり、セックスをするという対人間の“交渉”ができる。

[2008.5. 2. 「『オーバー60 男の生と性』なぜこんなに“強い”のか」『週刊ホスト』]

60 歳以上の男性のセクシュアルな「強さ」は、対人間の交渉能力であるとして高く評価されている。女性がこうした交渉を希求しているとすれば、その能力は、男性の容姿や体力の衰えをカバーする魅力となろう。そして、高齢男性をセクシュアリティをもつ存在として構築することは、高齢男性には備わり、若い世代の男性には欠落するという異性関係の形成に関わる資質を示すこと、つまり女性に対する関係において若い男性より優れるという差異化によって成立している。

65 歳以上の独身男性は 113 万人 (05 年)、...自らの身を守るため、そして人生を楽しむためには、どうすればいいのか? ...高齢男性がひとりしていると、「お寂しいでしょう」...「ご不自由でしょう」がつく。...男おひとり様への差別と憐憫は強い...。...そういう社会的な見方が本人の自己評価に跳

ね返るから、男性はひとりであることに否定的なんでしょうね。...高齢男性は「結婚」に何を求めているのでしょうか...一番手近な目的としてはセックスがしたい、ということでしょう。...じいさんに若い女性が寄ってきたら（じいさんは）「結婚できるかもしれない」と勘違いしてしまう。...高齢者で「通い婚」「週末婚」「旅行婚」を実践しているカップルはいっぱいいます。...高齢者の「事実婚」が増え...性を伴う高齢のボーイフレンド、ガールフレンドは昔より増えています。理由は3つ...女性が「年金持ち」になったこと...資産相続を巡って子供世代が再婚に反対すること...死別、離別した女性の「セックスに対する敷居」が低くなったこと。...性革命は高齢者の間でも起きています。...老後の付き合いは自分を大きく見せるパワーゲームではない...引退したらみんな同じですよ、ってこと。...「結婚」っていう契約関係を求め続けるなんて、バカバカしいことです。

[2009.11.27.上野千鶴子が伝授！「セックス」「介護」で女に騙されないために「男のおひとりさま力」養成講座]『週刊ホスト』

この記事も、高齢男性のセクシュアリティを認める内容であるが、先に引用した記事と大きく異なっている。この記事は、シングルの高齢男性への偏見が社会にあることを示しながらも、結婚という形式に囚われずに男性が一人で人生を楽しむことを勧めている。近年、男女のセクシュアリティ関係は結婚という形式にこだわる必要がなくなるほど入手しやすくなったというこの研究者は、高齢男性のセクシュアリティが社会的に許可されやすくなる形態を示す。それは、従来の社会規範、結婚という「パワーゲーム」ではない、老後ならではの「みんな同じ」にセクシュアリティを生きる姿である。

## 6) 2010 年以降 (2012 年 12 月 31 日まで) : セクシュアリティの肯定と個人の問題

2010 年以降には、セクシュアリティの肯定を前提としてロジスティクス情報や高齢男性の内面的事項に言及する記事が多い。内面的な問題を克服した男性が自主的に性的行動を起こすことを可能にする具体的な情報が示される。

以下の記事には、身体の調子、身体の自由度の別に選択可能な商品が紹介される。

高齢化の進行とともに急速に広がっているバリア・フリー化の波...。書店で売られているアダルト雑誌の購買層は、この 10 年でかなり上昇し...。“エロティック・バリア・フリー・ムービー”...副音声に出演した女優による表情豊かな音声が入る。

03 年に開館したこの映画館自体、車椅子で入場できるバリア・フリーが売りだ...。高齢者の方がご来場しやすいように、午前 10 時からのモーニング・ショーで上映することにしました。入場料は 60 歳以上は 1000 円。そのうえ、家族に「散歩」と告げて見に行けるなら、高齢者が未だ根強い“偏見”に晒されずにすむ。

AV にも、熟年というジャンルがあり、...足が悪くて外に出にくい（から便利）とリピーターになる方もいるようです。

[2010.8.5.特集 還暦は演たれ小僧 「バリア・フリー」がやってくる！]『週刊新潮』

「バリア・フリー化の波」はセクシュアリティの分野にも及び、高齢男性がセクシュアルな活動を継続しやすい環境が整いつつある。「車椅子」でも「足が悪く」ても、年齢が高くても、セクシュアルな欲求を放棄することはない。「偏見」を回避するための支援策も添えられる。「還暦」を高齢とみなさないタイトルは、60歳の男性のセクシュアリティが社会的に許可されたイメージを与える。これらのメッセージは、消費者となるはずの男性の層を厚くすると思われる。

次の記事では、セクシュアリティと孤独死、独居、孤立が関連付けられ、孤独な状況からの脱出を望んだ高齢男性の失敗例が描かれる。

定年退職したのを機に離婚し、男やもめの生活…。『人生80年時代の資産形成—純金ファミリー契約証券』…「ケイコちゃんのナイスボディ、女の武器で体当たり契約！！」…「明日また来てお掃除してあげる」…どこかに心待ちにする気持ちがあった。いそいそと出迎え、結局、契約書に印鑑を押した。…「金ブームだから銀行より安全！！」…若い時の猛々しさが戻ってきたような気がした。…蟻地獄に落ちたとわかっていながら、這い上がろうとしない蟻のようなものだった。セックスと哀願の交互の攻撃の中で、頭では分かっているが、ブレーキが利かないというような心理状態に追い込まれたのだ…。

[2011.6.2.「身体を張る」女の勧誘で独居老人が落ちた「蟻地獄」] 『週刊新潮』

チェンマイを訪れる日本人には、買春目的の男性が少なくない。…物価の安さに加え、単身男性が多く集まる理由が「女」だ。日本人と見るやホステスたちがすり寄ってくる。目的は金だから、高齢者であろうと関係ない。そんな女性たちに恋愛感情を抱いて、チェンマイにハマってしまう男たちは少なくない。…（交際していた相手は）お金が目当てだったみたいで、倒れてからは見かけなくなった。…ホスピスの近くであった葬儀には、日本人の参列者は数人しかいなかった。

[2012.7.19.タイ現地ルポ！「チェンマイ」で孤独死する「老齡ニッポン男児」]

記事に示される孤独で寂しい心理につけ込む犯罪は、高齢男性なら誰でも陥る可能性があるかと仄めかされる。「若い時の猛々しさ」を求め、「すり寄ってくる女性」の温もりを求めた男性の失敗は、「ブレーキが利かない」心理状態に陥った男性自身に責任が課される。セクシュアリティをコントロールできない高齢男性が受ける制裁は、孤独な「死」であることが示される。

以下の記事は、女性と関わることと男性が「若返ること」が関連付けられている。

「高齢のおじさまたち」…もっと頭を柔らかくして、何事にも顔を出し、まず喋ること。そうすれば若返ること間違いなし。

[2012.2.16.男の最後のチャンス] 『週刊新潮』



女性を見たらまず声をかけ、話しかけてみる。そんなことはできない、と言う人は多いだろうが、出来ないことをやるから若返るのである。とにかく重厚から軽薄に、変身して女性に突っかかってみる。...でもいやだ、という人は家に閉じ籠って、孤独でいるよりないけれど。

[2012.6.7.立ち上がれ、男性諸氏] 『週刊新潮』

...茶道を学ぶとともに、素敵な女性とも親しくなれる。まさに一石二鳥...。...邪念あってこそ、進歩が生まれる...

[2012.8.2.邪念で若返ろう] 『週刊新潮』

ガールフレンドと実際に親しくなっていく方法...。焦らずゆっくり...、複数の女性を同時に追いかけること...、まず誉めよう...。いずれにせよ、女性と会い、話しているうちに、気持ちも和んでいく。... (妻以外の) 女性とあうことは、それなりに刺激になり若返る。

[2012.8.9.ガールフレンドをつくろう] 『週刊新潮』

ここでは性的行動を性交のみに限定せず、女性との会話や食事でも男性にプラスの刺激を与えるという解説が70代医師によってなされている。「声をかけよう」「褒めよう」という初期行動の提示は、読み手の行動実現を促す。男性が高齢期を豊かに生きることとセクシュアリティの活動は関連付けられ、コミュニケーション技術の習得が勧められる。そして、「でもいやだ、という人は」と、最終的な責任は読み手の選択に委ねられる。

...各業界では「高齢者層をいかにして取り込むか」が重要課題となっている。それは「セックス」にまつわる分野とて例外ではない。...さすがにこの歳での(ラブホテル)利用は気恥ずかしく、(ホテルスタッフと)対面したくない。... (夫婦でも) 自宅では同居している家族に気を遣うし「いい年して」と思われたくない(高齢者はラブホテルを利用する)。...たった2段の段差にも手すりをつけ、...フロントは無人で、...客室で自動精算できるようにしています。...シニア向け食事メニューを提供し...量も通常の食事より少なくしており...。あからさまに「高齢者向け」を謳うのはタブー...。...「シニア割引」...今のところ、一人も利用者はいない...年下の女性を連れていけば、なおさら格好がつかない。...「高齢者が高齢者であるという引け目を感じさせない工夫は難しい」(ラブホテル支配人)。

[2012.11. 9.「世相リサーチ 業界が宝の山と見込む『オーバー60 ラブホテル』の深〜いサービス でも「シニア割引はNG」] 『週刊ポスト』

この記事には年寄り扱いを嫌う高齢者に対する作法が示され、高齢者が「高齢者である」ことを引け目に感じていることを社会側が読み取っていることがわかる。各種業界はこの高齢者心理を基に様々な営利戦略を繰り広げ、異世代が共存する社会で、若い世代側がこ

の高齢者心理を考慮する必要性が述べられる。

世間一般では、年を取るとともに性欲も衰えるものと思われているようだが、人間の性はそんなに単純なものではないようだ。...この歳になると（60代）守備範囲がどんどん広がって...みんないい女に見えてくる。...勃たなくても性欲はある。いや勃たない、セックスできないからこそ、性欲の持っていき場がないから悩ましい。...年取ったら枯れるなんて大嘘！...ジジイの役得で、枯れてるように見えるからチャンスがある。性欲は枯らさず、外見はガツガツせずに枯れた風情を保つ。それが、長くセックスを楽しむ秘訣かもしれないね。...これからもっと楽しみましょう！

[2012.7. 13. 「タブーを捨てよ SEX を語ろう『恥ずかしながら60過ぎても性欲が鎮まらないんです』こんな人たちもいるんです」] 『週刊ホスト』

セクシュアルな関心が旺盛な高齢男性4名の本音や女性への接近法が示され、セクシュアルな関係をもつ女性がいる場合でも性機能の問題で実現できない悩みが述べられる。また、外見の年相応なイメージを大切にしながら内面に旺盛なセクシュアルな関心を維持することが、今後の長期的性的行動に繋がるというアドバイスがなされる。外見を若く装いがちな高齢男性と反対の考え方である。

...歳を取れば性欲が衰え、風俗店に行く気も薄れてくる—わけがない。シニアになっても性欲は旺盛で、時間はもちろん、人によってはお金もある。相応しい風俗店さえあればやっぱり通ってみたいのだ。...待合室では完全に浮いた存在で、落ち着かなかった。周りの20代の客からは“いい年してこんなところに来ている”みたいな視線を浴びますから。...「私も62歳なので、体面を気にするシニアの気持ちはよくわかります」。...「安心して通える店であること、女性が風俗嬢らしくない雰囲気を持っていること」などがシニアに人気が出る条件だという。...シニアは何年も営業を続けている老舗に通いたがり、何年も同じ店にいる女性を指名したがる傾向がある...。EDでも臆する必要なし。...「性的なサービスも重要ですが、それよりも人間的なぬくもりや精神的な癒しを求めているお客様が多いです。...会話に気を使うようにと。女性を指導しています。...会員になると料金は70分1万8000円～...、90分1万5000円のコースもある。...「今の風俗というのは“家族機能のバラ売り”なんです。だからこそ、無縁社会といわれる現代にマッチしている。...」また、（風俗）女性を家に呼ぶときには、客も部屋を掃除し、身だしなみを整える。「そうした気持ちが若さを保つんだと思います」。「早朝から風俗店に通っているシニアを見ると、ダンディに着飾ったイケてるおじいちゃんが多く、いかにも“ハレの日”を満喫している感じなんです」...シニアにとって風俗こそ、最も効果的な“アンチエイジング効果”があるのかもしれない。

[2011.10.21.年金支給日！60歳向けフェーズク行列のできる店「シルバー世代のSEX」を考える] 『週刊ホスト』

風俗店経営者から、高齢男性のセクシュアルな欲求が身体的快だけではなく、家族機能の代替として温もりや癒しを市場に求めているという高齢男性の実態が紹介される。

対応する若い世代側には、高齢男性の性機能や心理を推し量る能力と、恥ずかしい思いをさせない技術が求められ、対若い世代とは異なる対応が必要とされる。すなわち、高齢男性の性機能や肉体、および知識等を含む精神的活動が、若かりし日とそれほど変化していないという自信を提供するサービスが求められている。

### 第3節 考察

以下に、本章で取り上げた雑誌記事に示される、高齢男性のセクシュアリティと男らしさ、性シナリオについて考察する。

#### 1) 高齢者であることと男性であること

記事には、伝統的なセクシュアリティ規範に忠実なものや批判的なものがある。

規範に忠実な記事は、規範に反する高齢男性の行動に対して批判的である。高齢男性のセクシュアルな欲求は減少してしまうという年齢規範の立場に立つので、高齢男性の旺盛な欲求を年齢相応の正しいものではなく社会的に危険な行動とし、社会的制裁と関連付ける。高齢男性の旺盛なセクシュアリティを問題視し、セクシュアルな欲求の暴走を病とする文脈となっており、その行為と男らしさの欠如が密接に語られる。男らしさの言説は、セクシュアリティの統御能力に結びついている。

規範に批判的で高齢男性にも欲求があるとする記事は、2000年代後半以降に増加し、年齢規範に抵抗する高齢男性の行動を支援する立場をとる。高齢になっても男としての存在意義を肯定する傾向にあるが、それは条件付きの肯定で、そのためには「女を立派に支配できる」力を示す必要性が示唆される。男性であることが、セクシュアリティの欲求、その対象としての女性への支配と結びついている。

高齢男性の「キラキラ」したセクシュアリティを示す記事は、人生を幸福に健康に過ごすこととセクシュアリティを関連付けて示す。そして、セクシュアリティは男性が望めば生涯入手可能であるとし、実行に移す助けとなるような情報を提供する。2000年より前はビデオやCD等のセクシュアリティ商品が紹介され、2000年以降はそれらに加え、風俗店等施設の利用方法や客層に及ぶ詳細が紹介される。また、通時代的に若い世代に対する気恥ずかしさへの対処法や回避策が示される。

上野千鶴子による記事を例外として、いずれの場合にも、高齢者であることは男性ではなくることだという年齢規範とジェンダー・アイデンティティの相克が前提となっており、女性を対象に、若い男性と差異化されたセクシュアリティの実践がジェンダー・アイデンティティの維持、つまり「男としてやりなおすチャンス」として示され、その具体策としてリプロダクツ・セクシュアルヘルス情報、ロジスティクス情報が提供される。

その方法は2通りあり、男の仲間意識を再確認し強調する方法と、発想の転換によって

これまで男らしくないと認識してきた事項が実は男らしさと密接に関係していることに気づく方法が示される。前者はこれまでの性役割をホモソーシャルな絆によって確認するもので、後者はその解体に向かうと見せて男らしさを再構築している。

これらの記事は、実例紹介と専門家の解説によって、セクシュアリティの罪を作り出す。男性がセクシュアリティの常識に沿わずにこういった身体や欲求を失うことは、「男でなくなる」＝「社会から締め出される」という感覚を生じさせるのではないか。男らしさとセクシュアリティは密接不可分に描かれ、これらを維持する高齢男性には自由な恋愛が許可される文脈となっている。

## 2) 医療言説に規定される高齢男性のセクシュアリティ

高齢社会をむかえ、高齢者に対する社会的態度が模索されているなか、セクシュアリティという私的な部分へのアプローチは、彼らをうまく統治する可能性を高めると思われる。高齢者のセクシュアリティの言説を医療の言説に置き換えれば社会的に語りやすいためか、1990年代前半は高齢者のセクシュアリティは「病んでいる」というレトリックとともに、1990年代後半以降は「免疫力を高める」などのレトリックとともに登場する。さらに1999年以後、セクシュアリティを主体化することが高齢者自身の「健康」や幸福と不可分であるというレトリックが追加される。

高齢男性のセクシュアリティをこのように科学的言説をまといつつ「男らしさ」「若さ」「内面」「コントロール」と関連付けることは、高齢男性を社会的な自立に向かわせる作用をもつかもしいない。しかしながら、健康や社会の幸福を目的として個人のセクシュアリティが語られる限り、高齢者のセクシュアリティは彼ら自身のものにならないのではないだろうか。社会がつくりあげる男性的魅力の規準に囚われすぎないこと、高齢者が自己の身体と欲望に忠実になることによって新しい生き方を作り出していくことが課題であるように思われる。

## 3) 性シナリオと3情報の関係性

本章で扱った記事は、時代を通じて、高齢男性のセクシュアリティを未知の捉えきれない事項として扱っている。高齢男性の性機能やセクシュアルな欲求に個人差があるため一括して捉えにくいということと、未だ調査研究の途上にあるということがその理由と考えられる。

雑誌から読み取った性シナリオは、高齢男性のセクシュアリティや男性的魅力について、正常かどうかを自己診断するチェックシート、未来を見通すチャートとして作用すると思われる。社会が現在の自分に求める期待や、親密圏での振る舞いを模索する読み手に対して、いくつかの手段を提示することになる。

記事にあるロジスティクス情報は、具体的に性的行動の初動を示す。また、リプロダクツ・ヘルス情報は、高齢男性にとっても未知な性機能について教示し、記事に登場する専

門家の科学的言説は読み手に正確な知識を提供するため、男性がセクシュアリティに関する疑問を他者に質問する手間を省く。これら二種類の情報は、性シナリオに反する高齢男性の行動を自己完結可能にすることから、高齢男性の性的行動を活発化させると考えられる。

科学的言説に裏付けられるという点をのぞけば、高齢男性の性的行動に対して参照されるシナリオと、若い世代の性的行動に対して参照されるシナリオは類似している。高齢男性が、若い世代と類似した理想像を規準としてしたがうなら、持っている機能を減少させないことへの希求が高まり、若者と異質であることを受容することに否定的になる可能性が高まると思われる。もし、年齢に応じてセクシュアリティに関する異質性があるとするなら、高齢者側は異質性を隠し、若い世代は異質性に気付かない振りをし、いずれも異質性をもみ消す方向に向かっていることにもなるだろう。

ここで、前述したように高齢男性に特化したエロス情報が見当たらないことは非常に重要である。理由としては高齢期にはセクシュアルな欲求が減少・消失するため不要とみなされているから存在しないという可能性と、あるいは、欲求は何歳になっても若い男性と同じであることが理想像とされている可能性があり、そのいずれとも判別しがたい。しかし、ほぼ毎号に若い女性のグラビア写真が掲載されており、これを見る男性の年齢は特定されていないので、性シナリオでは高齢男性に不釣り合いとされている若い女性が、高齢男性のセクシュアリティの対象として用意されていると解釈することができる。高齢男性が若い男性と同様のセクシュアルな欲求をもち、同じ対象（若い女性）を争わねばならないという、若い男性を中心とする年齢規範をみることができ<sup>15</sup>。

#### 4) 男性的魅力を補填する方法—差異化と承認のための他者

そこで、高齢によって魅力が減じた男性が男社会でその座を維持する方法が示されることとなる。その方法は二通りあり、ひとつは男性の仲間意識を強調する方法、もうひとつは若い男性との差異、すなわち洗練された男に進化したことを示す方法である。前者は、性風俗を利用してでも男性として性的行動を行い続ける方法を示しており、後者は、若者には不可能な方法、すなわち、高い経済力、経験知が高める会話力やコミュニケーション力、また衰えを感じさせる容貌が女性に警戒心を低下させることを利用するなどの例が示される。いずれも女性を支配する立場に有り続けることを目的としているという意味で共通している。男らしさとは、女性を劣位に置きながら、常に他の男性とのホモソーシャルな関係、および他の男性に対するヘゲモニックな関係（Connell 1995）によって構築される。

また、男性であり続けることと性機能は密接不可分に扱われている一方で、性機能維持が自己の快楽を目的とするレトリックは見当たらない。記事には、性機能を維持する男性は、女性をセクシュアルに満足させるため二人の関係を良好にするし、男性の自信にも繋

---

<sup>15</sup> ここに高齢女性への年齢差別をみることがも可能である。

がるためその姿が女性の目に魅力的に映り異性を惹きつけるという文脈がみられる。セクシュアリティを通じた男らしさの証明は、それに満足する女性の存在を必要としている。

また、長寿とセクシュアリティ活動は関連付けて述べられ、精神的・身体的な若さを保つこと、余生を楽しく生きることについても女性とのセクシュアルな関わりと密接に示される。セクシュアリティは、他者との関係性における実践なのである。

このように生涯「現役」でいられる身体の価値を高めているのは、高い男性的魅力を証明するツールとしての意味付けであろう。女性とのセクシュアルな関係としてセクシュアリティを維持した身体は男性間の差異を明らかにする基準となり、勃起可能な身体は、選ばれた者、勝者の資源として、男性の価値を高めるらしく思われる。また、女性との甘美な関係を生み出す可能性を秘めるものとして男性が真の男であり続ける願望を支えることになる。

また、記事には、高齢者の性的行動は夫婦・家族間で管理されるべきであるという考え方が示されているが、高齢男性側の希望はそれに反するもので、妻以外の女性との性関係を望み、家族には秘密に性的行動をとる例が示されている。ここには個人と家族の欲求の齟齬が、高齢男性のセクシュアリティ問題の根底にあることが仄めかされる。

とはいえ、高齢男性のセクシュアリティに関する理想像は、男性的魅力の維持と自己管理能力が両立する点におかれている。セクシュアリティの異常と正常の境界線の決定は、性シナリオをガイドラインとしてなされていると思われる。ここでいう異常とは、生殖機能の喪失、男らしさ、男性的魅力の欠如というセクシュアリティ能力の過少だけでなく、過多の場合も、その統制能力のなさによって逸脱行為として社会的制裁を受けることになり、記事には社会関係の断絶や親子親族関係の崩壊と関連付けて描かれる。能力の多寡よりも重要なのはそれを制御したり維持したりできる、いわば自己の身体と性欲の支配の能力（ひいてはそれを通じて魅了される女性を満足させ支配することとなる。）であるように思われる。

したがって、加齢によって性機能障害に陥った男性の内面には、何らかの欠陥が潜む可能性が専門家によって指摘され、その欠陥が男性のアイデンティティにまでマイナスに作用する可能性が示唆される。欠陥は、男性が他人の言葉に傷つく未熟さや身体的老化に早期に手を打たないなど、身体管理を怠る態度と関連付けられる。

したがって、こうした解説は性機能と男らしさの関連付けを強化し、男性に伝統的な規範や性機能を維持させる方向に作用する。ゆえに、元来男性不妊治療のために用いられるバイアグラのような対処法が、生殖を求めてはいないが男らしさを取り戻したい男性たちに求められることになるのではないだろうか。

## 5) 性産業の消費者として的高齢男性

雑誌記事に扱われる高齢者のセクシュアリティは、約 20 年を通じて把握できない未知の事項として扱われている一方で、高齢男性のセクシュアリティに対する社会側の態度は大

大きく変化しているように見える。高齢者向けの性産業が多数台頭し、既存の性産業関連施設は高齢者向けにバリア・フリー化が進められている。

しかし、これらの社会環境は、高齢者のセクシュアリティへの意識の変化によるものではなく、高齢者の人口が増加したことを受けた経済効果を狙うものだと思われる。社会は高齢者のセクシュアリティに対する否定感を残しつつ、高齢者のセクシュアリティは新たな産業として発展していこう。

高齢社会において雑誌購読層としても性産業顧客としても男性高齢者に注目が集まる傾向は確かに存在し、雑誌媒体が一定の役割を果たしている。男性にセクシュアルな商品を消費する行動を煽る傾向は、女性に比較して高い経済力が影響していると思われる。年齢階層別貧困層の男女差は高齢になるほど顕著である（厚生労働省 2012）。

記事に表れる性シナリオでは、高齢男性には不釣り合いとされる若い女性であるが、対高齢男性の性産業におけるサービス提供者には若い女性が想定されている。金銭と交換すれば許可される関係性となり誰にも迷惑がかからず狂人とみなされることもないため、男性的魅力に欠けるとされる高齢男性でも、そこでは確実に女性から男として承認を得ることが可能となることが強調される。ここに、特に「若い」女性をセクシュアルに支配することが、男性的魅力の高さと関連付けられていることが読み取れる。こうして高齢男性が立派に若い女性をセクシュアルに支配できる場所を確実に提供することは、高齢男性の男としての疎外感を除去することになるのである。

以上、本章は、高齢男性のセクシュアリティに対する視線や高齢者自身の行動決定は、社会で広く流通する雑誌記事が発信する情報によって影響されるという観点からアプローチしてきた。

雑誌記事における性シナリオに年齢区分はなく、高齢男性特有のシナリオも用意されていない。高齢男性の正常なセクシュアリティとは、若い男性のセクシュアルな関心や欲求と大きくかけ離れることがなく、かつ、若い男性のそれらを上回ることがないものであった。また、男性的魅力を維持または上昇させることが男としての社会的承認と関連付けられており、セクシュアリティと男らしさは密接不可分な関係にあった。

社会のまなざしとして、高齢男性のセクシュアルな欲求を肯定しようとする傾向は高まっているが、その行動に対しては制御や家族といった言葉によって一定の制限を設けている。記事にはその性的行動が許可される条件が示されていた。

そして、記事に表れる年齢規範は、高齢者や老いを中心に添えた実態に沿った規範ではなく、「若さ」を中心としてそこからどの程度離れているかという視点で成り立っていた。男性らしくあることは、年齢を重ねることと相克するのである。徐々に「出来なくなっていく」「能力が不足する」ことを前提とした言説は、高齢男性の能力が若い時代のそれから徐々にマイナスされていき、どれだけ多く残っているかを競わせるようなものであった。「まだ出来る」男性が社会的に高い評価を受けるシステムは、男性に「もう出来ない」と言えない無言の圧力を与えている。

よって、本章で取り上げた雑誌記事の社会的機能は、高齢男性が目指すべきセクシュアリティのベクトルを設定する機能と、社会に通底する男らしさや高齢者らしい振る舞いの伝統的理想像を再生産し社会で自明視される事項と化す機能、同時に、新しい言説をもとに性シナリオを更新する機能であった。次章以降では、このような規範的内容がどのように当事者に内面化されているのか、他者との関係においてどのように実践されているのかを、インタビューから考察していく。



## 第4章 高齢期男女のセクシュアリティ観

### 第1節 調査の概要

#### 1) 調査目的

前章まででみたように、高齢期が、経済的にも健康状態においても自立性を維持するのに不安定な時期であることは、マスメディアでも言及され、高齢者自身によっても自覚されている。ゆえに、彼／彼女たちは意識的に自立を自身に課す傾向にある。他者に依存することはネガティブなこととして捉えられ、社会的弱者となることを極力回避したいと願っている。他者から受ける援助をありがたいと思いつつも、厄介者にはなりたくないという気持ちがあるといえよう。そのため、自身の身体の変化や、それに伴う生活の変化に対応しながら、生活基盤や人間関係を再構築していく必要に迫られている。特に定年退職という大きな変化を経験する高齢男性にとっては、その人間関係において、配偶者の存在が、生活の幸福感に大きく影響することがわかっている（赤澤他 2008）。

しかし、本研究では、「家族の中の高齢者」ではなく「個としての高齢者」を捉える視点から（安達 1999）、高齢者と配偶者との関係性だけでなく、広く高齢者自身が異性との親密関係をどのように捉え、実際にどのように行動しているのかを調査し、異性の存在が彼らにとってどのような意味をもっているかを明らかにする。

高齢期の異性関係といえば、近年、高齢者の介護や医療の場で問題とされる性的行動についての報告が少なくない。それらの報告では、高齢者の性的行動が、家族や介護者や周囲の人を不愉快にし、性的異常行動として忌み嫌われることが多い。しかし、セクシュアリティは人の一生涯を通じての不可欠な一部だという本研究の立場からすると、当事者にとっては、精神的満足を求めるなど、人間としての絆を求める自然なセクシュアルな衝動の発現で（三宅 2000）、高齢者にも異性に対するセクシュアルな関心があり、性的行動を通じて精神的・身体的満足感を得たいという欲求があることを理解しなければならない（大工原 1979）。

ただ、第1章と第2章で述べたように、先行研究ではセクシュアリティや人間形成、生活の満足度等において男女で性差が示されてきた。また、男性にとってのセクシュアリティと男らしさは、満足させるべき者、庇護されるべき者、支配されるべき者としての、非対等な女性の存在を必要としていた。果たしてインタビューによっても、現代日本で、男女間のセクシュアリティに関わる考えのズレや利害の一致はみられるのだろうか。また、男性間にホモソーシャリティを成立させるような共通点、あるいはヘゲモニックな差異化はみられるだろうか。

#### 2) 調査対象

東京近郊の中都市にあるY老人クラブに所属する60歳以上の男女14名（男性6名、女性8名）を対象に、高齢期における異性（配偶者を含む）との親密性の捉え方がどのようなも

のであるか、対個人で一人 2 時間程度、半構造化インタビュー<sup>16</sup>を行った。調査の時期は、2009 年 11 月から 2009 年 12 月であった。

以下では、男性には 1 から 6 までの番号を、女性には 1 から 8 までの番号を振って個人を区別する。本稿で扱うインタビュー・データについて、インフォーマントが同定されないよう最大限の配慮を行い、Y 老人クラブの正確な所在地、データの属性は明記しないことにする<sup>17</sup>。以下、インタビュー発言中の括弧内は筆者による補足である。

表 4-1 性別、年代別人数 (人)

	男性	女性
60 歳代	1	3
70 歳代	5	5
計	6	8

表 4-2 性別、配偶者有無別人数 (人)

	男性	女性
配偶者有り	3	1
配偶者なし	3	7
計	6	8

調査対象 14 名の当地での平均居住歴は、男性 22.8 年、女性 18.6 年であった。女性の方が短いのは、配偶者を亡くしてから引っ越してきた人が多いことが理由である。経済的状态は、収入を年金に限る人がほとんどで、月収平均額は約 30 万円であった (回答 8 名)。企業年金も受給している人は月額約 50 万円になる。他に、株式配当など雑収入を得ている人もいた。男性は、大企業の元社員が多く、女性たちもまた経済的に比較的裕福で、様々な趣味のグループに参加している。また、多くは、農村から都会に出てきた人たちであり、農村コミュニティの濃厚な人間関係から解放されているために、高齢期においては、比較的自由な人間関係を形成しえたものと思われる。

夫婦の労働形態は、退職前の共働き夫婦は 12 名、専業主婦は 2 名である。健康状態に、重大な不安を感じている人はいなかった。学歴は、中学卒から大学卒まで様々である。出身地は、地方農村が多く、第一次産業を生業にする家族で育った人が多く、きょうだい

<sup>16</sup> 孤独感という個人の主観的な感情を問うためには、主観的な語りを元に紐解いていくことも有効であろう。人々の主観的な語りから、ある社会的現象を読み解いた先行研究には、摂食障害の女性の語りに注目した研究 (浅野 1996)、性同一性障害の方の語りに注目した研究 (鶴田 2009)、顔に重大な障害を持っている人の語りに注目した研究 (西倉 2009)、禿げの男性の語りに注目した研究 (須長 1999) がある。これらの研究には、語りの分析にエスノメソドロジーの手法や相互行為秩序の理論が用いられてきた。人間が他者に自己を提示する時には、その状況にふさわしい行為を理解していることを示すが、そこから逸脱した行為をしてしまった場合には、他者を納得させるための常識的な理由づけがなされる。その常識というものを人々のミクロな行為や主観から読み取ることで社会を解釈しようとする手法は、個人の感情が社会からいかにして生起しているかを読み解く突破口になる。

<sup>17</sup> Y 老人クラブの会員総数は 74 名、内訳は、男性 33 名、女性 41 名である。都市化地域にあり、加入率は低い。加入率は 60 歳代で低く、70~80 歳代で高くなる。東京およびその近郊の大工業団地に勤めていた人たちがほとんどを占め、大企業が自社社員に分譲した新興住宅地も多く、自治会は、職域の延長のようなどころもある。インフォーマントだけでなく、会員全般が、退職後の年収は大企業であるがゆえ、厚生年金、企業年金によって補償され、遺族年金となった場合にも比較的裕福である。

多い。インターネットを使う人は、5名であった。

## 第2節 性的行動の対象と意味

### 1) 夫婦間のセクシュアルな関係

インフォーマントの結婚の概要をあげる。14名の初婚年齢を性別にみると、男性は19～27歳（平均値25.5歳）、女性は22～36歳（26.5歳）。結婚継続年数は、男性32～56年（平均値43.6年）、女性11～44年（平均値31.8年）。結婚の目的は、「一緒に住むこと」12名（男6名、女6名）、「家庭を作ること」2名（女2名）で、出会いは、職場の同僚（5名；男4名、女1名）、親族からの紹介（9名；男2名、女7名）という結果であった。

結婚そのものについては、「結婚は、皆いつかはするものと思っていた」（男5）。自分が選んだ人との共通の目標は、「仲の良い家族」（男6）をつくることであった。

円満な夫婦関係を保つために工夫してきたことは、相手を尊重することであった。「お互いに裏切られたと感じないような行動をとること」（男6）、「自慢できるような夫（妻）でいること」（女4、男1）、「嘘をつかないこと」（男2）が挙げられた。夫婦で話し合うこと、会話をすることも、性交と同じかそれ以上に重要視されていた。その際には、「全てを言わないこと」（男3）、「相手が嫌がることは話題にしないこと」（女7）に留意されていた。

また、相手の親族への気配りも相互になされてきた。「相手の親やきょうだいを自分のそれ以上に大事にする」（女8）ようにしてきた。例えば、「（夫の）きょうだい受験の為に居候をしていた期間、食費が足りなくなってしまう、質屋にこっそり自分の指輪を入れた。自分からは一言も夫には言わなかったのに、夫はわかっていたみたい」（女8）で「今でも感謝の言葉を添えてその話をしてくれる」（女8）。

一般的に、結婚した後の男女の関係は、夫婦や家族の役割関係に変化してしまいがちである。「そうはならないのが理想だが、仕事に振り回された生活のため難しい」（男6）「家族を維持しようと思ったら、夫婦関係を犠牲にするしかない」（男5）「夫婦のことよりも、子どものことを優先してあげるべき」（男3、また男6、女3も同様の意を述べた）と考えられていた。「夫婦関係になりたくて、セックスしたくて結婚したのに、その関係以上に守らなければならない家庭とか家族とかいうものが出来てしまうなんて、なんとも納得しにくいことだ」（男1）。

性役割は、夫婦の役割が明確に区別されていた。「学校や親から、結婚式を挙げて、良識的な家庭を築き、良妻賢母になることを良いこととして教わった」（女3）、「家族のことを考えると、嫌な仕事でも辞められなかった」（男4）、「女房は、誤解のない見方で見てあげれば、黙ってついて来ます」（男3）、「妻は私が台所に立つことを嫌がります」（男4）と述べられた。また、「夫婦だから対等なんだけれど、子どもの前では、お父さん、お父さんと持ち上げた」（女6）女性もおり、家庭内における父母役割を遂行したことが示された。どうしてもなく疲れた時に「私だって働いているんだからと愚痴をこぼしてしまった」（女7）こともあるが、普段は母・妻・労働者の役割をこなしてきた。

また、夫が妻を経済的に扶養するべきだという考え方が一般的で、共働きであっても妻

は夫の収入でやりくりし、経済的困窮は主婦の手腕の不足と考えられていた。「社会的なことは全て夫任せでした」(女 2)、「家計は全て妻に任せていました」(男 3)と述べられたように、妻の領分は家庭内で、有職女性でさえも、その領分の仕事をこなすことを当然視していた。

しかしながら、夫の退職を機に、その考え方は変化していた。有配偶者の年金の使途は、夫婦でよく話し合われ、「各人が使っていい額を決めた」(男 1)、「入ってくる金額が一定なので、話し合わざるを得ない」(男 6)と、管理を二人で行っている人もいた。反対に、「各自の年金は各自のもの」(男 5、また女 3 も同様の意を述べた)と、全く別個に管理している人もいた。

夫の退職を先に迎えた共働き夫婦において、「これからは僕が主夫になります」(男 3)という宣言がなされて形勢に変化があり、収入を得ることが出来る妻が家計を支えるという柔軟な姿勢も見られた。

性交については、夫婦のうち男性側が 60 歳を超えたころから、頻度や内容に変化があった。性交の回数は、結婚当初から現在までの期間を通じ、年齢とともに減少した。性交の方法や内容は、「お互いにわかりあってきて楽しめるようになり、回数は減ったかもしれないが 1 回の時間が延びた」(男 1)人もいた。夫婦の性交の継続年数は、11~46 年と長い。現在も継続している例もあるが、最後に性交をおこなった年齢は、男女ともに 40~70 代と個人差があった。性交の挿入段階までは至らずとも、あるいは「出来ているのかいないのか、わからない状況」(女 3)にあったとしても、夫婦の肉体的な接触があれば、「それだけでも十分な満足感が得られる」(女 4)と述べられた。

夫婦間において、性交を重要視しているかどうかという問いには、全てのインフォーマントが肯定を示した。「互いを尊重する気持ちを表現する手段」(男 3)、「肉体に触れてこそ、一緒にいる実感や安心感がわく」(男 1)、「二人で楽しむことのひとつ」(男 6)という回答がなされた。なかには、セックス自体を好きになれなかったという女性もいた。「その時間は好きなので、演技をした」(女 4)と回答したこの女性は、セックスによってオーガズムを得ることよりも、好きな男性と触れ合い「甘えたい欲求が満たされる」(女 2)ことを重要視していた。

男性の場合、夫婦継続年数は 11 年~46 年と長く、彼らは対象女性の身体に直接触れるということを重要視しており、極端に頻度を減らさない工夫をし、「お互いを尊重する気持ちを表現する手段」で「肉体に触れてこそ、一緒にいる実感や安心感がわく」と述べている。お互いの身体的特徴を理解し合えてからの親密関係は、相手をいたわるという行為であると考えられ、また相手にもそれを望んでいたと認識されていた。長期の共同生活によって生じた問題を共に乗り越えたという実感と、各人が抱えている問題への努力をねぎらいあうという目的のためにセクシュアリティ行動を捉えている<sup>18</sup>。長い人生のなかで男女関係の危機

---

<sup>18</sup> この点は中年男性との比較調査によって明らかにしたところである (Nakahara 2010)。

が訪れることは回避できないが、「自分の感情をコントロールしてその危機をうまく乗り越えてゆこうとする態度が大切だ」と述べている。

高齢女性たちも、配偶者とのセクシュアリティについて、高齢男性と同様に重要なコミュニケーション・ツールと捉えていた。

対象の14名全員が、結婚したら愛情をとまなう性関係は配偶者に限定すべきだと、結婚前から考えており、今もその考えは変わっていない。結婚したら性交相手を配偶者に限定することについて、結婚直後に夫婦で話題にしたという人が多かった。「男女関係のことで裏切りはやめようね」（男4）、「浮気はしないで行こうね」（女8）ということ誓い合ったことが示された。もっとも、自分の婚外性的行動は許されるが、「妻の同じような行動は許せない」と答えた男性もいた。

貞操観については、「結婚したら、男性とは口もきいてはいけなかったと思っていました」（女6）、「手をつないだら浮気だと思っていた」（女7）、「セックスは、結婚しないと出来ないことでした」（男4）と述べられた。

## 2) 配偶者以外とのセクシュアルな関係

インフォーマント全員が、愛情をとまなうセクシュアルな関係を配偶者に限定すべきだと考えているけれども、婚外の性交については是非を問う問いには、否定派「絶対に許されない」（6名；男4名、女2名）と、容認派「愛情がなければ婚外性交をしてもよい」（8名；男5名、女3名）に分かれた。否定派は、「結婚して一生この人とやっていくと決めたのだから、自分の感情にブレーキをかけてでも貞操を守るべきだ」（男6）、「結婚したからこそセックス出来る男女関係にあるのに、結婚していない女性とも同じことをするのであれば、何のために結婚したのか分からない」（男3）と述べた。容認派は、「しっかり働いているのですから、神様だって浮気くらいは許してくれるはずですよ」（男1）、「互いに気づかれないうところで恋愛するのはよい」（女3）と考えていた。

配偶者以外とセクシュアルな関係を持ったことのある人に、その詳細を尋ねた。その相手は「会社の同僚」（女4）、「近所の知人」（男5）、あるいは、「風俗店において金銭と交換に」（男1）行われた。風俗店の場合、「愛情を伴わないセックス」（男1）であるという理由で、当人には浮気であるとは捉えられていなかった。また、勤務先の同僚とは、一歩距離を置いた関係であるからこそ、「他人には言いにくいような異性関係の相談もしやすく、かえって異性関係にもなりやすい」（女6）と考えられていた。

性交までは経験しなかったが、「自分も危ないところまで行きました」（男4）という人もいた。その際にブレーキになったのは同性友人からの忠告で、「子どもに恥ずかしくない人生を送ろうと思いなおし、間違いを起こさずに済んだ」（女7）ので友人に感謝をしていた。また、「結婚後に現れた憧れの人に恥ずかしくないように振る舞ったことで、道を踏み外さずにすんだ」（女8）という人もいた。

浮気とはどの段階からを指しますか、という問いには、「セックスから」（性交）と答えた

人が11名（男4名、女7名）、「二人きりの食事から」と答えた人が3名（男2名、女1名）いた。「異性と二人きりになる機会を自分から作ったということ自体、すでに感情が動かされているということだ」（男6）、「ただの食事と違っていても、気持ちの入った人との食事は、見つめ合って食べるだけでも前戯と同じ効果がある」（女3）ということが、後者の回答の理由であった。

配偶者が婚外性交を行った場合を想定し、その対応を問うと、「絶対に離婚する」（男6名、女5名）という人、「嘘をつかないでいてくれれば許す」（女1名）、「私からの質問に正直に答え、すべて認めたらうえで謝ってくれれば許す」（女2名）という人がいた。長い人生のなかで別の異性に心を奪われそうになった経験がある人は少なくない。離婚すると答えた人は、「離婚して身辺整理をしてから新しい恋に移ればよい」（女4）、「恋をする自由を許される身分になってから頑張れ」（女7）、「過去は清算してから次に行きましょう」（男3）という考え方が示された。それが恋愛における潔い態度であると考えられていることが明らかにされた。複数の男性とセクシュアリティ関係を同時進行する男女に低い評価が与えられる。許すと答えた人は、「浮気を問い詰めた時に、嘘をつかれたり、否定されたりしたら、新しい恋の相手に負けた、目の前の配偶者に負ける悔しさを両方感じることになり、その不貞を絶対に許せない気持ちになる」（女2）が「ひたすら謝ってくれて、改めると言っている」のであれば、「人生を共有すると決めた同士として、間違ふこともある」（女8）と許す気持ちになれると説明した。

婚外の性交については、これまでに多くの機会があったと回答があった。「夫婦関係の危機は、ある程度仕方のないことで、それよりも家族の維持を考えるべきだ」（女7）し「多少の時間をおいて、自分をコントロールし、夫婦関係を続け、危機をうまく乗り越えていくのが大人である」（男6）と考える人もいた。

風俗施設に関する問いへの回答も、是非が分かれた。「絶対に存在すべきだ」（男性2名）、「自分には関係のない世界だが、行きたい人は行ってもいいと思う」（男5名、女3名）、「絶対になくすべきだ」（男1名、女5名）であった。肯定派は、「気持ちの入らない浮気が出るので、誰にも迷惑をかけないで楽しめる」（男1）と述べ、否定派は、「客を楽しい気分させて金銭を巻き上げる場所」（男6）、「そういうところに行って、自分を粗末にするな」（男3）と考えていた。利用経験のある男性は、「相手がほしいと思っても、簡単に手に入るものでもないで、一時的に肌のぬくもりを得られる所として、その存在はありがたい」（男1）と述べ、継続的な異性関係を獲得できない場合には、金銭の支払いによる一時的な肌のぬくもりが慰めになると感じていた。

### 第3節 親族間のネットワークと非親族間ネットワーク

#### 1) 親族間ネットワーク

子と同居している人は6名いるが、この中には未婚の子や離婚して独身に戻った子も含まれており、三世帯同居をしているのは2名だけであった。

インフォーマントの現在の心配事として、中年期を迎えた未婚子の結婚について挙げた人もいたが、それは、38～43歳の中年期独身の子をもつ7名であった。「結婚して、子ど

もを持たないと一人前とは言えない」という考え方をもち人もおり、子を結婚相談所に登録させ、良縁を知人に託している人もいた。

インフォーマントに、主観的に家族の範囲を述べてもらったが、その範囲は極めて狭かった。配偶者、子、両親に加え、きょうだい、甥姪、を挙げた人は、男性 1 名、女性 4 名であった。女性 4 名の中には、子のない 2 名が含まれていた。また、「一緒に暮らしているその間だけが家族、日常生活を共にする人が家族」(女 1) と、離家した子を家族とはみなさないと考えている人や、「子どもが結婚して、だんだん他人が入り込んできて、家族は変わってしまった」(男 3) と、子の配偶者を家族と捉えることに消極的な人もいた。

「10 人産めば表彰された時代」に生まれたインフォーマントたちは、きょうだい数が多かった。10 人きょうだい 1 名、9 人きょうだい 1 名、7 人きょうだい 1 名、6 人きょうだい 4 名、5 人きょうだい 4 名、4 人きょうだい 1 名、3 人きょうだい 1 名、1 人きょうだい 1 名、という結果であった<sup>19</sup>。

きょうだい間のネットワークのカギは女きょうだいにあるという知見の通り、その役割は今も果たされていた。インフォーマントのうち、女きょうだいがいないのは、一人っ子の女性一人だけであった。この女性を除き、きょうだい間の交流が全くないという人はいなかった。特に、きょうだいの中に、姉妹関係が存在するきょうだい (11 名) の交流は、姉妹関係の存在しないきょうだい間の交流の回数よりも多かった。姉妹関係の存在しないきょうだいの接触が年に 1~2 回であるのに対し、姉妹関係の存在するきょうだいの接触は、年 3~4 回から週 3~4 回であった。対象女性のなかには、居住する場所を決める時にも、女きょうだいの住む場所からそれほど離れていないことを条件に入れた人もいた。

無配偶者の現在の異性パートナーの存在の有無も、きょうだい間のネットワーク形成に影響していた。パートナーがいる人のきょうだいとの直接の接触頻度は、多いとは言えなかった。特に、子の無い、無配偶女性の、きょうだいとの電話や手紙のやりとりは、毎日ないし月に 2~3 回と他の女性より頻繁なのだが、直接の接触は月に 2 回から週 1 回と、それほど多くなかった。

祖父母役割を持つ人は 10 名おり、思春期の難しい年齢の孫の話し相手、外国育ちの孫の相談役など、様々な役割が示された。いずれも、子世代からの依頼や承諾を受けた行動で、一方的な押し付けではないことが強調された。

特に、積極的に孫と交流していたのは、配偶者を亡くした女性であった。子夫婦が共働きで行き届かない面もあるので、「孫の教育の為に、私ができることは体験させてやりたい」と家庭菜園の収穫や餅こねなど、季節に合わせた行事を体験させようと試みていた。男性は、配偶者の有無に関わらず、孫との交流に介入することを控える傾向にあり、それは「女房が楽しんでやっている役割」(男 3) であると考えていた。

夫婦で同じ趣味を持つ努力をしている人は、見られなかった。「老人クラブや、個人的な飲

---

<sup>19</sup> 1940 年、厚生省の「優良多子家庭表彰」では、同父母で 10 人以上を育成した 160622 家庭が表彰された (厚生省 1940)。

み会、カラオケにも、夫婦そろって出席すると、どちらか一方が気づまりするだろうから」(男 4)と、一方が出席を控える傾向にあった。

夫唱婦随、一心同体、を美德とする日本人夫婦の関係は、インフォーマントに見る限り、生活を共にする家庭内に限定され、家庭外の行動は一緒にしないという関係であった。「相手の行動に一切口を出さない」(男 4、男 5)などの「控える」行動は、「いい夫婦」「出来た旦那さん(奥さん)」として高い評価を得ていた。

インフォーマントは、自力で生活が出来なくなった時には、出来る限り自宅で最期を迎えたいと考えていた。子のある人は、介護は実の娘、次いで、実の息子に依頼したいと考えられていた。しかし、子には子の人生があり、親が子の生活を阻害する原因になってはならないと考えられており、それを言い出すことは控えられていた。今は必要ないので、言う時期ではないし、結局は施設に入る覚悟もあると述べられた。

## 2) 非親族間ネットワーク

非親族は、友人、近隣知人、現在または旧の職場の同僚、を指す。インフォーマントは、老人会や自治会などの地域集団活動、趣味のサークル活動やボランティア活動、様々な自己啓発活動への参加を、自発的に行っている。

インフォーマントの中には、退職や、配偶者喪失、高齢期に向けて、「独りになったときに、新しい人間関係をつくるのは難しいので、在職中から趣味の仲間を作っておいた」(男 5)という人もいた。しかし、在職中に趣味に打ち込めるほどの時間的余裕があった人は少なく、その点は準備が間に合わなかったという人が多かった。老人クラブは、そういった人にとって、退職後の人間関係を形成する手助けになり、同時に趣味を探す起点にもなっていた。

インフォーマントは、男女ともに、近隣の趣味のサークルに複数所属していた。男性の所属サークルの数は3~7か所(平均5.8か所)、女性は2~7か所(平均4.3か所)で、男性の方が所属しているサークルが複数にわたっている。退職を機に人間関係を変化させようとしている男性の気構え、あるいは、「趣味などの共通項を介した方が友人関係を形成しやすい」(男 2)という考え方が表れている。

男性は、配偶者の有無に関わらず、「元同僚で入社以来の付き合いがある親しい同性友人が多く存在する」(男 3)と述べたのだが、実数をあげてみるとそう多くはなく、地域における趣味の仲間の方が圧倒的に多いことが明らかになった。インフォーマントの元同僚友人の総計は2~20名、地域友人の総計は30~150名という結果だった。にもかかわらず、元同僚のほうに「親友がたくさんいる」(男 3)と感じているのは、経済的状況や価値観が似ており共通項が多いこと、これまでの何十年という月日を共にした昔馴染みであることが、関係しているといえよう。

配偶者を亡くした男性のみ、学友や元同僚であった親友と接触があった。また、所属サークルの数がより多く、地域の友人や、趣味の友人との接触頻度も、有配偶男女よりも高いことが示された。有配偶の女性は、一人しかいないため、女性同士の配偶者の有無によ



る相違は述べることはできない。

女性も、共通項が多い友人を求める傾向にあった。人生の境遇が似ている人、近所に住んでいる人などが、接触頻度の高い部類に属していた。

高齢期の女性同士で強い絆が形成され、相互扶助が行われていることは、先行研究によって明らかにされている。本研究のインフォーマント女性たちも、やはり「困った時には女性同士の助け合いの輪が頼りになる」（女3）と述べている。実際に、女性同士の自助・互助の活動が行われていることも明らかになった。同じマンションに住む女性同士、「旦那さんを亡くして引きこもりになっている人がいる」「最近おかしな言動をしている人がいる」などの情報交換をし、活動の中心となる人物と相談の上、対応に当たる人物が選定され、付き添い、掃除、食事のケアに当たっている。「誰かの世話をしたい気持ちって、誰にでもありますよね」（女3）、「自分がもしそうなったときにも同じことをしてほしいと思うから」（女2）、「子どもには話せないことも同世代には話せる」（女7）と考え、積極的に活動に参加を望む女性たちで運営されている。

しかしながら、女性同士の付き合いにくさも感じられていた。「女同士で私だけが違う意見を言ったら、今後の付き合いが難しくなってしまう」（女2）、「同調する為に心にもないことを言わなければならないこともある」（女8）など、意見の食い違いが関係性に亀裂を生じさせることにもなることが示唆され、「同世代同性の間では、足並みをそろえて同調しておかないと生きていけなくなります、助けて欲しいと思って頼りにしているから」（女3）、「女性の前では、男性と仲良くしたいなど素直には言えません」（女7）と考える人もいた。

その点、異性との付き合いの方が気楽だと考えている女性もいた。「男性と話していて違う意見を言っても、ああ違うんだ、で済む」（女5）、「恋愛関係にもない男性友人とが一番言いたいことが言える、偉そうにモノを言っても怒らないし」（女2）と述べられた。「女性同士の友人の方が数としては多いけれど、男性の方が深く付き合っているという感覚があります」（女3）と述べた人もいた。

また、女性同士の行動の最中にも、少なからず異性を意識することがあることが示された。女性同士の旅行中にも「今度はこの景色を好きな男性と見に来たい」（女6）と考えたり、「女性だけのグループで行動していると、男性グループから声をかけやすいみたい」（女1）と旅先の出会いを期待したりすることもある。

男性も、異性との付き合いが、同性同士のそれとは異なる良さがあると認識していた。「男女は物事の捉え方が違うから、一緒にいると、人生や視野が広がります」（男6）というように、もともと異質な存在だと考えているから、意見が食い違ったとしても自分の意見を変える必要がなく、気楽だと捉えられていた。

また、どのインフォーマントも、自身の身体能力についてよく自覚しており、その変化に合わせて人間関係も変化させていく必要を感じていた。「出かけて会うことは難しいので、電話だけで済ませることもある」（男3）し、趣味のサークルで「会う時間だけを楽しむ」（女6）と限定した付き合い方をしたり、「あまり遠いところに行くのは無理なので、近くの公民館の活

動で興味のあるサークルを探します」(女5)と距離を限定した交際をしたりする人もいた。

その付き合いには暗黙のルール、マナーが形成されていることが明らかになった。「よほど親しくなった人しか家には呼びません」(女3)、「過去にどんな職業についていたか、親しい人にはしか言わない」(男6)、「経済的な状況などは話さないようにしている」(男4)、「異性への連絡には、直接電話はしない。実際に会える異性に伝言を託します」(男3)という方法で対等な関係を維持する工夫がなされ、異性間ネットワークのマナーを重要視していた。そのルールに反した行動を取る人については、「価値観が違う人とは付き合うのが難しい」(男3)、「不作法な人と、気分を悪くしてまでも付き合いたくない」(男5)と述べられた。例えば、「男性に対して誰にでも月10万円のお手当で私を好きにしてくださいと言う」近隣高齢女性は、インフォーマントから「身体を金銭に変えるという発想が慎み深さに欠ける」と評価されていた。

#### 第4節 高齢期の異性関係

高齢期の異性関係を当然視する土壌は、日本には今のところ見られない。高齢者の増加は社会問題として捉えられ、高齢者が恋をする自由は、なかなか肯定されにくい。インフォーマントたちのなかで配偶者を亡くした人が再婚を求める際、「一周忌もまだ終わらないのに」「もう次の人を探している」という言われ方を見聞きしていた。高齢者の恋はどの様に見られていると思いますかという問いに対して、高齢期の恋愛を「気持ち悪い」と捉えられるのではないかと他者の視線も気にする声もあった。「古くなった資源を口八丁で売りつける押し売りのように捉えられてしまうのではないかと」(男3)、また「普通のお爺さんなのに、高齢女性二人でその老人を取り合っている姿は、数少ない資源(高齢男性)を取りあうようでみっともない」(男3)と考えている人もいた。誰からというのではなくとも、社会からのまなざしが否定的であると感じているのである。

異性との出会いの場も、「とても限られている」とインフォーマントたちには感じられていた。彼ら／彼女らは、「結婚相談所に登録してまでも」(男1)、「お金を支払ってまで」(男3)と思うので、自分のことを良く知ってくれている「友人を介してというのが最も信頼できるのではないかと」(男1)と考える。最も容易なのは、「趣味を通じて」(男4、女2)異性と出会うことで、「自然な出会い方だと思うし、そこに出会いがなければまた新しいサークルに移ればよい」(男3)ので気楽だし、「普段の姿を知ることが出来る」(男3)というのも活動を共にする仲間としての出会いの長所であることが示された。

活動を通じた出会いは、「グループで男女ワイワイすることが気楽でよい」(男6)し「関心のあることが同じであれば、話題も見つけやすい」(男5)と肯定的に捉えられていた。老人クラブに入会した時期は、60歳になった、退職をした、引っ越してきた、などがきっかけになる。自発的に入会を望んだ人と、近隣友人から誘われて入会した人がいた。

しかし、経済状態に余裕がない人は、恋愛の対象にはならないと考えられていた。「経済的に不安定な人に出会いはない」(男1)、「男は家を持っていれば、女が寄ってくる」(男4)。特に「再婚するなら、双方の年金の受給額のバランスが大切」(男3)だと述べられた。「自分

と再婚することによって、女性の年金受給額を減少させるようなことはあってはならない」(男 3) と考える人もいた。退職後にも、《高齢者になる前》と同様な男女間の経済力の優劣が、セクシュアルに親密な異性を獲得する条件として明確に意識されているのである。

さらに、高齢者が異性と付き合うには、世間体を考慮する必要性が感じられていた。恋愛関係にない男女でも「すぐに噂になる」ので、「近所で恋をする危険性は、噂」(男 3)、「関心が集まりすぎて、行動を控える」(男 5)。これについて、「世間体を気にして恋を諦めるなんて、せつかくこの世に生を受けたのもったいない」(男 1) と考える人もいた。「恋愛は、いくつになっても他人の関心を集めることなのでしょう」(男 6)。

特に、配偶者を亡くした人は、有配偶者以上に世間体を考慮する必要があると述べられた。「独身になったからこそ、世間の目が厳しい、異性と仲良くしている姿など見せられない」(男 3) と、好奇の目にさらされた経験があることや、「早く次の相手を見つけたら」という同性からの提案に「傷ついたし、悔しい思いをした」(男 3) 経験が示された。

異性との付き合いに興味がないわけではない。「本心をいえば、寂しい、誰かと一緒にいたい」(男 1) と心のどこかで異性に「甘えたい気持」があり、「胸に顔をうずめたい」「ときめきが欲しい」「セックス込みの恋愛をしてもいいと思う」(男 3) 人もいた。

その気持ちを抑えつけるものはいくつかある。

亡くなった配偶者を思う気持ちは「おそらく一生なくなる」(同趣旨の発言として男 3 名、女 3 名)。だからこそ、「配偶者が亡くなったから、はい次、というわけには気持ちがついていかない」(男 3) し、「大事にしてくれた主人に戻ってきてほしいのに、同じ人はもう手に入らない」(女 4) と悲しい思いをすることもある。女性の中には、新しい恋にはまだ進む気持ちにはなれず、「私はお父さん(亡夫)のものです」(女 5) という人もいた。

子どもとの信頼関係を壊してしまうかもしれないという不安もある。「(亡くなった)お父さん(お母さん)のこと、もう忘れてしまったのか、と子どもに言われるのではないか」(男 3)「この先の短い恋のために、今まで築いてきた子どもとの信頼関係を壊してしまうような危険を冒したくない」(男 3、他に女 4、女 5) と考えており、「一番気になるのは、子どもの目」と考えられていた。

配偶者を亡くした人の子が、「そろそろ新しい恋人を見つけたら」と提案し、独身になった親の恋愛を支援する態勢を見せていたにもかかわらず、恋愛においては、子よりも、地域の友人を理解者と認識している人もいた。「近所の人とは他人だから、私の恋人を安心して紹介できます」(男 3)、「近所の人には恋愛の援助をしてもらえる存在です」(女 5)。

配偶者を亡くした人は、子どもとの関係性維持を重視しようと考えてはいるが、「子どもとの関係性においては十分に理解しあえないこともある」(男 3) ので、実際には「同世代の異性にも心身ともに甘えたい」(男 1) 欲求もあるという人もいた。これらのように、地域、子ども、その他の親族、そして亡くなった配偶者など、高齢者を取りまく親密なネットワークがあり、そのさなかで高齢者はあらたな異性との交際を思いとどまったり、支えられたりしているのである。

なお、配偶者が亡くなった後の異性交際については、該当者以外に対しては場面を想定してもらい、回答を得た。男性は、「セックスするなら結婚まで視野に入れて責任を持ちたい」(男 3) と考え、女性は、「結婚まではしたくない」が、「会いたいときに自由に会って、おしゃべりして、食事して、望まれたらセックスをして、それぞれの家に帰るといった関係がよい」(女 5) と考えていた。その理由として、「男性と二人きりでどちらかの家に入ると、どうしても女性が家政婦みたいな立場になってしまう」(女 3、他に女 5)、「行動を制約されそうで怖い」(女 4) と述べられた。男性が「責任」という積極的に担う姿勢を示すのに対して、女性たちが婚姻関係を制約と感じていることが非常に対照的である。

新しい恋について不安に思うことについても、男女で異なった回答を得た。男性は、新しい恋に対する不安として「もうセックスで女性を満足させられないかもしれない」(男 3) と性機能の衰えを挙げた人もおり、「それでもいいと言ってくれる女性がいたら嬉しい」(男 5) と考えていた。あくまで、女性を満足させる責任が男性にある、という意識である。他方、女性は、恋愛関係になると裸になる機会があることを挙げ、「体を見てがっかりされるのが嫌」(女 5)「自分でも見るのが嫌だと思う体」(女 4) だと感じて性交を回避したいと考える人もいた。反対に、「肉体の衰えを気にしているのなら、それなりの手入れをするべき。何も努力をしないで恋を回避するなどもったいない」(女 3) と考える人もいた。また、「女性から、性欲を伝えることは難しい」(女 5)「積極的ではない、恥ずかしがっているという態度を男性は好むそうなので、なかなか積極的にはなれない」(女 2) と考えているからこそ、「男性の前と女性の前では態度を変えてしまう」(女 2) という女性もいた。見られる対象として自分の身体をとらえるなど、異性のまなざしを男性とは違った意味で意識しているのである。

インフォーマントは、性役割を、祖父母および両親や地域社会の人から教わったという人が多く、貞操観念は体育の授業や雑誌、祖父母・母親から、異性との付き合い方は母親・きょうだい・友人から、性交方法は、友人・保健家庭授業・母親から、いずれについても 10 代の間に知識を得た人が多かった。男性は特に友人から、女性は家庭内教育において情報を得たことが特徴的であった。

異性の付き合いを同性の付き合いと比べてみると、興味深い回答を得た。「身体の距離が違う」(女 3)、「相手の身体を守りたい、世話をしたい、責任を持ちたい、そう扱われても嫌だと感じないのが異性なのではないか」(男 3)、「一緒に風呂に入っても、背中を流し合うかどうか」(男 1)。「歩く時にふと腕を組めるか」(女 2) など、同性同士ではある一定の距離を置くことが求められるが、異性となら身体が密着できるという具体例が示されたのである。

また、同性同士の付き合いに特徴的なこととして、男女とも「見栄の張り合いとなる部分がある」(女 5) と感じており、それは同性同士の付き合いにくい部分だと捉えられていた。具体例として「旅先の食事に何を食べるか、異性とならば、コンビニおにぎりで済ませようと言えるけれど、同性同士ならば不本意だと思いながらも協調して、もう少し高いものを食べることになる」(女 5)、「男性となら、特にお父さんとなら天下が取れるけれど、女同士ではそうはいかない」(女 7) と述べられた。

しかしながら、男性は、女性との付き合いが密接なものになることに不安も感じている。「異性が接近してきたら、財産目当てではないかと疑ってしまいます」(男 2)、「その女性に変な噂がないか同性友人に確認してみることもあります」(男 3) と警戒することもあることが示された。これは彼らが女性との交際において経済力の優位を誇示しているからだろうか。

他方、婚姻関係になることを求めない女性たちは、同性同士の付き合いを気楽だと感じることもある。これは、一定の距離をおいた付き合いを前提としているからである。「長期間会わない時間があつたとしても、その間に他の人と浮気しているのではないかと嫉妬したり、気をもんだりせず、また次の機会にすんなりと付き合いを再開できる」(女 2) からで、「生活条件や経済的環境がある程度異なっても付き合えるのは、一定の距離を置いて付き合えるから」(女 4) である。

異性とどのような交際を望みますか、という問いへの回答は、「会話をしていて楽しいと思える人」(男 5 名、女 8 名) と述べた人が多く、「この年になったら、本当に気が合う人を選ぶことが出来る。この先の人生については、既に大体の道筋は出来あがっていて、もうあまり変化がないだろうし、持っているものも変わらないだろうから」(男 3) と考えられていた。また、パートナーは、知識や見かけともに「自分で釣り合いが取れていると感じられる人」(女 3) が良く、「価値観が似ている人でないと、押したことにも気付かないから、暖簾に腕押しにもならないこともある」(女 8) と、共通項の多い異性が理想と述べられた。

高齢期のセックスに関しては、「この年齢になって恋など恥ずかしいこと」(男 3) とは思うけれど、「男性が勃起するのは 75 歳まで」(男 3) だということから、恋をするなら今しかない。そう考えるのは、「挿入をしたことがあるかないかで、挿入出来なくなつてからの関係性が異なる」(男 1、他に同趣旨で男 6、女 4、女 8) と考えられていたからであった。「女性には性欲がない」のではなく、仕掛けられたら応答できるので、「男性は、セックスできない体であつたとしても、女性をセックスに誘うべきです。セックスなしの男女関係なんて、わびしいし、女として見られていないのかと悲しくなります」(女 4)。また、「いつ何があつても良いように、備えている」(女 3)、「深い付き合いになりたいと言われて、勇気は出なかつたけれど、そこまで言ってもらつてとても嬉しかった」(女 4) とも述べられ、その考え方は多様であった。

## 第 5 節 考察

### 1) 自立と活発なネットワーク

資本主義社会の日本において、退職を余儀なくされた高齢者は厄介者として捉えられる。インフォーマント自身もかつては高齢者をそのようにみなした経験から、現在の自分たちが置かれた立場を明確に意識していた。

高齢期の自立は、経済的な安定性の上に成り立つことが示され、恋をするにも、経済力が必要だと考えられていた。これまで専業主婦であつた女性は、配偶者を亡くして初めて自立という経験をする人もおり、努力を必要とされたが、高齢期の生活を支える財産や子どもを残してくれた配偶者に改めて感謝をしていた。

老人クラブ加入目的は、高齢者にとって重要な社会的ネットワーク形成となる。インフォーマントも、趣味を通じた仲間づくりとする人が多かった。その関係維持の為にクラブ内でルールが形成されており、そこから外れない良識的な行動をとることが求められていた。

そこに行けば自分の居場所があるという存在意義を見いだせる空間、これまでの人生で習得した技術や知識を尊重しあう場を求めているようであり、男性同士は、高学歴者の意見を尊重する傾向にあり、女性同士は、職業を持っていた人を頼りにする傾向があった。

家族や親族との関係は、孫と会う時間だけの祖父母役割をして、孫に対して相談相手や友人のような、個人と個人の世代間関係が構築されるケースもある。独立しない成年子を抱える高齢者世帯での親子関係は、高齢者の自立にとって阻害要因になりうるが、子が別居しない理由は、給与では家賃を払えないこと、都心に出勤するのに便利な地に実家があること、家には寝に帰るだけで楽だからではないかと考えられ同居は続けられていた。

本調査において、無配偶のひとり暮らしは、女性 5 人のみであった。いずれも、親族、特に女きょうだい、および非親族のネットワークを活用しており、先行研究における知見を裏付けるものである。

総体として、彼／彼女たちは自立を基本としながらも「一人では生きられないことも認識している」ので、依存可能な関係を新たに構築する努力も行われていた。親族間においては、子、きょうだいを生活資源の最後の手段とみなしており、現在は、新たに構築した地域友人との交流が多い。接触頻度や、面会、電話などの接触方法は、健康状態に応じて自己決定されていた。健康体で、地理的移動が自力で容易に行える状況にあるからこそ、非親族と親族、両方のネットワークを相互補完的に利用して、生活をより豊かなものに行っているといえよう。他方、親族ネットワークは、非常に狭い範囲で結ばれており、子や実のきょうだいとの交流に限定されていた。

介護については、子のない人は施設に入ることを想定し、経済的な準備はしてあると述べたが、子のある人は自宅で実子による介護を望んでいた。現実には外部からの介護を受けるとなると、要求を満たさない何かがあるからだと思われるが、今回の調査でそれは明らかにできなかった。

## 2) セクシュアリティについて

インタビューでは、男女ともに、現在も直接的・間接的にセクシュアルな親密性への欲求を持ち合わせていることが示されたが、その欲求を抑制する必要性を感じており、実際には好ましい異性関係を得られないままになっていることが多いことが明らかになった。

印象的であったのは、肉体の距離を接近させることが出来るのが、異性の魅力であると考えられていたことである。また、結婚をしているかどうか、男女の肉体的接触が社会的に認められるかどうかに関わると考えられていた。結婚は、誰でも一生に一度はするもので、愛し合っている男女が結ばれ、一生添い遂げるものと考えられ、離婚は一般

的ではなかった。配偶者は自由に選択できるが、一度決定した相手との関係は生涯維持すべきだとも考えてられていた。このような意識は、偶然の一致であろうか。インフォーマント 14 名の生年は 1932～1946 年である。国民学校令による初等教育の経験者を含めて全員が、1945 年からの男女同権、民主教育の思想による教育を受けているが、家庭教育においても、祖父母や両親から異性についての教育を受けた人もいた。性交方法については、学校において教育を受けたと述べた人は少なく、10 代の間に友人や雑誌から情報を得ていた。また、この時代の、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの普及（落合 2004）、文部省による純潔教育や男女平等教育が、インフォーマントの結婚観、異性観、貞操観の形成に影響を与えたとも考えられる。今後の検証にまちたい。

しかしながら、実際の行動はともかくとして、愛情を伴わなければ婚外の性交も許されると考える男性が多かったことも特徴的であった。このような婚外性交観も、同じく時代性によって解釈できるだろうか。この観点が男性に偏っていることも、ジェンダーの問題としてさらなる研究課題となる。

異性観において、ジェンダー規範を強く内面化していることも示唆された。それによって新しい恋愛に踏み出せないことがある。男性のインフォーマントたちは、女性よりも男性が経済力をもつことを男性の役割とすることで、女性に積極的になったり用心したりする。それにくわえて、「男性は若い女性の肉体を好む」「女性にオーガズムを与えるのが男性の役割」という、身体に関わる刷り込みや思い込みによって、自身の行動を抑制しているのである。そのような規範意識の強さに関わるのか、長期的な付き合いを視野に入れるのであれば、「同世代でないと話が合わない」と男女ともに述べられた。同世代とは上下 5 歳ほどを指し、身体機能や価値観の類似性が重要視されていた。

とはいえ、老いを迎えての異性との性交に対する考え方は、各人各様であった。内面化した規範を持ちながらも、決定する主体は自分自身であると認識されており、その決定は、各人の人生経験により異なっていた。印象的なことは、インフォーマントの多くが高齢期を迎えてもなお、広義の性関係の重要性を認め、直接、間接に異性との関係を求めていることであった。

### 3) 高齢期の異性関係に影響するもの

セクシュアルに親密な異性は、前項で述べたように身体的な親密性をもたらしてくれる。それにくわえて、インフォーマントたちは、自分を良く知る人物との関係を求めている。今までの自分の人生や、子どもの存在、配偶者喪失体験などを全て受け入れてくれて、自己肯定感につながる存在である。有配偶者は、特にその必要性を感じていなかったが、無配偶者にはその欲求が強く、そのため旧知の親友、きょうだいとの交流が多いようである。しかし、無配偶者は、地域や趣味のサークルに複数所属してはいるが、そこでの人間関係からは十分に満たされていない。だからこそ、亡くなった人に帰ってきてほしいと願うなど、自分の欲求を満たす条件を備えた人物が欠けていると感じていた。

このように、男女ともに親密な異性との関係を求める気持ちをもつけれども、新しい異性パートナーや再婚についての考え方には、男女間で差があることが明らかになった。配偶者を亡くした人の孤独感の高さが男女ともに示され、楽しく話せる異性を望んでいたが、女性は経済力や名声や知識をもつ男性との非日常的な関係を求め、男性は気が利く優しい女性との日常的な関係を求める傾向にあったのである。

女性は、恋愛はしたいが再婚までは望まない人が多い。現在の日本の結婚制度は女性に不利な制度だと捉えられ、家事労働を引き受けねばならない状況は回避したいと望んでいるのである。一方的に世話をする役割を担うことを望んでいない。女性が生活にまでは介入されたくない意向を示し、広く浅い付き合いを求める傾向にあった結果、男性よりもネットワークの規模が大きくなるようだ。つまり、異性パートナーに求めるものが男女では異なることが、高齢期の社会的ネットワークの形成にも性差が生じさせると考えられる。

また、再婚については、男性は、自分との再婚で、女性の年金額が同じか高くなるのでなければ結婚は申し込めないと考える人もおり、収入面における「責任感」というかたちで優位を求める姿勢が強く見られた。一方、女性は、暮らしを楽しむことが前提にあるため、お互いに自立した経済力を持っていることが望ましいとも考え、経済的依存関係の形成を避けたいという考えもみられた。

ところで、未婚化や晩婚化が進んだ現在を反映して、未婚の成人子をもつインフォーマントが7名と半数を占めた。彼／彼女たちは、子によって、高齢期の生活様式を決定する自由を少なからず阻まれているといえる<sup>20</sup>。その理由は、中年未婚子をもつ無配偶高齢者は、筆者とのインタビューにおいて、自らが新しい異性パートナーを得るよりも、子の結婚を優先する気持ちが強く働くことを示したことにある。なお、祖父母役割は上述したように、自発的、選択的に行われており、インフォーマントの情緒的豊かさにつながる関係であって、異性間ネットワークの形成への影響は少ないと考えられる。

ただ、同世代との異性関係を新たに構築するより、若くて血縁関係にある子どもを、より頼りがいのある生活資源と認識していた人もいた。「恋に現をぬかしていると思われたくない」ので、子との関係性を脅かす危険な恋愛を回避すべきだと考える人、「この先の短い恋のために」人生をかけて築いてきた子どもとの関係性を壊したくないと考え躊躇する人もいる。子どもとの関係性を恋愛が脅かすことになる、という考えの背景に、高齢者が恋愛をすることへの否定的な規範意識が窺われる。

これまでの考察によって、高齢期の生活幸福感には、異性の存在が少なからず関わっている可能性が示された。インフォーマントは、賃労働者ではなくなったことや老いから、自信や存在意義の自覚が低下していることは否定できないが、それに代わる活動を見出そうと模索している姿が明らかになった。また、高齢期の性に対する誤認識によって、高齢

---

<sup>20</sup> 日本において、ひとり暮らしや、夫婦のみの高齢者世帯が一般化し、三世代同居は15.4%に減少したが、親と無配偶の子世帯は20.5%に増加している。子や孫に囲まれて暮らす高齢者よりも、無配偶の子と暮らす高齢者の方が多くなっている（総務省統計局2005）。



者の異性への関心が肯定されにくいという状況は、高齢者自身によって自覚されていた。すなわち、社会に望まれる高齢者像を受容し形成する努力がなされているともいえよう。

彼／彼女らの活動を生産性がない無価値なもののみなしては、長い高齢期を幸福に生きる社会は構築できない。恋愛は、若者の特権ではなく、高齢期においても、異性パートナーとの情緒的、性愛的な親密性が、その生活の質を変えるカギとなる可能性が大いにある。その背後にある家族意識やジェンダー・ロールの規範にも注目するなら、今後、国内他地域の異なる階層に属する人々を同じテーマで調査研究する場合にも、今回のこの調査は、さらに追及すべきテーマに基づいて示唆を与えてくれるものと思われる。

## 第5章 高齢男性にとってもセクシュアリティの意味

### 第1節 性的行動と女性との親密性

#### 1) 調査目的

第4章では、高齢男性と高齢女性へのインタビューにもとづき、長年の夫婦関係におけるセクシュアリティのありかた、捉え方、現在の社会的ネットワークの持ち方などについて述べ、高齢の夫婦関係の経験者ならではの意味づけと、男女の意識の違いを明らかにした。しかしまた、示唆されたこととして、有配偶の高齢者と無配偶の高齢者に違いがあった。配偶者を喪失した独身者としては同じく人生の危機を経験していると思えるが(Nakahara 2010)、その違いは何にあるだろうか。そして危機からの回復に、セクシュアリティや男らしさはどのような役割を果たすだろうか。本章はこの点をさらに深く考察するため、離別経験のある独身高齢男性と、死別経験のある独身高齢男性への聞き取り調査のデータに基づき、男性が異性に何を望んでいるのか、セクシュアリティをいかに捉えているのかについて考察を行う。

第1節では、離別経験のある高齢男性の異性との関係を形成する過程において、彼らがセクシュアリティと男らしさをいかに捉えているか、それらが過去の経験といかに関与しているか、またセクシュアリティと男らしさはどのような関係にあるのかを考察する。具体的には、1) 彼らが「現役時代」を振り返り、自分らしくあること、すなわち、男らしくあることがどのようなものだったと語られ、そこに男らしき規範がどのように表現されているのか、2) パートナーとの離別が、こうした自分らしきと関わり、どのようなものとして経験されたと語られるのか、3) またその過程で、年齢規範による「老人」「年寄り」というアイデンティティを受け入れることを、どのように感じたか語られるのか、4) それは現役時代の男らしきとどこが同じで、どこが違うのか、それと齟齬する規範にどのように対処しようとしているのか、という点に注意して分析を行う。

#### 2) 調査対象

調査は2009年10月から2013年6月にかけて実施し、半構造化インタビュー形式で、なるべく自由に話してもらえるように心がけた。一人ずつ2時間半程度の聞き取りを行ない、追加の疑問点をメールで回答いただく形式をとった。インフォーマントの居住地は、関西地方、中部地方にある中都市である。スノーボール式サンプリング形式でインフォーマントは選定された。

インフォーマントは妻と離別した3名の独身男性である。現在は複数の新たな異性パートナーと軽い交際を楽しんでいる。彼らは妻との離別後に複数の恋愛を楽しむいわば成功者である。そこで、彼らの語りの中から男らしきの規範、セクシュアリティ規範と年齢規範との折り合いの付けかたを抽出することで、高齢男性の男らしき観やセクシュアリティ観を鮮明に浮かび上がらせる。

3名の男性とパートナーの状況を以下に示す。

国内大手企業で定年を迎えた60代の男性3名、彼らはそれぞれに数度の結婚を経て、現在は独身で一人暮らしをしている。経済的に余裕のある生活を送り、古い友人も多いが新たに人間関係を築く積極性も高く、社交性に富む人物である。

Aさんは60代後半(65歳)で、妻と離別する前から現在のパートナーと交際を続けている。知り合った場所は職場で、定年退職をした今も交際を続けており今後もこの関係性を維持したいと考えている。それとは別に、最近趣味の活動で知り合った新しいパートナーがいる。これから先、できれば結婚はしないで一生を終えたいと願っている。前妻との間には未婚子がいる。前の妻子と年に2回、必ずあうようにしている。

Bさんは60代後半(66歳)で、妻と離別してから11年間ほど新たなパートナーを探し求めているが、いまだに「これという人が見つからない」。食事や遠出に一緒に出かけることができる女性は複数いる。出来ることなら今後、特定の女性を見出し結婚をして共に生活を送りたいと思っている。前妻との間には未婚子がおり、年に数度面会したりプレゼントを送ったりしている。

Cさんは60代前半(64歳)で、妻と離別してすぐに新たなパートナーを求めて活動を始めた。しかしながら、もう二度と結婚をしたいとは思えないため、結婚を迫られるような関係になると別の女性との交際を始める傾向があるという。そのため、各女性との交際は短期間に終わらせることになる。前妻との間には未婚子がいるが、離別後一切連絡をとっていない。

### 3) 3人の高齢男性のセクシュアリティ

インタビューの結果得られたデータの概略を以下に示す。妻との離別経験、新パートナーとの関係など、主に女性との関係性についての説明にどのような規範が作用しているのか、結果的にどのような行為に至ったのかという点に着目しながら分析を行っていく。

#### 【Aさん】

離別はAさんの活発な異性関係が原因であった。「男はチャンスがあったらつい(新しい女性の誘いに)揺らいでしまうものです、仕方ないんですよ」というAさんは、「飽き性で、常に新しい刺激的な出来事を探している」と自己分析する。今は独身のAさんの行動を抑制する要素はなく、気楽に恋愛という刺激を楽しんでいる。「結婚は男女関係の自由を法律で限定してしまうのでうっとおしい」とAさんは考えているため、今後は「結婚は出来ればしない方向で人生を終わらせたい」と考えている。

Aさんのいう「刺激的で新しい出来事」とは、未知の女性との出会いや親密な関係の形成過程を指す、落ち着いた関係性に満足できないのは男性の特性であるとAさんは説明する。パートナーを限定してしまう結婚制度には窮屈さを感じた経験を語っており、複数の恋愛を楽しみたいというニーズに反する結婚は、Aさんの行動を制御する面倒な側面をもっている。

るためできる限り回避したいという。

しかしながら、Aさんは、前の妻が子どもを産んで育ててくれたおかげで、「年齢相応にやるべき父親としての経験」ができたことに感謝している。子どもは欲しいと願っていたし、日本社会の福祉制度として「子どもは結婚してから産んだ方がいいに決まっている」ので、Aさんは結婚をしたことに後悔はしていない。

個人の自由を重んじるかのように思えるAさんだが、壮年男性として社会的な役割を果たせたことを妻に感謝していることから、ジェンダー規範や年齢規範を軽んじていないことが読み取れる。また、結婚制度は、異性との関係性においては不満を隠せない制度だが子どもを育てていくためには必要な制度であると考えている。

離別後に交際をしている女性たちとは、今後、月に数度ずつ会って行きたいと考えている。それは「体力的に毎日一緒に過ごすことはしんどい」し「同じ女性と毎日顔を合わせても話すことがなくなる」し、「僕があと何年この世にいるかわからないので、将来の確約はしないように」心がけているという。それは「事実上の内縁関係にあると認められたら法律的に面倒」なことになるからでもあった。「日本の制度ではどうしても男が損をするようになっていく」と考えるAさんは、女性との交際が「べったりした関係にならないように」気を付けている。たまにAさんの「不手際」から複数の交際が露呈してしまうことがあった。その時には女性同士でAさんの「取り合い」となった。

Aさんは、一人の女性との長期的関係性よりも、複数の女性との定期的関係性を継続することを望んでいる。しかしながら交際中の女性はそのような関係性を好ましく思っているわけではないようだ。Aさんの一方的な都合を押しつけた形の関係性であることが予測され、女性側の不満を回避するための対処法として将来的約束をしない、べったりした濃密な関係性にならないようにしているという。それは、法律によって事実上の内縁関係であるとみなされないための戦略でもある。

月に数度しか会わない女性との関係を維持するには「会うときにはセックスしてあげる」ことが「女性に安心感を与えることになる」とAさんは考えている。「セックスは恋愛のお楽しみのひとつ」とか「男がセックスを大事にしているっていうけれど、あれ、嘘ですよ。僕はそう思います。女性を繋ぎ止めておくために便利だから、僕はセックスするんです」。「それほど魅力的ではない女性にも、うわ～、すごいナイスボディ！くらくらくるね～なんてほめたり、ほんっと可愛らしいね～、僕だけのモノになって欲しい、とか言ってあげると、女性は自分から身を投げ出してきますよ」。「女性はセックスした相手に感情移入するっていうでしょう」、「僕くらいの年齢になったらセックスしたくてたまらないなんて有り得ない」というAさんは「相手を喜ばせるためにセックスする」ように心がけている。また、Aさんは「喧嘩をしても、体に触れたりするうちにすんなり仲直りできているっていう経験がある」ことから身体的接触を重要視しているという。「もちろん好意がない異性の身体に触れることはしません」。

女性がAさんとの関係性に不満を持つとき、その女性との関係性を良好に維持するため

に、Aさんは「安心感を与える」ことを重要視している。女性がセクシュアルな関係性をもった男性に感情移入しやすい特性があると解釈するAさんは、感情的に接近するための手段としてセックスという行為を捉えているという。また、愛情という要素が入っているからこそその行為であることが強調される。

Aさんは性的行動によって生じる男女間の感情をうまく利用し、女性をセクシュアルに支配するツールとして使っているという。

「50代後半くらいから」性機能の衰えは感じており、「女性といるときにも出来ない場合が時々あります」というAさんは、「彼女に男としてダメだねと言われるんじゃないかと冷や冷やしている」。しかしながら、「そこをカバーする方法を僕は知っているので大丈夫」、とAさんは性的行動以外にも異性関係を良好に維持する自分なりの方法をもっていた。

Aさんは「男性としての魅力ってやつ、筋肉の大きさとか財布の分厚さとかを見せつけながら、美味しい物を食べさせて、テンポのよいお喋りで気持ちを盛り上げる」という方法がどの女性に対しても有効であったことを示してくれた。「女性なんてみんな同じですね、基本。だから誰か特別な人を決めるなんて僕にはできない」。

Aさんの語りは、性機能の老化現象を受容しているかのようにみえる。しかしながら、パートナーにその事実を指摘されることを気にする側面もみられ、その不足については、話術によるコミュニケーションが性機能の衰えをカバーするという方法を示した。ここでAさんは性的行動と心理的愛着を同等に扱っていることに注意したい。Aさんは性的行動を、パートナーに男らしさを示す行為であると同時に、好意を示すための表現方法として捉えている。

また、男性としての魅力とは、「やはり外見でしょう」と考えているため、実際よりも「若くて美しいルックス」を維持する努力をしている。それは「女性の厳しい選定眼に耐える」外見を手に入れることにほかならず、女性の「関心を引くことが目的」とであると語られた。

アンチエイジング対策としてAさんは、顔の皺をとるために月に一度は美容外科に通っている。また、頭髪の脱毛が激しくなってきた50代後半に植毛を行ったため、今後これ以上頭髪が減ることはなくなった。そして、肝機能を上げるための点滴を月に一度受けるようにしている。これらの対策は全て、雑誌の記事や広告からヒントを得たことであった。「男同士でもこんな話絶対にしません、バレてません。もちろん女性にも絶対に明かしません、だって女性の目をごまかすためにやっていることなのに、話しちゃったらチャラじゃないですか」。「周りのみんな、僕が何も手を加えてない（形成施術していない）のに若々しいって言ってびっくりしています。その驚く顔を見るのが嬉しかったです。本当は、やっているんだけどね、内緒」。

「ツルツルに禿げたまだ若い男の場合と同じだと思うんです。スキンヘッドの男性にも、決断するその日が必ずあったはず」だとAさんは考えている。毛髪が減少するのを食い止める努力を散々した結果、手入れなどの煩わしさや経済的な面から、その努力を止め

て、植毛という決断をした過程が A さんから示された。

これらの語りから、A さんが若い男性の肉体が高齢男性の肉体よりも美しいと考えていることがわかる。そのために、若い男性に類似した身体であり続ける努力を惜しまないのである。

女性の関心を惹くことがアンチエイジング術を受ける目的であると話す A さんではあるが、それらは A さん自身の身体に対する自己満足感を満たすことにもなり、A さんの自信の源となっているようだ。実年齢よりもいかに若くみせることができるかということが、A さんの楽しみの一つである。

### 【B さん】

B さんは離別経験が複数あり、「妻に毎回捨てられて」きたと語ってくれた。

B さんが気付かぬうちに妻たちが浮気をしており、「許そうとした」B さんを置いて妻たちは家を出た。妻の浮気は B さんが「家に不在がちな職業なので月に数回しかセックスしなかったことが不満だったのかもしれない」と考えている。

B さんの語りから、女性をつなぎとめておくためには性交をある一定回数以上することが効果的であると考えていることがわかる。彼によれば、それはわかっていたが、妻以外の関心に気持ちを奪われていたため、妻をケアする余裕がなかったという。男女の親密性を深めていくためには、継続的に周期的に性的行動を示すことが必要であると B さんは考えている。

職業人としての B さんは、「おかしいと思ったことはきちんと声を上げて行く」ことを大切にしながら、「楽しくなければ仕事じゃない」というモットーを掲げてきた人である。困難に立ち向かいながらも信念を貫き通す態度を維持し、上司をも恐れぬ行動をとったことを「やらねばならないと思ったことを実行したまで」で、「誰にも負けない良い仕事をしてきたからこそ、僕が突っかかっても誰も批難する人はいなかった」のだと B さんは語ってくれた。

そういった B さんの行動は、同僚からは高い評価を受けたが、妻だけはいい顔をしなかった。「コピー代も自己負担してビラをまいたし、社内の噂なんかも気になっていたんじゃないかな」と B さんは考えている。つまり、妻が B さんの行動について、共有財産である給与を自分のためだけに使ったと認識したらしいこと、また同じ会社に勤務し続けることを揺るがすような行為に不安を感じたことなどが不満の理由として考えられている。

B さんは結婚において妻との関係性は破綻させたが、子どもとの関係性は維持していると語った。前妻たちとの間にもうけた子どもたちとは、現在もスマホやファックスなどで連絡を取り合っており、関係性は良好である。地理的に離れた場所に住んでいるため面会は年に数回しかないが、その他にも誕生日などの機会を見つけては贈り物をしている。B さんは「父親としてできる限りのことはやってあげたいと思って」いるが、「父親がいないということが子どもにとってマイナスになっていないかどうか心配」している。「子どもは父親

の背中をみて育つとかあるでしょ、それが僕には出来ないから」。夫役割からは解放されているが、父親役割は継続し続けている。インタビューのあいだに何度も子どもへの愛情を表現した。Bさんは父親としての役割を果たすための努力を惜しまないという。

「こんな生き方をしているので、妻に見放されて当然」だ考えている Bさんには、趣味の会を主催したり、気に入った品物を収集したりする習慣がある。「僕がいいと思うものは皆に分けてあげたいと思ってしまう」ため、家庭生活との両立が困難だったと語った。

Bさんの趣味は支出が大きいものであった。趣味の会を開催するときには、遠方からくる女性のためには交通費や会費を負担するという。そうする理由として、男性よりも女性は収入が低いため、女性に「自分の趣味に付き合ってもらうので悪いから」と語ってくれた。

一家の家計の一部を Bさんの趣味に費やすことは悪いことではないし、その趣味は Bさんの生活に華を添えて Bさんの気持ちを前向きにする良い手段であると考えられる。しかし、妻をその趣味の会のメンバーに入れなかったことが、妻の同意を得にくくしていたと思われる。

Bさんの交友関係に妻が入り込むことは許されなかった。それは、趣味の会に妻には会わせたくない人物がいるなどの理由からなのか、Bさんの夫婦観によるものなのか、データから読み取ることにはできない。ただ、妻にはこういった Bさんの行動が理解できなかったと考えられる。妻は「もうあなたとは一緒にいられない、一緒にいたくない」と言いおき家を飛び出してしまったため、Bさんは追いかけることもできなかったという。

Bさんは「置き去りにされた」側として、「日本の離婚制度は、女性を手厚く保護するように出来ている」と少々不満を感じている。「女性に嫌いと言われたらもうおしまい、別れるしかないようにできているのです。もうこの男のことが嫌いになったので一緒に住みたくないですって女性が言ったら、法律はその女性を守るようになっているのです」。

Bさんは法律に非常に詳しいと語ってくれた。「会社の組合活動において法律を理解したうえで発言する必要性があったし、離婚も数度経験しているから」だそうだ。男女関係に関する法律は、「どう考えても女性に肩入れしたものとなっている」ので、「男性は女性の言いなりにならなければならない」。「それだけ法律は女性を弱者として扱い、守っていることです」と語ってくれた。男性優位社会と言われる日本のこうした法律に、Bさんは男女の格差についての不満を感じていた。

ところで、Bさんは、今後出来ることなら相性の良い女性を見つけ、新たに結婚をしたいと望んでいる。単なる恋愛と違って「結婚という制度で繋がることは相手の女性に対して誠意を表すことになる」と考えるからだ。

女性との関係で大切なのは「お互いを信頼しあうこと」、「生き様をともにできること」、「楽しい時間を過ごせる好相性」であると考えている。信頼関係も出来ていないまま、「出会ってすぐに簡単にセックスするような関係は長続きしない」と語ってくれた。

「セックスはしなくても生きていける」とも考えている。これは、「衣食住が満たされていれば人間は生きていける」し、それらが揃ってこそ「恋愛を楽しむことができる」と考

えるからである。

Bさんは結婚まで考えた女性が「それなりに」何人かいた。マンション購入を考えたことも数回あったが、いずれも実現しないままに交際を終えた。「どの女性とも綺麗に終わっているつもりです」というBさんは、交際女性への金銭的援助を惜しんでこなかったため、文句を言われることはないと考えている。

ここにBさんが女性との関係性に金銭を介入させていることが示されている。ダイアド関係において、経済的に優位にいる方の意見が優先されるなど主従関係が形成されやすい。Bさんの高収入は、パートナーとの関係性にも影響を与えていたと思われる。セクシュアリティに関してもBさん側の意見が優先されたとすれば、複数回の離婚の原因が妻に一方的に捨てられた、という彼の語りとは矛盾するように思われる<sup>21</sup>。

Bさんは、40代のころから愛用しているビタミン剤がある。海外で偶然出会い、自分に適していると感じているので「もう四半世紀も飲み続けている」という。そのせいか、「僕の年齢よりも随分年下の女性とも何の違和感もなくうまく付き合える」と感じている。

実際、Bさんは実年齢よりも10歳ほど若く見られることが多いそうだ。それは「個体によって構造が違っている」ことが原因だと思っているが、「若くいられるように、健康でいるための努力をしているもん」と語ってくれたのがこのビタミン摂取法であった。ビタミン剤の種類は20～30種類ある。Bさんは一日朝夕の二回ビタミン剤を摂取することを習慣としている。「これで全ての栄養をまかなっているとは考えていないけれど、食事で不足するものを補充すると考えたらこれくらいでいいかな」と考えたそうだ。

25年以上も一貫して同じ習慣を継続していることに筆者が触れると、「それくらいの努力は自分のためだもん、やりますよ」とBさんは苦もなく言っただけ。こうした努力によって「随分と年下の女性」とのセクシュアリティ関係を手に入れることができているとすれば、Bさんは生涯、女性を獲得するということに対して先を見据えた長距離選手で、大変な努力家であると言えそうだ。

またBさんの次の言葉には、若い女性をセクシュアルに獲得・支配するという大きな価値をおいていることが示唆されている。

Bさんは、同年代の女性については、「あちゃ～そりやもうお姉ちゃんじゃなくてお婆ちゃんでしょう、全然魅力なんて感じないよ～」と語ったのである。お姉ちゃんとお婆ちゃんの違いは、「ぴちぴちしているかどうか」ということや「エッチしたいと思える」かどうかということだった。Bさんはこうした「お姉ちゃん」から性交をせがまれて仕方なくすることもある。一緒に温泉に行くと、最初はそんな気がなくても相手がしてほしそしたら、「ちょっとやっどこか？」という流れになる。

Bさん自身が語るように、Bさんのセクシュアルな欲求はそれほど高いものではないとす

---

<sup>21</sup> セクシュアリティに関する事項は男性のジェンダー・アイデンティティに大きく関わり、「私はこういう男性です」という自己イメージを他者に伝え、他者にそのイメージを「上手く」植え付けることが男性のアイデンティティを安定させる。そのため、Bさんが筆者に対して彼のイメージを「上手く」伝えようとしたとも考えられる。



れば、Bさんはセクシュアリティを女性を喜ばせるためのツールとして使用している可能性が高まる。

Bさんは、あるレストランに、同日のうちに3人の女性を連れて行ったことがある。朝一人、昼一人、夜一人、という「パターン」で最良の店を利用する。「美味しいお店はたくさんの人に教えてあげたい」からで、Bさんが連れて行くのは、ほとんどが男性ではなく、「頑張っている女性」であった。そういった女性に対しては、心から「応援」したくなってしまうのだと語ってくれた。Bさんにとって、同行する女性は「頑張っている女性」で、高価な食事は彼女たちへのご褒美としての贈り物である。頑張っている女性たちとは図書館や学校などの公共の場で会うことが多い。積極的に声をかけにいき、話を聞いて「応援したくなった」ら食事に誘う。

Bさんがご褒美をあげる女性と、特定のパートナー女性は異なる。多くの女性を幸福にしているような感覚がBさんの男らしさを満足させているとも考えられる。

### 【Cさん】

Cさんも数回の離別を経験している。出会うとすぐに「結婚しようか」という話を出してしまい、入籍も「ちゃっちゃとやっちゃう」ためであるとCさんは説明した。Cさんは、「適齢期の女性は結婚を話題にするとすぐについてきた」と感じている。それは「僕がパイロットだっていうこともあるでしょうね」と考えており、その職業が「女性に夢を与えるみたいなんです」と考えていた。その夢というのは「空を飛ぶということに対する憧れと、この人お金持ってるっていう贅沢な生活に対する憧れ」をさしている。

Cさんはセクシュアルな対象を獲得するためには世間体をあまり気にしないと語ってくれた。「入籍っていうのは彼女とふたりだけの関係だから、何度やってもいいと思ってるし、他人に迷惑かけないし、なんといっても彼女が喜ぶから」、出会ってすぐに結婚話を進め入籍に至ることになるという。離別はCさんから提案することが多かった。もちろん、入籍をするときにはいつも離別は念頭にないが、夫婦関係が長続きすることはなかった。こうした結果になる理由について問うと、「なんでかな～いつつも終わってしまう」とCさんにもわからないということだった。

Cさんは、自分のことを「高身長や高学歴なんていう条件は備わっていないけど、収入だけは日本の労働者の上層部にいたと思う」。「年金の額だって、同じ世代の男よりもらっていると思う」。在職中は、「事故にあって早死したとしても、死後の保証がしっかりしているから家族は一生苦労しない」。「お金さえ持っていれば老後の生活も一人で乗り切れる」から「介護してもらって家族がいなくても余計な心配しなくていい」と考えている。

金銭的なことでCさんは苦労をしたことがないという。そのためCさんと一緒にいさえすれば、「余計な」心配をすることがなくなるため、これまで交際した女性たちに苦労をさせたことは一度もないと考えている。

しかし、定年後に「制服を脱いだらだめですね～、打率が落ちた」というCさんは、60

歳を超えてから「声をかけた女性があんまりついて来ない」ことに自信を失った時期があった。それでも「元パイロットだったんです」というと興味を示す女性は少なくないと C さんは感じている。高齢期の打率は、「他の職業だった男よりはましなほう」ではないかと思っており、異性関係の獲得の際には「職業が持つ魅力に助けられてきた」と語ってくれた。「こんなパツとしないおじさんでも、すごい美人の姉ちゃんがついてくるんですよ」。「男は見かけじゃないんだよ!」、「美味しいものは世界中食べ歩いたし、いろいろ見聞してきたから、誰にも負けにくいくらい博学ですよ」。

この語りから、C さんは外見にあまり自信をもっていないことがわかる。外見のマイナスをカバーするものは、職業が持つイメージであったと C さんは語っている。大企業の花形と言われる職種で、月給は一ヶ月の額面が 300 万円を超えていたという。現在も、企業年金を合わせると月収は 50 万円を超える収入がある。

C さんは、新たに出会った女性に対して、裕福さと昔の職業と洗練した物腰を強調することが、その女性との親密圏を形成する最初のきっかけとなると考えている。男女の出会いで第一印象の好悪を決める要因としてルックスや雰囲気あげられよう。ルックスを資源として使えない C さんは、「話術」で勝負をかけるという。

「最初にあった時に相手の興味を割り出し、それに沿った会話を展開していくんです」。「一旦会話が始まりさえすれば、僕の勝負ツール、パイロットです作戦が使えるじゃない、もうホテル直行です」。「それからは会うと必ずエッチしてあげる、そうしないと女性って不安になるみたいで、私の他にも女性がいるからエッチしないんでしょう、となってしまう」。女性によってセックスをする回数は異なる、それは各女性の個体差であると C さんは考えており、その女性の習性に合わせた行動をとるようにしているという。「僕はどんな女性にも対応できます、どんな女性の欲求にも答えてあげられます。楽しませてあげられます。年齢よりも健康ですし、悪いところはどこもないから」。

C さんにとって性的行動は、セクシュアルな欲求に突き動かされて起こす行動ではなく、獲得した女性を維持するための手段であった。女性の習性を分析したうえで性交の頻度を決め、良好な関係性を維持するためにセクシュアリティを利用している。

C さんの性的行動に対する柔軟性は健康である身体に帰され、それが C さんの外見をカバーすることにもなっていると彼は考えている。C さんの性的行動は、女性を楽しませて良い関係を維持することを目的としているのである。

外見には執着しないと語っていた C さんであったが、インタビュー終盤になって形成手術などを受けた経験を語ってくれた。

「髭が白色になって来て汚くなってきたので、美容外科で永久脱毛を行ったんです。眉毛は染色してる。それに、筋肉増強のための点滴を週に 1 回受けているんです」。C さんは「もともとのルックスの醜さは仕方がないと思うんですね、でも、老化した醜さっていうのはまた違うんです。その醜さだけは取り去ってしまいたいって思ってます」と説明してくれた。C さんは「もともとの顔を変形させるための美容整形には賛成できないけど、老化

した部分を修正するという美容整形ならいいんじゃないの？」と考えている。

Cさんにとって、「天性の形」と「老化した形」は異なるものであるという。老化した箇所を修正することは、元来の形に戻すことでしかないので、整形手術を支持する考えを示してくれた。

Cさんは、毎日同じ女性と会うことを回避していた。「日替わり」デートは、「ひとりの女性にのめり込まない」ためと、女性たちから「依存されない」ようにするためだった。「一緒に遊んでくれる女性」であればありがたかったとCさんはいう。Cさんが女性に求めるものは、日常的な共同生活者ではなく、非日常的な刺激、有り余る時間を「一緒に遊んでくれる」女性である。

#### 4) 考察

インタビューで3名の男性は、男らしさの規範、セクシュアリティの規範、年齢規範や社会的役割の関係、そして、それらの規範の間の葛藤、規範を超えるための戦略を語っている。それらを①高齢男性がもつ男らしさの概念とセクシュアリティ、②高齢期におけるセクシュアリティの位置づけと、③現在のパートナーとの関係性の意味に分け、考察する。

##### ①高齢男性が持つ男らしさの概念とセクシュアリティ

第一に男らしさについてであるが、離別前の家族と同居していた頃の男らしさにはあまり触れられなかったことが特徴的であった。結婚期間においてセクシュアリティ関係を婚姻内に限定していたという男性は、セクシュアリティへの関心が「強い方ではない」というBさんだけであった。夫婦のダイアド関係において、セクシュアリティは、親密性を上昇させるためのツールとしては捉えられていなかった。

彼の婚姻関係でのセクシュアリティの語りの欠如は、婚姻外でのセクシュアルな関係のあり方と関わっているように思われる。離別後に一人になった時にも慌てることはなかったようだ。なぜなら、婚姻関係中にも婚外性交を行い、妻以外の女性との食事会などを継続していたため、離別して妻との関係は失ってしまったがそれ以外の「綺麗なお姉ちゃん」との関係が途切れたことはないからであった。

婚姻外の女性との親密関係においては、セクシュアリティは「仲良くなるための」ひとつの手段として語られる。結婚という制度でつながれない不安定な恋愛関係にある男女にとって、男性のセクシュアルな欲求を対象女性にぶつけることがその女性を喜ばせることになるという説明がなされた。「セックスしてあげる」という表現に端的に表れされているように、女性は男性からそのようにセクシュアルな対象として扱われることを欲している存在とされ、それを満たしてあげることが男らしさなのである。

インフォーマントたちにとって、綺麗な若い女性との関係を「複数」もつことに大きな意味をおいているようだ。綺麗な女性を連れていると、「周りの男たちの視線が気になります」という語りからは男性間の女性獲得競争における勝者である感覚を楽しんでいるよう

に思われる。また、女性たちに「取り合い」をされた経験は、男性に優越感や自信を与えることになろう。そういった経験や立場を継続させたいという欲求が、彼らを複数恋愛の同時進行に向かわせていると考えられる。

新たな異性との関係性を構築する際には、年齢規範という壁に突き当たったが、彼らはその壁を乗り越えるために、外見を変化させるという方法とそれまでの社会経験や美食経験などを強調する方法をとった。つまり、年齢を重ねてきたことを利用して「教えてあげる」という立場を捻出するのであるが、同時に、女性に接近するためにはなるべく若い風貌をしている方が接近を容易にすると考えている。

そして、彼らは自分のことを高齢者であるとは認めない。そう自覚することは、彼らの性的行動の自由度を自ら狭めることになると考えられる。ここに自己と他者の認識のズレが生じていると予想されるが、彼らは(特定の)女性の二者関係においてのみ「まだ若い」ということが確認されれば良いと考えていた。

しかし、実際には体力や容姿の衰えに抵抗するために多額の金銭を投じており、美容外科などを利用している。「見た目年齢」が最も大切だと考えているからであった。月に一度の美容外科通院を欠かさず次はどこをどうしようかと高揚する A さん、健康食品やビタミン剤の摂取を欠かさない B さん、毎日の筋トレを 1 時間こなしながら美容外科で筋肉増強の点滴を打つ C さん、彼らの行為は身体的な若さを欠いた男らしさを否定する。

また、女性との関係性を築く際にとった手法のなかにも、彼らが肯定する男らしさが表れている。

3名の男性たちはいずれも、女性にアプローチする際に定年退職前の職業を提示している。C さんを例に上げると、「僕はね、国際線のパイロットしていたんですよ」、「僕、空を飛んでいたの」、「地上と同じくらい空の上にいる時間が長いんだ」という提示であった。それは、20代前半にパイロット訓練生だったころから「そういうと女性がついてきた」から学んだ方法であるということから、若い頃に獲得した異性関係構築の方法を今なお使い続けていることが明らかになった。

我が国において例えば C さんのパイロットという職業は、高収入で安定した生活と結びつけて考えられる傾向にあるため、結婚に安定を求める女性にとって好条件を提示することになっている。インフォーマントたちは、「高身長や高学歴なんていう条件は備わっていないけど、収入だけは日本の上層部にいたと思う」し、「年金の額だって、同じ世代の男よりもらっていると思う」、それに「事故にあって早死にしたとしても、死後の補償がしっかりしているから家族は一生苦労しない」ので安定した生活を提供できる自信があるという。

このように彼らは男らしさの第一の条件に経済的裕福さをあげている。他の男らしいとされる要素が何も備わっていなかったとしても、裕福でありさえすれば女性はその男性に関心を持つと考えている。それは、高齢期にある今なお継続できる、常に他の男性との差異化をともなった高評価の男らしさである。そして、それは職業人としての《高齢者になる前》の人生に裏付けられている。彼らのこの男らしさは、異性関係に限らず、「お金さ

え持っていれば老後の生活も一人で乗り切れる」というように、「介護してもらって家族がいなくても心配ない」と語ってくれた。興味深いことに、結婚する相手を探しているにもかかわらず、この男らしさ（経済的裕福さ）は、配偶者や家族が不要であることを強調する語りに帰着する。

これらの3名の男性たちは、ある類似した特徴を備えている。すべての物事をポジティブに捉える、非常によく喋る、褒め言葉を多用する、文学的な言葉や表現を使いこなす、という点である。これらに接した女性は、恋愛に対する夢や楽しい想像を膨らませることができるのではないだろうか。我が国で男らしさは寡黙や沈黙と関連付けられる傾向にあるが、これらの男性たちはコミュニケーション方法を身に付けており、そこで退職前の職業や経済力、広範な趣味、知識といったものを男らしく大いに利用するのである。

## ②高齢期におけるセクシュアリティの位置づけ

女性との性交を「恋愛のお楽しみ」という言葉で表していたAさんのように、セクシュアリティは「楽しみ」で経済的基盤よりも下に見られていること、経済的余裕が異性との関係性を構築可能にし、その延長線上に性的行動が発生するのだという考え方が彼らの語りから示された。性交が男女関係の最終の目的ではなく、男女の関係は生活基盤を整えることが最優先で、それを実現できる者だけが楽しいことを享受できるという考え方である。先行研究においては、日本の男女のセクシュアリティには活発な行動がみられず、夫婦間のセックスレスが問題視されていた。本調査において、セクシュアリティと生活能力は、同じ土俵で天秤にかけられる関係性として捉えられていること、生活能力が優先的に順位付けされていることが示された。

異性との長期的な関係に重要な要因としては、「お互いを信頼し合うこと」、「生きざまを共にできること」、「楽しい時間を過ごせる好相性」があげられ、男女の関係性である以前に人間と人間の関係性を構築する必要があるという考え方がみられる。そのため、「出会ってすぐに簡単に」行う性的行動は、長期的な展望なくして行われているという否定的評価とともに語られている。本調査のインフォーマントは、長期的な関係性を望む女性に対しては、性的行動をある一定の期間控えるべきだと考える傾向が示された。

また、一旦親密になった女性との関係性を長続きさせるために、性的行動は有効であると考えられる傾向がみられた。セクシュアリティは、対象男女ふたりだけの親密圏でおこなわれるため、二人の秘密として「共有する」ことが二人の親密性を高めるということであった。また、この二人の関係内でのみ許可される行動という認識が、二人の親密性を高めるという説明もあった。セクシュアリティは二人だけの秘密の親密圏を可視化する役割を果たしているといえよう。

## ③現在のパートナーとの関係性の意味：男らしさの評価を上げるための性的行動

インフォーマントたちは性機能を維持する努力をし、性的行動を積極的に行っていた。

セクシュアルな欲求を充足させるためや女性にモテたいためにセクシュアリティに関心があるのではなく、自分自身の男らしさを向上させるために性的行動をとることが決定されたと考えられる。彼らの性的行動は他者から高い評価を得るためではあるが、対象女性からの性的行動の技術的な「質」への評価はそれほど求めていないようだ。物理的に「結合」したかどうかという事実と、その女性にセクシュアルな欲求を示した頻度という点に意味をおいている。女性の魅力が彼らの性衝動を引き起こしたと伝えることは、女性への最高の賞賛であると捉えていた。そのとき彼らが参照する他者とは、既知・未知の同性（「同じ世代の男性」「若い男性」）である。

また、インフォーマントたちの語りは、男らしさを高める要素としてセクシュアリティが大きな影響力を持っていることも示している。「旅先で声をかけた女性その後僕にどう接して来るか、それによって僕の男度を測ることができる」というCさんは、「最近、不調」だという。それは以前よりもCさんを受容する女性の割合が減っていることを指している。Cさんは、それによって高齢期において男らしさが減少したとみなされることを実感している。

3名の高齢男性たちは、若くて美しい女性と「楽しいお喋りの時間」を共有することや（若い）女性から関心を持ってもらうことを求めており、女性から一人の魅力的な男性として評価されるための努力を怠っていないことを教えてくれた。女性から好評を得る第一のポイントは、高齢男性であると判断されないように振舞うことである。若くて美しい女性と少しでも釣り合いが取れるよう、外見に関する手入れを行っている。つまり、もう一つの男らしさの参照軸は、若い女性である。

以上から、本節のインフォーマントたちは、女性を通して自己の男らしさの度合いを測定し、かつ、同年代の男性の中での序列を見極めながら、自分の男性としての価値を測っているといえる。魅力的な男性であり続ける努力を怠らず、同時に彼らは男性の視線を通じた高評価も望み、また女性の視線を通して評価されることに大きな意味をおいている。

そのとき、異性に評価される際に重点をおいているのは、「若く」男らしい外見であった。そのために美容外科は必要であるし、サプリメント摂取で身体の調子を良好にすることも健康的な外見に繋がると思われる。しかし、これらの方法は経済的な余裕がなければ継続できないと考えられ、男らしさは金銭で補うことができる側面もあることが示された。彼らは、自らの身体にも異性にも若さを求めることで年齢規範を内面化しており、また経済力と男らしさは不可分に関連づけられていることが明らかになった。

## 第2節 性的行動と男性としての承認

### 1) 調査目的

高齢者に関する議論は、身体的な老化や生活の困難が強調されてきたため、あまり魅力的ではないようにみえるし、社会からの高齢者の扱われ方も丁寧とは言えないように思う。まだ働いているか、健康であるかなどの個別の詳細な情報を得る前に、古い、老いた人間

であるという情報で片づけられ、個人の属性は切り捨てられてしまうこともある。

特に、「男らしさ」は高齢者に無関係なものとして扱われてきた。なぜなら高齢者は若い人びとが理想とする活発なライフコースから分離されてしまうので、高齢者が男性であるか女性であるかということは重要とされなくなるからである (Spector 2006)。

しかし近年では、人口の高齢化に伴い、高齢者の性に対しても関心が向けられるようになってきた。高齢者の性は健康雑誌の重要なトピックの一つとなっているし、また健康食品においても、ことに高齢男性をターゲットにした性まつわる商品は一大市場を形成している。いうまでもなくこうした記事や商品は、高齢者のジェンダー・アイデンティティの維持と密接な関係を持っている。だが他方で、「老人には性欲がない」という通念も、根強く残っている。このような中で、実際に高齢男性たちは、自らの男らしさをどのように維持・受容しているのだろうか。

本研究の目的は、高齢男性のジェンダー・アイデンティティが、矛盾するジェンダー規範と年齢規範の間でセクシュアリティを媒介として、いかに維持されるのかを明らかにすることにある。ジェンダー・アイデンティティは、通常自明なものとして、とくに社会的に支配的な立場にある男性にとって、意識化されることはまれなことのようと思われる。しかしそれが危機に瀕したとき、ジェンダー・アイデンティティを支えてきた規範が意識化・可視化されるのではなかろうか。

配偶者を失い、自らの男性アイデンティティの危機に直面した男性は、まさにそのような状況にあるものと思われる。本節では、これらの男性が、新たにセクシュアルなパートナーを獲得することで、いかにして新たなアイデンティティを構築したのか、そしてそれとは矛盾する年齢規範といかに折り合いをつけようとしているのかを、高齢男性たちへのインタビューの分析を通して明らかにしたい。

先行研究の手法にならい、高齢男性に調査を行った。現代日本の高齢男性は「男らしさ」をどのように捉えているか、彼らの主観的な意見を筆者にどのように提示するのかという点に注意し、現代日本の高齢男性の「男らしさ」がどのように認識されているかを読み取ることによって、高齢男性のジェンダー・アイデンティティの相を明らかにしたい。

具体的には、①彼らが「現役時代」を振り返り、自分らしくあること、すなわち、男らしくあることが、どのようなものだったと語られ、そこにジェンダー規範がどのように表現されているのか、②パートナーを失うことが、こうした自分らしさに関わり、どのようなものとして経験されたと語られるのか、③またその過程で、年齢規範による「老人」「年寄り」というアイデンティティを受け入れることを、どのように感じたか語っているのか、④そこからどのようにして自分らしさを回復しようとしたと語られるのか、⑤それは現役時代の男らしさとどこが同じで、どこが違うのか、それと齟齬する年齢規範のプレッシャーを、どのように回避しようとしているのか、という点に注意して分析を行う。

## 2) 調査対象

調査は 2009 年 10 月から 2010 年 1 月に実施し、半構造化インタビュー形式で、なるべく自由に話していただくように心がけた。一人ずつ 2 時間半程度の聞き取りを行なった。インフォーマントの居住地は、大阪府下大都市、および東京都に隣接する中都市である。スノーボール式サンプリングでインフォーマントは選定された。

インフォーマントは妻を亡くした 3 名の独身男性で、現在は新たな異性パートナーと交際している。彼らは妻との死別後、新たな異性パートナーを獲得できたいわば成功者であり、それだけに自らのセクシュアリティや男らしさについて明晰に語り、性規範と年齢規範との折り合いのつけ方について具体的に述べている。そこで、彼らの語りの中から高齢男性のジェンダー観が鮮明に浮かび上がると考えた。

3 名の男性とパートナーの状況を以下に示す。

D さんは 70 代前半で、妻と死別した 4 年後に現在のパートナーと交際を開始した。知り合った場所は老人クラブ内のサークルである。未婚子と同居している。

E さんは 70 代前半で、妻と死別した 1 年後に現在のパートナーと交際を開始した。知り合ったのは趣味のサークルである。既婚子家族と同居している。

F さんは 60 代前半で、妻と死別した 2 年後に友人の紹介によって現在のパートナーと交際を開始した。既婚子家族と同居している。

### 3) 調査結果

インタビューの結果得られたデータの概略を以下に示す。妻との死別経験、新パートナーとの関係など、主に女性との関係性についての説明にどのような規範が作用しているのか、結果的にどのような行為に至ったのかという点に着目しながら分析を行っていく。

#### 【D さん】

D さんは、70 代前半。東京近郊在住、大企業を定年退職し、不足ない年金で生活している。家族構成は、既婚子が 2 人、未婚子が 1 人、複数の孫がいる。D さんは死別前から未婚子と同居している。彼が妻を亡くしたのはインタビューの 7 年前であった。自分より若い妻の入院、介護は、D さんの想定外だった。50 年近くつながる職場仲間が多数いるが、退職してからは、忙しい後輩たちに「こちらからは気軽に声をかけられない」。

婚姻中に性関係を持ったのは妻だけで、結婚は性交するための「免罪符」だった。妻との性関係は定期的であり、「平均より多かった」し「自然と出来たペースがあって、それ以上間隔が開くと妻からねだられたので、男として妻を満足させていた」自信がある。

D さんは、妻を失う前の自分を、職場でも多くの同僚に恵まれ、また家族においてもよき父親であったと回想する。職場の親友とは今でもつながっているという意識をもち、また父子関係も良好だった。しかしこれらの関係の要となっていたのが、妻との関係だったと D さんは語る。そして、妻との関係を支えていたのが、妻との頻繁な性交であった。セクシュアルに妻を満足させることを通して、家族内での父親役割、職場での役割を維持し



ていたという意識が D さんにはあるのだ。

献身的な介護のかいもなく、D さんは妻を失ってしまった。在職中は仕事に集中することで悲しみを紛らわせることができたが、退職後は悲しみに直面することになった。そこで感じたのは、孤独感だった。D さんは、複数のサークルに参加し多数の仲間がいるという状況にもかかわらず、孤独感を感じたと語り、妻の喪失が D さんの人間関係の要であったことを再度強調している。

死別後も異性への関心は失っていないが、「こんな皺くちやな爺さんがそんなこと話題にしたら馬鹿になったか、気でも違ったかといわれるのがオチ」なので、所属する複数のサークル内の多数の仲間の前や、親族や近隣住人の前では異性の話題を避けた。

また、D さんを「独身だと知っている近所の人たちからは、どこであってもじっくり観察された」と感じていた。そうした視線を回避するためには、「家事に困っている振りをして憐みを買っておくと、おかずに貰えたりするし、異性関係の噂も出ない」と D さんは語った。「看護婦の体に触ったエロジジイが事件で取り上げられたりすると、高齢者はみんないやらしいと思われ迷惑です」。

さらに D さんはここで、年齢規範との葛藤も経験する。D さんは異性への関心は失っていなかったのに、それが知れると周囲に、「馬鹿になったか、気が違ったか」とみられると感じたのである。

死別後、D さんはパートナー探しを始めた。「寂しいんですね...、ちょっと触れたいっていう時に誰もいないんですから。この年で...もう中性になったとか第三の性になったから諦めろとか言う人もいますが、まだまだ男なんですよ」。近隣にある公民館や農協主催のサークルに複数所属して、女性との出会いを積極的に求めた。しかしながら、気に入った女性となかなか出会うことができなかった。「モノ欲しそうな顔は見せませんでした」という D さんの本心は「こんな年寄りには誰にも関心を持たれない、必要とされていない...と悪い方に考えてしまうんです」というものだった。当時の D さんは、「温もりは欲しかったけれど風俗には行きませんでした。...実は、AV（アダルトビデオ）を見ていました。いい年をしてお恥ずかしい...」。

D さんは孤独感からの脱出のために、新たなパートナーを探し始める。しかしこれは単なる友人ではなく、セクシュアルなパートナーである。D さんにとって、情緒的な満足感が得られる異性との関係は、またセクシュアルな関係と不可分として語られるのである。他方で D さんは、自らのセクシュアルな能力を、AV を見ることで維持しようと試みている。

またここでも D さんは、こうした関心が年齢規範と葛藤するものとして語っている。D さんの求めるものが単なる友人関係なら、このような葛藤は語られなかっただろう。情緒的満足を与える関係がセクシュアルな関係と不可分だからこそ、年齢規範との葛藤が生じるのである。

しばらく経つと D さんは、容貌に惹かれた女性と二人で出掛けるまで親しくなることができた。「美術館とか知的な場所で、ウンチクを聞かせてあげると惚れられますよ。女性は

知りたがりですからね」。Dさんは若い頃に読んだ雑誌記事や、若い頃の同性友人との会話で学んだ作法を維持していた。しかしながら、彼女はなかなかセクシュアルな関係に応じず、「全てを拒否された」ようで苛立ちを感じた。拒否された時には「僕はまだまだ男のままなので辛かった」というDさんだが、「肌を重ねて安心したい、恥ずかしいなら真っ暗な中で」と「引き下がることなく食らいついた」。Dさんは「女性には、強引に何度も誘われて断り切れなくて仕方なく、という言い訳をあげるのがいいんですよ」「男が何も恥をかかないで女性を手に入れようなんて無理でしょうね」と語った。

ここでDさんは、新たに出合ったパートナーとの関係を語ることによって男性と女性の関係についての考えを示している。すなわち男性は、知的にもセクシュアルにも能動的であり、女性はそれを男性から受動的に与えられる存在だとしている。このような考えはDさんが、若い頃から維持しているものだった。そして新たなパートナーを得たのちも、こうした関係をそのまま再建しようと試みたのである。

また、Dさんは、高齢になると「もう勃起しないんじゃないかと思われがちなんですけれど、十分可能です。若い男と僕らとの違いって、一日に何度もできるとか子どもができやすいとかくらいじゃないかな」と考えている。異性と「セックスで繋がるっていう感覚はすごく大事なんです」。そのためにDさんは毎日マカを飲んで、胡麻を食べるようにしている。

Dさんはここでも、女性との関係において、性交が重要であることを強調している。Dさんは、若い男性と比較すると、高齢男性は性交の頻度では劣るといふ。しかしそれは、些細な違いとして語られる。Dさんが強調するのは、高齢者においても、異性とのつながりはセクシュアルな関係と不可分だという点である。そしてDさんは、健康食品を摂取することで、それを維持しようと努めていると語るのである。

ところで、Dさんは、交際に持ち込むまでに、年金額を聞き出すことに苦勞したという。「彼女の年金額が低いほど、僕の年金額が高いほど、彼女が僕に振り向いてくれる確率が上がるでしょう。…経済力が無いと恋愛なんて話になりません」。「今の若者は草食系だとか言われていますが、月給を貰えないことには肉食になれないでしょうよ。女性には金がかかりますよ」と、非正規雇用者が増加している現代の雇用状況に言及している。

交際費について家族に口出しされた場合には、「これは僕のお金だと有無を言わせないで突っぱねます。僕が強く言えば誰もケチをつけることはないと思います」。

また、今後、出来れば結婚という形をとって、彼女を「経済的にも支えてあげたい」と思っている。そうすることが「男としてのケジメ」だと考えている。また、Dさんは、結婚をしないと性交してはならないと考えてきたが、現在は「現代の風潮に同化してしまったんです」と面目なさそうに頭を抱えた。

ここでDさんは、男性と女性の間を、経済的な優劣と関連付けて語っている。経済的に優位にある男性が、劣位にある女性を助けるという関係が、男女の恋愛関係を可能にするというのである。そして、それは結婚において完成すると考えている。また能動性と自

律性は、経済的な出費は家族に口出しさせずに自分で行うという語りでも強調されている。

そして、このような理想化された男性のジェンダー・アイデンティティは、世代間の相違としても語られている。若い世代は非正規雇用が増えているために、草食系になっているというのである。

だが年齢規範とジェンダー規範のはざまで、Dさんが理想の「男らしさ」を実現することは、現実には難しい。それをDさんは、「現代の風潮に同化」したと語ることで示している。

### 【Eさん】

Eさんは、70代前半である。大阪近郊在住で大企業を定年退職した後に、その関連会社で短時間勤務をしながら報酬を得ている。定年間際の60歳直前に妻を亡くした。既婚子が2人、未婚子が1人いる。既婚子家族と同居している。48年勤めた職場の男性たちとは今後も繋がっていくつもりである。職場のOB会も充実している。現在もEさんが子どもたちに慕われるのは、妻のおかげだと感謝している。子どもの学校行事参加は運動会だけだったが、Eさんの指示どおりに妻が動いていたため、間接的には父親責任を果たしてきたと自負している。経済的に家族を困らせたこともない。妻に経済面や子どもの教育面で依存されるのは嫌ではなかった。

夫婦関係では、セクシュアルな意味で妻を「女にした」し、妻の健康や身体に関して責任を感じていた。一方、結婚後も仕事の延長感覚で、職場の複数の女性と交際した。気持ちの入らない遊びと割り切った関係で、家庭とは切り離して考えており、仕事の一環だった。50代に役職が付いた頃、女性との自由な交際はやめた。独身の女性たちもそれなりにセクシュアリティを謳歌出来て、お互いに楽しんだのではないかとEさんは思っている。

Eさんのセクシュアルな関係についての考えは、愛情を伴うこと、愛情が欠如していること、で二分されている。いわゆる性のダブル・スタンダードで、Eさんの妻以外との性的行動は、Eさんが男性であるがゆえに許される行動ととらえられている。

Eさんは、男性はセクシュアルにも社会的にも能動的であるべきだということを強調している。同時に、セクシュアルかつ社会的に能動的な夫と、受動的な妻という関係性の中で、男性が家庭において父親役割を果たしているという。これらの語りから、Eさんが社会的な父親役割と夫婦のセクシュアルな関係を関連付けて捉えていることがわかる。

妻との死別後、Eさんは「張りが無い毎日」から脱出するため、職場の退職者クラブや地域活動に積極的に参加した。「人との交流は多いのに寂しかった」。パートナーを求めても、「もうこの年だし、受け入れてくれる女性もいないだろう、こんなお爺さんになってしまったね」。妻への思いが募り、「いてくれたらなあ。もうあの温もりはないんだ、もう二度と感じることはできないんだ。もう男としては全て終わってしまうのかと暗くなった」。

Eさんは、以前の職場の多数の仲間とのつながりには現在も引き続き情緒的満足を示しているが、退職者クラブなどの現在の多数の仲間とのつながりには満足できず、寂しさを感じ

じたと言っている。どちらも E さんが大勢の仲間に囲まれているのは同じだが、以前と今の違いには、妻の存在、不在という対比があると推測できる。つまり、間接的に、社会的つながりにおいても、妻の存在が重要であったことが示されていると考えられる。

サークル仲間に、「もうお一人でも大丈夫なお歳ですね」と言われたことがあるが、「独りで寂しくない人間っているんでしょうかね。もしも全身不随になったとしても、隣に誰か寝ていたら僕は嬉しい」と思っている。こういった本心とは裏腹に、E さんは、「まだそっちの興味があるのかと軽蔑されないように」反論しなかった。

また、異性には、若く見えることで得をする。「よぼよぼのジジイだと恋愛対象から外される」。しかしながら、「惚れた、はれた、という年ではない」ので近隣に対しては落ち着いた紳士を装っている。

「新聞で、僕たち世代の男が女子高生の足を触ったとか破廉恥な事件を読んだら、悲しくなります。青二才じゃないんだから自分でコントロールするとか、彼女つくるとか出来ないのかって。もう勃起もしなくなった爺さんじゃないんでしょうかね、あんな事件を起こすのは。普通、そういう欲望って隠しますよね、僕らくらいの年になったら」。このように、E さんの性的行動に対する視線が、若い頃のそれと変化していることについて、E さんは、新聞記事の老人を例に、独身高齢男性の孤独を語ってくれた。

これらの語りにおいて E さんははっきりと年齢規範が地域やサークル仲間からの視線として存在すること、また、自身がその規範を受け入れるべき年齢であることを認識している。しかしながら、E さんは、男性のアイデンティティ、社会的なつながり、情緒的満足感と、特定のパートナーとの情緒的つながり、セクシュアルなつながりが不可分のものとも認識しており、今もそれらを必要としている。E さんがそれらを望むことが年齢規範と矛盾しているために葛藤を生じさせているのである。

E さんも一時的に「老人」を経験したという。「見かけも気にしない、誰とも話したくない、どこにも出かけたくない気分」だった。だから、「老女なのに真っ赤な口紅をつけて男の気をひいたり、禿げジジイなのにバーコード状に毛を分けたりして、努力をしている限り老人ではない」と E さんは考えている。ここで、E さんは、「老人」をセクシュアルな欲求を持つ人と対比させており、「老人」とは社会的関係から自ら撤退する人であるとして、セクシュアリティと社会性の関係を明らかにしている。

E さんは、気に入った女性に接近する時に、「既婚か独身かとか、年齢とかを男から女性に聞くのはご法度」などの作法があるため苦勞をした。E さんはこの作法を「結婚前に雑誌で知った」。

今は「独身なので何をしようが自由です。でも、ご近所の目があるのでこの街では男モードにならない」。そこで、彼女をドライブに誘い、なるべく遠くの山や湖へ行き、「エッチな欲求を伝えました。衰えたけれど、まだそういう興味はありますから。そういうことって男の方から言いたくないと、女性からは言えないでしょう」と語ってくれた。

交際が近所にばれたときのことを不安に思う彼女に、「他人に何か言われたら、僕が蹴散

らしてやると約束しました。男が、こうだ、何か文句あるのかという態度を見せればそれで終わりですからね」。しかしながら、「お互いの家に入らないように喫茶店で会うか 3 駅先のホテルで会うようにしているし、地区の役員も引き受けているので、変な目で見られることは未だにないんです」。

パートナーとの現在の関係は、「もう若くないと弱音を吐きながら、若く見せる努力をしあえて気楽だ」。配偶者喪失を経験した者同士だから、他人に隠してきた惨めな感情も話せる「恋愛なんかする年齢じゃないのにね、成長しないジジババだね、と笑い合っています」。「ただセックスしたいだけなら、風俗に行けばいい。でも、若い子とはお互いに理解しあえませんか」と言う。

E さんの欲求と年齢規範は明確に齟齬をきたしているため、E さんは、若い世代には不必要だと思われる苦勞を強いられた。E さんは、それらをすり抜けるために用いた色々な戦略を筆者に示している。パートナーの前では「男らしさ」を誇示し、その関係性の中で男性役割を取る一方で、実際には、お互いの家に入らないようにしたり、生活圏ではない場所で会ったり、年齢を隠したりという方法がとられている。

また、E さんが、風俗では得られないと考える満足が、パートナーとの関係からは得られると語っていることで、E さんのセクシュアルな欲求には、情緒的な関係も含まれていることがわかる。E さんは、性交という行為がパートナーとの相互理解を深めると語っているが、E さんが求める相互理解の関係とは、E さんの男らしさが発揮できる関係であると推測される。

そして、良好な異性関係の維持にセクシュアルな接触は必要だと考えられている。性交は、「求められたら応じないといけない」し、「男が勃起しないと不可能」だから健康維持が必須だ。糖尿病の家系なので、予防のための通院と 1 万歩の散歩は続けている。「男が怖い病気は何かっていうとやっぱり糖尿ですよ。勃起しなくなりますからね」。このような予防対策に無頓着な男性は、「恋愛経験が乏しくて女性のことを自分よりも大切にすることがない自己中（心的な人）だろう」と思っている。

疾患予防のために通院する内科で知り合った男性から、性機能は使わないと自然淘汰されると聞き、「終わってしまわないよう AV ビデオで自己処理していました」。こうした自分の行動を振り返り、E さんはこう語った。「まさかこの年になって DV 見るなんて思いませんでした。まだ若い時には、爺さんが AV を見るなんてあり得ないと思っていました。そんな爺さんがいたら軽蔑していたと思います。それが、自分がそうしているのです」。今はパートナーのために「体力温存して AV は見ません」。

ここでは、セクシュアルな関係が E さんのジェンダー・アイデンティティにとって非常に重要であることが明らかにされ、男性は、女性から性交を求められた場合には応じなければならないなどの男らしい作法に努めるべきだと E さんは言っている。E さんの場合、それが男としての立場だけでなく、社会関係の結節点になっていることを示しているのだ。E さんが AV を使って自分の性機能の維持に努めたのは、パートナーとの関係性の向上のため

めだけでなく、Eさんが社会との関係性を維持するためでもあったと考えられる。

経済力については、パートナーとの関係を長期的に維持するためには、経済的支援をすることも必要であるという。それは、Eさんの年金額がパートナーの年金額よりも多いということと、パートナーの遺族年金が亡き夫に帰するものであるという考えによっている。

年金額はEさんの方が彼女よりも多いので、経済面は援助したい。二人が会うコンディションを整えるためである。「亡くなった旦那さんのおかげで得ている年金を僕のために使うという彼女の気持ちを考えて。僕は自分が働いた年金だからどう使おうと何とも思わないけれど。誰かと一緒に生きていたい、誰かの温もりを感じたい、僕がしてあげたことが彼女の幸せになったという実感が嬉しい」とEさんは言う。

### 【Fさん】

Fさんは、60代前半。大阪近郊に住む。50代後半の時に突然の事故で妻を亡くした。それから定年までは、仕事に没頭することで悲しさや寂しさを紛らわすことができた。定年退職を機に既婚子家族と同居を始めた。

共働きだったので家事は何でもできる。保育園時代の育児には関わったが、成長するにつれ父親役割は減り、大学進路決定時と就職先選択時以外は妻任せだった。「それなのに3人の子どもが慕ってくれるのは妻のお陰です」。そんな妻のおかげで「出世街道を歩んで、経済的に家族に楽をさせることができた」。Fさんは、家族の中の人間関係を、妻との関係を通して構築し、維持してきた。Fさんは、妻に育児の大部分を背負わせたことを申し訳なく思っているが、家族に経済的余裕をもたらすことが、妻の子育てに等しく重要な父親役割であると語っている。

妻とは、少しでも一緒にいるためダブル布団を使い、肌に触れるだけでも安心した。「妻に対して、男の役目と言われていることは全てやってきました」と、妻をどれほど大切に扱ってきたかを話してくれた。「男は（射精後）すぐ冷めるのですが、僕は妻が満足するまで続けました。妻がなくなる前日にもセックスしました。結婚後、1週間あくことはありませんでした」。

妻との仲の良さは子どもたちに冷やかされたほどだが、職場での不愉快な感情処理に風俗を利用したこともあった。それが妻に知れたとしても、愛情を伴わない性交なら許しただろうと考えている。「男がやることに口を出すなんて普通ありませんよ。出されてもやめないことが分かっているだろうし」。

死別後に、寂しさから逃げようと風俗に行ってみた。しかしながら、帰り道には罪悪感が生じ、孤独感が増すことに気づき、この方法で寂しさは解決できなかった。「独りじゃ寂しいですね。3年は我慢しようと思ったけれどすぐにダメでした。ホっとできる女性と、出来れば一緒に暮らしたい、病院にも堂々と付き添える関係になってお互いの身体にも責任を持ちあいたいと思ったんです」。

Fさんは、「3年間」独り身でいられなかった理由として「生身の男」（後出）であること

を言い訳としているように、妻との関係もセクシュアルな関係がベースにあると捉えている。また F さんにとって、セクシュアルな関係は愛情のある関係／ない関係に二分されており、それがダブル・スタンダードを正当化する理屈になっている。妻の死後も、F さんにとって人間関係のすべての起点は異性との「愛情のある」セクシュアルな関係だということが、ここで語られている。

妻の突然の事故死を受け入れるには時間がかかったが、生前、妻は自分が先に死んだら再婚するよう仄めかしていたので実現してもよいかなど考え、パートナーを探し始めた。F さんは、複数の趣味サークルに所属し、同時に旧友に女性の紹介を依頼した。結果的に、現在、友人から紹介された女性と交際をしている。

しかしながら、F さんの願いはすぐに叶ったわけではなかった。好意を示しあつたはずの別の女性に、年齢を示した後によそよそしい態度をとられるようになった経験もある。女性の推測よりも F さんは高齢だったのだ。そのことがあってから、「生身の男なのに、この年になっては、もう誰ともそういう（セクシュアルな）関係にはなれないかも知れない」と不安になり、妻に取り残された孤独感と、誰にも相手にされない怒りのようなものを感じていた。

「子どもたちには孤独感や性的欲望を見せられない」。「この女性を抱きしめたいと思うことは何度かありました。でも、この年齢だし、利害関係を考えると前に進めなかった」。「利害関係」とは、性交する関係をもった後に女性に何か要求されるのではないかということである。

F さんは、サークルでの人間関係が、《異性との愛情のあるセクシュアルな関係》を伴う人間関係を代替できないと語っている。ここで、F さんは、異性への欲求を露呈させた高齢者は、孤独に対応できない未熟者とみなされるという年齢規範を示している。また、F さんは、父親役割が異性への関心に抑制をかけた経験も語っている。

現在付き合っている彼女とは、「こういう（セクシュアルな）関係になったのですから、この人の人生に責任を持ちたいと思っています」。「人目があるので、お互いの家には入れない」ため、近所で食料交換をしたり、喫茶店で話したり、普段は「孤独な老人を装っているが、**本当は僕には彼女がいるんですって言ってしまいたい時もあります**」。

家事は一通りこなせるし、「自分のことは自分でできるから、まだ、老人ではないです」。「子どもに世話をされるようになったら老人、オンブジジイだ。そうなったら恋もできない。相手に寄り掛かったら続かない」と考えている。

F さんにとっての「老人」とは、生活が子どもや他の人々に依存する存在である。異性とのセクシュアルな関係（「恋」）をする資格の有無は、自立／依存と結びついている。F さんは、年齢規範をすり抜けながら、男性アイデンティティを再構築するための異性関係を手に入れるための戦略を語っている。また、F さんの、セクシュアルな関係を結んだ女性の人生に「責任を持つ」という語りは、男性が経済的主導権をとることを意味している。F さんの理想とする異性関係は、自分より経済力の低い女性である。特定の異性を保護すること

が男性の面目を維持し、男性というアイデンティティの再構築に繋がっていると考えられる。

マスメディアからは、社会規範をまなざしとして受け取っている。「80歳くらいの男性が30代の女性に何千万と取られた詐欺事件がありましたよね。あれから独り身の老人はみんな寂しいんだってという視線を感じます」。しかし、この事件について、Fさんはこう捉えている。「男なら仕方がないことでしょう。若い女性だからっていうのではないんです。僕みたいにこんな体（外見）になった老人に言い寄る女性なんて本当にいませんよ。だから、どんなにデブでブスでもフラツとなってしまいうんですよ、きっと」。「誰にも誘われないより、騙される方が随分マシです。騙されている間は本気で愛するでしょうから」。

Fさんの年代では「もう彼女との結婚は望めない状況にある」と婚姻を諦めているので、「カップルとして仲良くしていきたい」と考えている。「カップルにセックスは必要で、愛情を伝えるためには、言葉とボディータッチの両方を惜しみなく与えあうことが大事なんです」と、Fさん流の作法が示された。他にも、「車のドアの開け閉めをしてあげたり、車道側を歩かせないように気を付けたり、ベッドの明かりを暗めにしたり、洋服や化粧品を一日一回はほめるとか、いろいろやっています」。これらを女性が喜ぶと考える根拠は、「どの雑誌にも載っている」ということであった。

さらに、「僕は家事も一通りこなせるし、お弁当作って映画やドライブに持っていきます。今、弁当男子とか何とか流行ってるでしょう、その走りです」、「バブルの頃に流行ったアッシー君、メッシー君もやりましたよ。（雑誌の）ハナコもポパイも熟読していました」というFさんは、マスメディアから、流行も次々に取り入れて男らしさを実践する姿勢を維持している。

このように、Fさんは、60代でありながらもなおセクシュアルな関係を渴望する詐欺事件の被害者と自身を重ね合わせながら、高齢男性のセクシュアリティの不自由さを筆者に示している。また、雑誌に登場した男らしさに関する記事を示しながら、Fさんはかつての若かった頃の自分と、現在の自分との連続性を語ろうとしている。つまり、外見では自分は「老人」とみなされ、相手にされないこともあるにもかかわらず、自分自身はまだまだ今まで（若い頃から）の男らしさを維持していると考えていることが、外見と内面の葛藤を生じさせているように思われる。

時折Fさんたちは、独身同士なのに堂々と付き合えない不満を感じることもあるが、今後も長く付き合っていきたいので我慢しようと考えている。「あの孤独な時期にはもう戻りたくないから、彼女を大事にしたいと思っています。新しい出会いは少ないと思いますから」。

このように現実には高齢であることを認識し、さらにFさんは若い男女を参照することで自らを「大人」と差異化していく。恋愛関係を渴望したFさんが、なかなか一步を踏み出せなかったのは「分別」をつけねばならない年齢にあり、失敗した時には「若気の至りじゃ済まされない」と考えていたからである。しかしながら、「高校生じゃないんだから」



高齢男性の性的行動に「他人からとやかく言われる筋合いはない」と感じている。「大の大人の（男女の）つきあいにセックスは当然」であるというのがFさんの考え方である。

社会的活動やサークル活動においても、高齢者であることの認識が語られる。「分別がつく男」や「身体能力の高い男」が「リーダーとか企画とか」を担う主導的立場に据えられることが多い。「口だけで指示しても誰もついてきません。だから、率先して動ける男にその役が回ってきます」。Fさんはこの現象を次のように説明した。「職場では男同士、年功序列で年上を敬わないと外されたりしたんですが、退職してからの老人の集まりではそんなこと言っていたら前に進めないんです」。

経済力については、デートの支払いはすべてFさんがする。「永年勤め上げた」Fさんの年金額<sup>22</sup>は、彼女よりもずいぶん多いからである。「金の切れ目が縁の切れ目にならないよう、彼女との付き合いを出来るだけ長くしたいので、僕はそうしています」。そして、現代の「すぐに転職をする今の男たち」の「弱さ」を嘆き、「嫌なことがあっても一つのことを続けること」が大切であるという人生訓を語った。経済力が、女性との関係を続けるための重要な要素となっており、また若い世代の男性と男らしさの優劣をつける要素としても語られている。

Fさんは、労働社会にある男の作法と、高齢社会にある男性の作法が異なることを示している。職場での年齢規範では絶対的とも感じられた年長者の存在が高齢社会ではお荷物のような扱いをうける年長者の姿を目の当たりにしている。また、恋愛についても年齢規範があることを実感しており、若い男性に許される行為が高齢男性には許されないと感じた経験を語っている。

#### 4) 考察

本節でも第1節と同様に、①高齢男性がもつ男らしさの概念とセクシュアリティ、②高齢期におけるセクシュアリティの位置づけと、③現在のパートナーとの関係性の意味に分け、考察する。

##### ①高齢男性がもつ男らしさの概念とセクシュアリティ

妻が健在だった頃の男らしさについての語りでは、インフォーマントの3人は、若い頃から実践しようとしてきた理想の男性像に近い自分を示している。妻との関係は身体的にセクシュアルであると同時に情緒的なもので、非常に親密であった。それに加えて、男性が社会的・セクシュアルに女性よりも能動的な立場にいることを好ましく思っている。

しかし、妻を亡くした時にそれらの関係性が全て崩壊してしまい、喪失経験が示されている。この時に経験した、社会や異性と切り離された感覚を「見かけも気にしない、誰と

---

<sup>22</sup> 男性側の経済支援は、高齢期の異性交際には不可欠であるようだ。厚生労働省年金局(2009)によると、遺族(寡婦)年金は夫が受給する額の四分の三の額、男性の平均受給月額が20万円以下だが、Fさんの年金額は月50万円を超える。

も話したくない、どこにも出かけたくない気分」と表現する E さんの語りから、家庭外の社会関係の形成についても、彼らが異性との親密なセクシュアルな関係を基礎としていることが理解される。

そこで、社会関係を何とか再構築するために新たなパートナーを探し始めるのだが、年齢規範が彼らの邪魔をして苦勞をする。

ここでいう年齢規範とは、性的行動には年齢にふさわしい態度があるという考え方をさす。「高校生じゃない」、「大人の男なんだから」という F さんの言葉は、高齢男性といえども性的行動をとることは、当然のことであるという主張である。一方、D さんの「エロジジイ」、E さんの「惚れた、はれた、の年じゃない」、「恋愛なんてする年じゃない」、「成長しないジジババ」という言葉は、年齢が高すぎるのが性的行動の抑制理由となっていることを示している。

そうした年齢規範を克服する戦略として、高齢者が出入りしてもおかしくない場所で異性との出会いを探し、外見を若く装う、年齢を隠すなどの方法がとられた。

さらに、ジェンダー規範と年齢規範の齟齬をきたさないために、体力や容姿の衰えに直面しながらも、健康食品を摂取しながら強い肉体を維持し、若い頃に男らしさの表現であった車のドアの開け閉めや弁当作り等々を続けることによって、円滑な人間関係を保つ努力を行っている。彼らは、男らしさを男性のセクシュアルな力と、経済的な力を含めて女性を庇護する力として語っており、これらを前提とした異性との関係が、社会的立場の結節点になるのである。

## ②高齢期におけるセクシュアリティの位置づけ

インフォーマントの 3 人は、セクシュアルな活動の重要性について、「温もりが欲しい」という欲求があること、「セックスは彼女との関係性を深くする」と実感していることを語っている。それらは、妻との長年の生活で培われた実感であり、要求である。

したがって、彼らはセクシュアルな能力のみを問題にしているのではないように思う。インフォーマントたちにとって異性と触れ合う性交という行為は、自分が自分であることを自他ともに補償する大切な実践で、単に性欲を解消するためではなかった。もしそうであれば、AV や風俗店の利用で解決できるはずであるが、そうではないということが示されている。

それは、インフォーマントたちが 3 名共に筆者に示したメディア報道の老人についての語りの部分の前後にあらわれている。E さんの語りを例に見てみたい。

E さんは、高校生の足を触った破廉恥老人を非難しつつ、バーコード老人を擁護している。何がこの対比を正当化しているのだろう。E さんは自らのセクシュアルな欲求を肯定しながらも、年齢規範を内面化していると思われる。バーコード老人を例に、年齢規範に対抗する老人の行動を擁護する一方、破廉恥老人が、年齢規範の存在すら知らないか、知っていたとしてもそれを無視する社会性を欠いた老人であることを、E さんは非難しているのでは

ないだろうか。

また、Eさんは自分の欲求を単なる身体的欲求としてではなく、異性との情緒的な関係と不可分なものとして捉えている。破廉恥老人の行動には関係の情緒性はみじんもなく、Eさんの表出する欲求との違いが主張されている。

このように、年齢規範を無視する社会性を欠いた老人や、セクシュアルな関係に情緒性を欠落させて捉える老人とEさん自身を差異化することによって、Eさんの態度は正当化されていると思われる。

Dさんの事例の看護師の体に触れる老人、Fさんの事例の詐欺にあった老人も同様に、年齢規範を無視した行動、情緒性のない欲求が問題視されている。これらのことから、セクシュアルな関係は、情緒的な関係、社会的関係と密接に関係しており、切り離すことはできないと考えられているように筆者は思うのである。

そして、インフォーマントたちのジェンダー・アイデンティティの中核には、特定の女性とのセクシュアルな・情緒的なつながりがあるように思える。3名の男性は、妻が存命の頃には、妻が、プライベートでは家族、公的には職場の人間関係を維持するかなめになっていたと語っている。妻を失うことによって、それまでの社会的関係性も崩壊してしまったので、その関係性を再構築するために新たなセクシュアルで情緒的なつながりをもつことを望んだのだと考えられる。

パートナー獲得に乗り出す行為を挑戦、冒険と彼らが捉えるのは、それが年齢規範に反しているからで、年齢規範に反してまでもセクシュアルなパートナーを得なければ、彼らは自分の男性アイデンティティを再建できずにいたと考えられ、そのまま落ち込んだ生活を続ける可能性に恐怖を感じたのだ。

しかし、ようやく得ることのできたパートナーとの関係性について考察してみると、妻を亡くした高齢男性の新たな異性関係は公開すべきではないという態度が見られ、また二人の関係を維持するための経済力の優位が見られる。これらは、女性に対して支配権を握ることに繋がっているのではないか。これまでにインフォーマントたちが構築してきた社会的関係において、彼らが支配権を持ちやすい社会的立場にいたことが、再構築する関係性にもそれを望むことになっているのではないかと思われる。

インフォーマントたちは特定の異性との性交を実現するために、男らしさを提示しなければならなかった。経済力や強い肉体、強い意志、博識など、これらの男らしさを評価された時に、性交は成功する。インフォーマントたちが性交を男の完成形のように語るのは、彼らの男らしさを承認された事実を明らかにするからでもあると考えられる。

すなわち、セクシュアリティは、彼らの男らしさを証明するために利用されるのである。インフォーマントたちは、年齢規範という障害に直面して、男性アイデンティティの提示が不可能になっているのだが、セクシュアルな関係と経済的な支配を通して、親密圏において男性のアイデンティティを実現しようとしている。

また、インタビューにおいて、高齢男性がアイデンティティの問題だとするこうしたセ

クシュアリティは、社会の側から逸脱行動と関連付けられているのではないかという不安が示された。どの年齢においても、男性の活発な性的行動は逸脱として捉えられることがあるが、高齢男性は特にそうであることを彼らは危惧している。マスメディアによる報道が、彼らにとって、その逸脱性の証明となる。マスメディアを参照しながらの言説では、加齢による老化は、自己管理能力の欠如と関連付けて捉えられる傾向があり、高齢男性がクシュアリティをもつ存在として許可されるためには、その能力が備わっていることを示す必要性も示された。

インフォーマントたちのジェンダー・アイデンティティの中心には、人生において獲得してきたセクシュアルな関係の持ち方や親密圏の形成方法、コミュニケーション技術を親密な女性に評価されてきたという自信があると考えられる。それは、性機能低下や年齢差別的な性の社会的抑圧にも抵抗できるほどに強く、個々のジェンダー・アイデンティティを支えていると思われる。そして、それらの自信を強化するために用いるのが、マスメディアによる男らしさの流行特集など、男女関係を円滑にするためや男らしさを高く評価されるための情報であるようだ。

### ③現在のパートナーとの関係性の意味：優位性と弱みを見せ合うこと

インフォーマントたちは妻を亡くしてから、孤独に耐えながら自立した生活を送ってきた。ここで求められたのは、異性との個人的な情緒関係であったことがインタビューで示されている。しかしながら欲していたのは二人だけの関係にとどまらず、その関係を通してのつながり、すなわち社会的な活動全般と密接に結びついているように思われる。彼らのこれまでの経験では、妻、女性を介した社会関係は良好であった。

本調査のインフォーマントたちは、複数の集団活動に参加しているため、友人数は非常に多い。それにもかかわらず「孤独だ」と感じたのは、彼らが求める対人関係が人数ではなく質であり、その質というのが特別な異性との情緒的な関係性であったからだと考えられる。そしてその異性関係の有無が、その他の社会的関係の情緒的満足にも影響すると思われる。

インフォーマントたちは、パートナーを得た現在も、父親役割、夫役割（亡き妻への供養）、親戚づきあいという従来の役割を継続している。交際の障害にもなる従来の人間関係が切断されないのは、パートナーとの愛情関係が維持されるかどうか確実ではないことや、2人の余命が予測できないことへの危機回避のためとも考えられる。

男らしさは弱者になることを拒否する傾向があるが、3名の男性は、パートナーに対しては弱い姿を開示している。弱さを見せて来なかった従来の人間関係の中で、自分を変化させることは難しいようだ。そしてこの関係は、相互の愛着や親密感情によってのみ繋がっているため、2人が健康で、家族に迷惑をかけないで生きる間の限定的な関係になることが予想されている。

以上から、高齢男性の考える男らしさとは、攻撃性や闘争心、筋肉質な身体などで規定

されるのではなく、様々な人間関係の維持や経済的な庇護に関係しており、その中核に、特定の女性とのセクシュアルな・情緒的なつながりがあるのではないかと思われる。そしてその異性関係に不可分なセクシュアルな能力の維持への努力が、社会との関係性を維持することになると考えられる。

また、本調査の事例では、セクシュアルな関係は、情緒的關係や社会的関係と密接不可分と考えられており、愛情や社会性を欠いた高齢男性の態度は、インフォーマントたちから非難の対象になっている。この社会性には年齢による区分があり、インフォーマントたちはその年齢規範にあわせようとする分別と、年齢にふさわしい男性としての振る舞いを身に着けていることが示された。

インフォーマントたちは、喪失感から回復しようと暗中模索する過程で、年齢規範と折り合いをつけつつそれまでの男性アイデンティティを再構築するということが、もっとも実現可能な方法であるという考えに至ったと思われる。

### 第3節 セクシュアリティというツール

以上、6名の高齢男性へのインタビューから、高齢男性は、セクシュアリティを自分の男らしく若々しいイメージを構築するためのツールとして使っていることが示された。セクシュアルな欲求を失っていないことや外見の若さを強調する高齢男性は、女性から若い男性と同等の扱いを受けることを期待していた。その根底には、セクシュアルな関係を結ぶことに積極的な姿勢を見せる男性は「男」として社会的価値を高め、親密圏において女性を支配する立場を維持することに繋がる、という考え方があるように思われる。

また、セクシュアリティは、女性との関係性を良好にするツールであるとも捉えられていた。女性と安定した関係にあるときにも、危機的關係にあるときにも、男性がセクシュアルな欲求をもつ「男」であることを女性に強調することが、関係性をより良好に変化させるきっかけとなると考えられていたようである。

インフォーマントたちがセクシュアリティを実践する行為に及ぶためには、一人の女性が必要となる。男女どちらか一方のセクシュアルな欲求が示されたとき、もう一方がそのメッセージを受け取り承諾すればセクシュアリティは実現される。そこで、男女間のセクシュアリティの不可視の作法として、誘われたら断らないという態度がふたりの親密性を高めるという考え方が示された。インフォーマントによると、この標準は男性にはとくに厳しく課されていると意識されている。

また、男性が考えるセクシュアリティの対象女性は二つに分類でき、それらの女性とは、それぞれ異なる関係になるという説明がなされた。婚姻関係にある夫婦のように長期的に同じ男女のセクシュアリティの関係と、出会ったばかりのまだ日が浅い男女のセクシュアルな関係である。高齢男性たちは、二種類の女性に対して、それぞれに異なるセクシュアリティの作法があると考えていた。

この点において、本調査対象となった死別経験者と離別経験者が求めるセクシュアリティ

いは異なっていた。死別男性は、元妻との間にあったような、日常生活の延長にあるような精神的に安定でき、いたわりあう様なセクシュアリティを望み、離別男性はナンパなどで知り合ったばかりの女性との間に発生すると思われる、衝動的で刺激的なセクシュアリティを望んでいた。

もし、精神的安寧を伴うセクシュアリティを入手したいのであれば、女性との間に相互の身体に責任を持ち合うなどの信頼感を関係性の基盤とすることが必須であろう。同じ生活空間のなかに日常的に存在する一人の女性とのセクシュアリティは、男性にとって刺激的ではないかもしれない。しかしながら、死別した高齢男性は安定した日常的に繰り返されるセクシュアルな関係を望んでいた。こうした関係性にある女性は、高齢男性の性機能の衰えにも伴走する可能性が高いと期待されていた。

一方、刺激的な楽しいセクシュアリティは、非日常的な関係性を、あくまで非日常性のままさらに親密にするために必要とされた。このようなセクシュアリティはとりわけ若い男性と同等に活発な機能が必要となると考えられ、機能維持のための厳しい自己管理が不可欠となる。自己管理だけではなく医療技術の導入が必要であったことが高齢男性の経験として語られ、経済的余裕がなければセクシュアリティにおいてその機能を失うという文脈が構築されている。

しかしながら、老化による性機能低下は回避できない。最終的には「諦めなければならぬ時」がくることに覚悟がなされていた。それは男性の頭髪の現象を例に語られた。男性にとって頭髪の現象は珍しい現象ではなく、多くの男性が悩みを抱えている問題であると捉えられているため、スキンヘッドが老化の事例として示されたのだと考えられる。決断する「その日」とは、自己の老化を全面的に受容し、「装う」ことを止める日、経済的に困窮し、身体の修理を行えなくなるような日を指していると思われる。高齢男性たちは、その日までは先進医療を利用し、身体機能を実年齢よりも若く維持する、真実の身体よりも若く見える身体を手に入れるための修理を怠らない決意がなされていると思われる。

戦後日本社会は正規雇用の既婚男性をモデルとした社会保障制度を構築し、男性は職場、家庭、学生時代の友人、ときには浮気相手というネットワークを複数もって種々の危機に対応してきた。しかしながら定年制度によって退職した男性は、職場のネットワークを失い、家庭や地域住人や別居親族への依存を高めることになっていた。これらのネットワークのなかで「男性」として生きてきた彼らは、定年退職と老いに直面しても、男性であることをやめるわけにはいかない。妻と死別した男性は家庭というネットワークを一つ減じてしまったことになり、夫婦家族制の最重要のパートナーを失ってしまった悲嘆と現実生活の不便を余儀なくされていた。その状況から脱出するため、妻の代わりとなる親密な他者を必要としていた。

一方、離別男性も職場ネットワークを失うことは死別退職者と同じなのだが、家庭というネットワークを最初から持たないため、死別男性と比較して悲嘆や生活の不便を感じる事が少ないようだ。弱みや悩みを共有することができる妻のような親密な他者としての

女性をそれほど希求しているわけではなかった。死別高齢男性と離別高齢男性では、女性への依存性がかなり異なっていることが示唆された。

また、離別男性は永遠に「青年」であるという意識を持っていた。聞き取り調査において青年としての発言をし、自分はまだ高齢者というカテゴリーに属していないということ強調した。一方、死別男性は高齢者であることを受容し、自らの老いを受容していた。その発言は子どもや孫との関係において確認され、今後さらに年老いていく身体や生活全般の不安を共有できる親密な他者を、妻の代わりとなる親密な女性を求めている。女性とのセクシュアルな関係が彼らの男らしさを証明し、またその男らしさは若い男性を規準とするものであることは両者に共通していたが、自らの若さすなわち男らしさを証明するための他者として若い女性を求める離別男性と、共に老いを重ねる存在として妻との人生を生きてきたゆえに老いを共に受容しあう女性を求める死別男性とは、大きく異なっていることが示唆された。

最後に本章の調査の限界として、本章のインフォーマント 6 名は、経済的に裕福で、退職前には高い職位にあったという社会的特徴をもった男性たちである。退職前に社会的に支配する側の立場におり、男らしさと社会的地位の達成を結び付けた考え方が、再構築するアイデンティティの基礎となる概念にも影響していると思われる。そのため、別の社会的立場を経験してきた人々には、また別の回復の模索があるのではないかと考える。今後の研究課題である。

## 第6章 ジェンダー・アイデンティティとセクシュアリティの関係性

### 第1節 高齢男性にとってのセクシュアリティ

本調査における高齢男性は、問題経験を個人の力によって軽減する方法を模索し、個々に戦略を企てていた。彼らは社会の高齢者に対する態度が変わることにはあまり期待をしておらず、高齢者全体の問題というよりは個人の問題としてその場しのぎの対処法を探し当てていた。セクシュアリティは個人の趣味や嗜好として捉えられる傾向があり、特に高齢男性のセクシュアリティは「もう必要ない」(Dさん)ものだと自他共に捉えられる傾向がみられた。高齢男性たちも、近所の住人からの恋愛に関心が高い高齢男性への奇異な視線を回避するために、「家事に困っている哀れな男性」を演じたり(Dさん)、「地区の役員を引き受け」人格者であることを強調したり(Eさん)、生活圏で関わる人間だけを対象として対処法をその都度編み出していた。

このような状況の根底には、セクシュアリティなど実現しなくても衣食住が充実していれば高齢者は基本的な生活が可能であると社会が考えていること、そして高齢男性たちが、社会の高齢者に対する態度を変えることを最初から諦めていることがある。前者は第2章でみたように高齢男性のセクシュアリティに関する先行研究の少なさや、男らしさが若さと結びつけられているという先行研究、第3章の雑誌記事での高齢男性への非難のまなざしから、後者は第4章と第5章のインタビューから見えてきたことである。

しかし生存することは衣食住さえ充足されれば良いというものではないように思う。生きる意義、目的を設定し、それらを周囲に認められてこそ「張り」(Eさん)がある毎日を生きることにつながるのではないか。

しかしながら、高齢男性たちは、男であることを承認されることを求めはするが、「もうお一人でも大丈夫ですね」といったような他者の認識の変更を要求しているわけではなかった。本調査のインフォーマントは誰も、問題経験を他者に伝えようとしたり社会問題として声をあげようとしたりした経験はなかった。むしろ、自分の認識を変更する努力をし、社会に自分が経験している問題が露呈しないような努力を積み重ねていた。彼ら高齢男性が問題を抱えたという経験は紛れもない事実であり、かつ、社会に知られてはならないと秘匿する必要性を感じさせられてもいる、このような高齢期の独身男性のセクシュアリティの問題を個人の問題経験ということで済ませてよいのだろうか。

また、インタビューから得られた興味深いこととして、男性が人生の中で独自に獲得した女性への対応方法のなかに、男性のセクシュアルな欲求や関心を女性に示すことによって女性の意思や感情を動かすこととなる行為があった。たとえば、それほど魅力的ではない女性にあたかもセクシュアルに関心を惹かれたような振りをすることが女性を自分に引きつけておくことになるというAさんの戦略がそれにあたる<sup>23</sup>。「僕くらいの年齢になった

<sup>23</sup> 高齢男性たちがセクシュアリティを「特定」の女性との親密性強化のツールとして使っているのであれば、マスメディアの言説にみられるような性衝動の管理能力を問われる必要性は、実



らセックスしたくてたまらないなんて有り得ない」と考えているAさんだが、交際相手を目の前にしたときには「相手を喜ばせるために」セクシュアルな関心が高まっている振りをして女性の機嫌を良好に保つという方法を示してくれた。男性が優位に立てるフィールドにおいて、Aさんは最大限にその立場を効果的に使い、女性の感情をコントロールしたのである。

このことから、セクシュアリティは高齢男性にとって、支配関係を実現するためのツールとして利用されることが分かる。「(男性と女性のあいだに生じる)性欲は、企みを十分に含む不正直なものである」(Haggerty 1999 : 31)。ハガティは、男性がセクシュアリティを用いることによって、男女間のエロティシズムな絆を審査したり、情緒的な関係を順調に育てていくことを企てたりすることがあると論じており、欲求は、男性が自由自在に操れるものとして捉えられている。自己の欲求を他者(女性)に誇示することによって、他者(女性)の欲求を操ろうとする技術と説明できよう。インフォーマントの高齢男性は、ハガティに類似した戦略を使っていたといえる。彼らにとってセクシュアリティを操作すべき理由は、老化によるセクシュアルな欲求の減少だけではなく、死別男性にみられるように弱みを見せ支え合うことのできる存在としての女性を獲得し、またインフォーマント 6名に共通するように自らの男性としての存在を承認する他者としてセクシュアルに親密な女性を必要としたのである。

反対に、女性が男性を操作するためにセクシュアルに挑発的な行動を仕掛けることも少なくない。メディアに報道された記事は、高齢男性に向けて、こういった女性の罠にかからないように注意喚起を行っていた。男性が、女性の「性的な企み」に振り回されることは、男性であれば避けられない悲しい本能で、むしろ男らしいがゆえに引っかかってしまう罠であると好意的に考えられている。

しかし、女性の「性的ではない企み」(金銭を目的とするなど)に引っかかることは男らしい行動であるとは評価されないという言説が見られた。雑誌記事に登場した体を張って純金を売りつける女性の企みに引っかかった高齢男性は、女性の挑発的な行為に自制心をなくしてしまうが、結果的にその女性と性交を行ったということで男性としての欲望を果たしたことが男らしいと評価され、この男性が陥った男性であるがゆえに仕方がない悲しい性であると締めくくられている(2011.6.11.週刊新潮)。

一方、同棲した若い女性に生活費を得られなくなった途端に厄介者扱いをされて捨てられてしまった男性の記事は、女性に全ての財産を没収されてしまった男性を男らしいとは評価しないうえに誰も参列しない葬儀の描写がなされ、孤独な死と関連付けて示されている(2001.12.11.週刊新潮)。第4章や第5章のインフォーマントのなかにも、女性が自分に近づくのは金銭目的ではないかと疑い、注意する姿勢が見られた。男性が男らしさを証明するために経済力を用いることの裏面として、このような悲惨さが構築される。

---

はそれほどないかもしれない。とすれば、高齢男性の管理能力の有無を語る言説が政治的に高齢男性のセクシュアリティを構築していると考えられる。今後の研究課題としたい。

これらの記事の比較すべき箇所は、女性からセクシュアルな異性を仕掛けられる男性であるとみなされていたかどうかという点にある。後者の記事は、親密な女性からも男性としての地位を与えられなくなったことが、最も哀れな現象であると表現されるのである。そのことから、社会がその男性を高齢者というカテゴリーに投入してしまったとしても、最も親密な他者（女性）が彼を男性であると承認することが男らしさの最後の砦であるとされているかのような印象を受ける<sup>24</sup>。

本調査の高齢男性たちは、セクシュアルな言葉は少なく、女性の身体に接触するという方法で好意を伝える傾向がみられた<sup>25</sup>。また、もっと親密になりたい場合にはセクシュアリティをそのツールとして使うという方法が有効であると考えられていた。男性のセクシュアリティの機能の高さや女性への関心の高さを示すこと、および、女性のセクシュアリティの魅力の高さが男性のセクシュアルな欲求を呼び起こしたというストーリーを、経済的裕福さや知識の豊かさなどを文脈にして仕立てることによって、男性は女性から好意的な関心を寄せることができたのである。

## 第2節 女性との親密性

本調査対象の男性たちは、大多数の人間に対しては個人的問題をパッシングしながらある特定の身近な他者には問題を共有することを求めている。高齢男性が経験した問題は、行動の制限を受けているような感覚に陥ることや、親密になりたいと感じる他者への接近を回避し自分の気持ちにストレートに反応してはならないと思わされる感覚に陥ったことであった。親しくなりたい女性と「3 駅先の」(D さん) 見知らぬ街で会わなければならぬと感じさせられた経験は、社会に個人の欲求を抑制される感覚を押し付けられたような経験であった。

先行研究のなかには、「男性が生涯をかけて女性に向ける性的でロマンティックな興味関心と行動は、男性の精神神経組織を発達させてきた」(Meyers 2001) とし、男性のセクシュアリティが男性の生物的進化をももたらしてきたほど男性にとって優先的な欲望であるとする説もある。それによれば、男性の性的行動は年齢によって 4 段階に分類され、高齢期は nonsexual な真の価値を求める時期だとされている。

しかしながら、本調査において高齢男性は nonsexual な価値など求めてはいないことが

---

<sup>24</sup> 近代主義的な精神分析的記述によると、性欲は人間の根源的な欲求であり、男女に自然に湧き上がる衝動のようなもので、ときにはその欲求を制御できないこともあるほどの強い衝動である(小此木他 2002)。これらの記述の違いから、性欲の取り扱われ方は一定ではないことがわかる。生得的な性欲を制御する困難さが、セクシュアリティの異常行動を誘発するという考え方もある。ここでいう性欲とは後者をさしている。高齢になるほど性欲が減退するとすれば、高齢男性を社会的に危険視する必要性も低下しよう。

<sup>25</sup> 男性は親密になりたい感情を伝達するときに、女性と同じ手段をとることを許されないジェンダーの規範があるといわれる(Chudacoff 1989)。このようなジェンダーがあるかどうかの検証は、高齢女性へのインタビューが必要で今後の課題である。

示された。それどころか、彼らの男性としての意識や女性に対する関心は若い時から何も変わっていないということが強調された（若い男性を劣位に位置づける差異化は行われるとしても）。彼らを苦しめることになった問題は、彼らに対する他者の視線が、高齢者に向ける視線にすり変わっていることに気づいた時点から始まっていた。つまり、年齢規範によって男性というジェンダーのカテゴリーから高齢者のカテゴリーに移されたことで、自他の認識にズレが生じている状態にあることが、高齢男性を苦しめることになったのだ。

Dさんは、妻と死別したあとも異性への関心を失ってはいないが、あえて他者にセクシュアルな関心が無いように振る舞い、異性の話題を避けるようにしていた。それは、Dさんが高齢者としての視線を向けられていることを自覚していたからであり、その視線の期待に応えるような行為を選択していたのである。

また、Cさん、Eさんをはじめ、男性たちは異性との出会いを求める際に、できるだけ若く装うことを重要視していた。服装、美容形成、植毛、あらゆる手段を使い、身体の価値を高める努力をしていた。それはやはり、他者が高齢者に向ける視線を回避するためであり、また、社会が若者に許可しているが高齢者には許可しない行動を手に入れるためであった。

男らしさの標準的基準は男性の行動の指針となっており、自分が女性とは異なることを示すために用いられることもある。男性が、男性の標準を満たしていないとみなされれば、彼は社会の病理として扱われてしまうことを男性たちは知っていた。しかしながら、男らしさの標準は現実の男性像よりも高い位置に設定されているため、男性は自分の限界に挑戦することを強いられてしまう（Kimmel 2008）。男性はより男らしい男性になるために、幼い頃から自分の限界を乗り越える努力を行っており、設定されたゴールを達成しようと試みるのが標準化されていると思われている。高齢期にもなお、その努力が継続されていることが明らかにされた。

Aさんは、女性から「男性としてダメだ」と評価されないように、性機能や筋力を維持する努力を怠っておらず、常に高い経済力や美しいルックスを女性に示すことができるように、分厚い財布を持ち、定期的に形成外科に通院するよう心がけていた。

高齢男性はそういった努力を怠らない彼自身に対する称賛を探し求めている。自己欲求に対して何者も介入しない、何者にも干渉されない生活を望みながら、しばしば社会的慣習や社会規範に反抗する行動を企てていた。そして、他者が彼を高く評価したかどうかを確かめたい願望があることが明らかになった。特に、親密な女性から得られる称賛は、男性たちの努力への最高の褒賞であった。

高齢男性たちにとって、内的なアイデンティティと彼らの外観を一致させることは、非常に重要な意味をもつことであった。高齢男性がその一致を達成するためには医療の手助けが必要であった。アイデンティティを作り上げるための一つのコンテンツとして、理想の身体を用意し、自分の理想と現実を一致させることが必要であると考えられていた。また、アイデンティティを安定させるために男性であることを承認する女性を獲得するには、

まず女性の関心を惹く必要がある。そして、そのために身体の不足を補う修理を行い、セクシュアルな魅力を高めなければならないと考えられていた。

同時に、彼らは日常的な地域社会の空間では高齢者を装わねばならないのである。それは自らが社会的に受け入れられて生きるためでもあり、願うとおりに他者に評価するよう仕向けるために、彼らは様々な戦略を打ち出していた。こういう人物だと思って欲しい特徴を前面に出して印象づけたり、理想のイメージとかけ離れた場所に出入りしないようにしたり、日常生活のあらゆる場面で意図的に演出がなされていた。たとえば、ご近所に「寂しい」「一人暮らし」であることを強調して、主婦たちから晩御飯のおかずの差し入れをもらったり、妻の仏壇に供えるための花を買うことを欠かさない姿を見せたりした D さんの場合は、このような行動をとる人物であることを印象づける行為が意図的になされていたのも、親密な女性との関係を守るためであった。

生得的な身体が生涯変化なく維持されることは不自然で不可能なことであり、また、ジェンダー・アイデンティティも性役割と強く結びつくことで永続性が確約されない不安定なものとならざるをえない。したがって、老化した身体の修理は、その場しのぎの、その場限りの対処としての意味しかもたないし、退職後の男性は就労している若い世代の男性と同じには振る舞えない。しかしながら、高齢男性は修理や努力の必要性をとくに熱心に語った。なぜなら、高齢男性の社会的行動の自由度を高めるためには、若い身体が必要であると考えられているからであり、自由に生きたければ高齢であることを見破られてはならないと考えられているからであった。

### 第3節 差異化

本調査においては、身体の修理が年齢差別を払拭する最大的手段となると考えられていることが明らかになった。人々は、相手の年齢によって異なる対応をする作法を身につけているということを、高齢男性たちは明らかにした。もし高齢者として扱われなくなれば、高齢者の身体的特徴を消去するか隠蔽する必要があると彼らは考えていた。

しかしながら、セクシュアリティにかかわる機能の老化は、親密な二者関係以外の人物には不可視である。他の人々にとっては無関心であることが多く、性機能の程度や性行為の頻度や親密な異性の存在を話題にすることは非常に少ない。そのため、筆者は調査を行う前には、セクシュアリティにかかわる機能の維持は、特別に親密なパートナーに対してのみなされていると考えていた。しかし、調査の結果、高齢男性が自己のセクシュアリティをより高く示したいと考えるのはパートナーに対してだけではなく、同年代の男性や自分よりも若い男性に対してもそうであることが示された。

外見の修理は、実年齢では高齢者集団に帰属するのに、その集団から自分だけ抜けるためのゴフマン的戦略と類似した手段である (Goffman 1959=1974)。本調査においても、若者に「なりすまし」、本当は高齢者なのに若いと思わせる補償努力がなされ、誰にも相手にされない高齢者だから一人じゃ寂しくて女性の肌のぬくもりが欲しいと「開き直り」、欲求

を果たしている。

こうした戦略が失敗に終わった場合には、自分より相対的に弱者とみなされる社会的カテゴリーに属する人たちの「価値剥奪」によって自らの社会的アイデンティティを相対的に高める差別化戦略が取られる。まず、「高校生」「若い男」「今の若者」「同世代の男より」「他の職業だった男より」「誰にも負けないくらい」「平均より」といった数々の表現から、彼らの差別化の対象は同じ男性カテゴリーであること、そのなかで同世代の男性たちと、かつて彼らもそうであった若い男性たちの両者であることが分かる。

また、一般的に男性の劣位にあると認識される傾向にある女性であるが、本調査のインフォーマントたちも、女性を庇護すべき存在であると捉えていた。インフォーマントたちが女性をセクシュアルに支配することで、高齢男性の社会的地位を上昇させる方向に向かう可能性は高まる。しかしながら、彼ら自身は、女性の価値を剥奪しようとしているのではなく、「喜ばせる」、「教えてあげる」、「ウンチクを聞かせてあげる」、「エッチしてあげる」、「ドアの開け閉めをしてあげる」などの思いやりによって、「共に」上昇しようとしているのだと説明した。

以上述べてきたように、インフォーマントの多くは、親密な女性に対しては若い男性としてセクシュアリティや男らしさを多めに見せるように振る舞い、まだ男性であることを示し、その他の者に対してはそれらを少なめに見せて老いを強調し、性的行動を卒業した中性的男性であること、孤独に耐える知恵をもつ年長者であること、枯れた老人で支援を求めているという態度を強調する傾向が見られた。

こういった戦略は目前の目的は達成しやすいが、高齢者というカテゴリー自体の劣位を受け入れる態度が差別を再生産するので、元来自分が帰属するカテゴリーに対する裏切り者となってしまう。高齢男性が男らしくないというステレオタイプは、高齢男性自らのこうした行動からも再生産されているのである。

#### 第4節 高齢男性の男らしさのチャート

セクシュアリティと同様に、男らしさにも不可視の社会規範があり、これについては各社会に年齢区分による達成チャートが用意されているようである。しかしながら、このチャートの終着地点は高齢期よりもかなり前に設定されており、すなわち、高齢男性の男らしさのチャートは存在しない。

しかし、チャートがないことは無法地帯であることを意味しない。高齢者だから何をしても許されるという特別な立場に昇格したわけではない。むしろ、男らしさの課題を達成できない不出来な男性として格が下げられているように見える。高齢男性たち自身が、彼らへの厳しい、見下されるような視線を感じた経験を語っている。たとえば、高齢であることを理由にグループのリーダー的存在になることを免除されることもあり、労働社会における年功序列の慣習との違いに驚く高齢男性もいた。男らしさは積極的な行動やリーダー格に就任することも高く評価するものであるため、高齢であることによって男らしさ

から遠ざけられる感覚を覚えたのであった。

しかしながら、一人の大人の男性として社会から責任を課される標準的な事柄は、高齢男性でも免除されない。社会において、大人の男性に課された第一の課題は経済的自立であると、高齢男性たちは捉えていた。親密な女性に対して「結婚して経済的にも力になる」(Dさん)ことは、男性が女性に示す最高の愛情であると考えられていた。経済社会から撤退した高齢男性だから金銭の支払いを滞らせても許されるというわけではない。

男らしさとして標準化された要素は、経済的自立だけではない。その他の男らしさの要素も高齢男性にもそのままスライドして課されていると思われる。身体的老化によってその標準のハードルを越えることが難しくなった高齢男性は、より一層の努力を強いられることになっている。たとえば、女性の重い荷物を持ってあげなかったという行動は否定的に評価される可能性が高いと考えて、荷物を持ち続ける高齢男性もいる。

社会的標準はある特定の制度と慣習を維持することと関連しており、意味、価値観、信念についての標準は、われわれの実践を方向づける力をもつ。男らしさの規範が指し示す標準を達成できる男性には何等かの報酬が用意されていると考えれば、高齢男性が男らしさの標準を達成したときの報酬は、「まだ高齢者ではない」、あるいは「高齢者のわりに男らしい」という評価であった。この評価を得た高齢男性は、社会から高齢者へのカテゴリー化によって疎外された感覚を減じ、若い男性のカテゴリーに所属している感覚を持つことを許される。

## 第5節 高齢男性のセクシュアリティと男らしさ

現代日本において、高齢者として扱われることは、人生の半ばで課せられるスティグマである。

高齢男性に課される年齢規範と男らしさの規範は相克しているため、高齢男性たちは何を最優先させるべきなのかを自ら決定することを余儀なくされていた。その選択が自らの社会的地位を揺るがすことになる場合、彼らの行動は隠蔽された。セクシュアリティと男らしさは、男性の社会的地位に影響を与えるものであるという認識があるため、高齢者というカテゴリーに入れられることを嫌い、男性であり続けることを選択するのであった。

このような選択は、なぜなされるのだろうか。高齢男性たちが、セクシュアルな欲求が「まだある」「まだ可能だ」と強調し、今なお男性であることを示すための行動は、すなわち社会の一員であることを示すことを目的とした行為であったと考えることができる。インフォーマントたちは、生物学的に男性であるということに留まらず、男性の職業人および家庭人としての人生に根差す性役割によって構築されたアイデンティティとして、自らを男性と捉えていた。その中核にあって重要な機能を果たしているのはセクシュアリティであり、よって男性にはセクシュアリティをコントロールする能力が必要で、そういった欲求がなくなれば社会から必要とされる男性ではなくなってしまい、その存在意義を失っ

てしまう。このような感覚をもった経験、あるいはその不安の経験が、その行為に至らしめた発端であった。

したがって、高齢男性にとってセクシュアリティを維持することは非常に重要な意味を持っていた。親密な女性やその他の人間関係においても、セクシュアリティを備えている男性であるということが、彼らとの関係性にも高齢男性のアイデンティティにも影響を与えていた。メディアにおいても「(セクシュアルな能力について) もう年だからと諦めること」(1998.7.24.週刊ポスト) だけは避けるようにアドバイスがなされている。本調査において、年齢を理由に女性との親密さ、自らのセクシュアリティと男らしさを手放さなければならぬ感覚を生じさせられた経験が語られたが、彼らは年齢を理由として行動や欲求の制限を受けなければならないことに納得していない。納得はできないが、年齢規範に正面切って対抗することは、自らの社会的地位を揺らがすことを意味する。そこで、年齢を偽ることや、秘密裏の行動を余儀なくされたのであった。これらの行為は、高齢期においても、セクシュアリティを充足させる活動が精神的な充足にも関与する重要な事項であることを示唆している<sup>26</sup>。

また、男らしさを備えていない男性もまた、社会において行動を制限される可能性を高め、社会に不必要な人間であるかのような扱いを受けると高齢男性は考えていた。そのため、男性として社会に存在し続けるためには、男らしさの標準をクリアする資質が必須であった。女性に対して「若い頃に学んだ男らしさのマナー」(Fさん) を今なお継続する努力が行われているのは、男性個々人が独自の男らしさを構築していることを示している。

また、インタビュー内のほとんどの時間、インフォーマントたちは自己を高齢者カテゴリーに帰属させずに、部外者として高齢男性を否定的に肯定的に語り、その語りの中に彼らの真の意識を挿入して表現した。ただし、寂しい、悔しい、という否定的な感情を語る場面では、実年齢である高齢者カテゴリーに自らを投入した。インタビューにおいて、彼らは複数のカテゴリーを使い分ける技術に長けているように筆者は感じた。

高齢男性たちは「あの年でまだ(そんな俗なことを考えているのか)」と言われることを嫌悪するが、「もうそんな年なのですか」と言われることは自慢できることであると好意的に捉えていた。外見から予測された年齢よりも実年齢が高かったとき、その発言がなされる。年齢を低く見られること、若さを保つことが重要なことであると認識されていたのは、単に身体組織維持に対する称賛に嬉々としているわけではなく、実年齢には制限を課される行動であるが、外見から予測された若い年齢に相応する行動制限のレベルに緩和されることを意味するからでもあった。

高齢になると他のどのような要因をもさしおいて「年齢」で判断され、その人が男であるか女であるか、健康であるか病気であるかといった特徴すら無視されがちである。しか

---

<sup>26</sup> 本調査のインフォーマントの女性にとっても、男性の存在意義は生殖という目的に限定されたものではなく、また、セクシュアリティに関する男らしさ以外の男性に特有の様々な事項を男性の魅力として捉えていた。社会にとっての男性の存在意義も同じことがいえるだろう。

しながら、高齢になるほど身体能力の個体差が顕著になり、そもそも人々は個々に多様である。年齢カテゴリーで高齢者を語るのではなく、個々の条件や状況を丁寧に見ていく必要性がある。

本研究によって明らかになったことは、現代の日本社会が高齢男性のセクシュアリティを全面的には肯定していないこと、高齢男性に求める一定の社会的態度があること、そうした社会に対して高齢男性側は高齢期になったからといって自己のセクシュアリティ意識をそれほど変化させていないこと、年齢規範として課せられる社会の理想像に抵抗する独自の戦略をもっていること、などである。高齢男性は、様々な自己を装い演出することによって、社会規範にそぐわない欲求を独自の方法で具現化しようと試みていた<sup>27</sup>。

また、男性はセクシュアリティと男らしさを密接に関連付けて捉えていることがわかった。そして、理想とする男らしさを完結させるために特別な女性の存在を希求していること、そういった女性を獲得するための独自の努力を行っていることが明らかになった。いかなる男らしさを女性にアピールするか、男性間ではいかなる競争が行われているか、その競争のためにどのような準備がなされているかなどが示された。

しかし、女性にとって、男性の存在意義は生殖という目的に限定されたものではなく、また、セクシュアリティに関する男らしさ以外の男性に特有の様々な事項を男性の魅力として捉えていた。社会にとっての男性の存在意義も同じことがいえるのではないだろうか。

男性の幸福は、親密な女性の存在とともに語られることが多かった。男性が女性との恋愛やセクシュアルな関係を追求するのは、心身の快樂だけを目的としているのではなく、男性自身の幸福な人生のために不可欠なものを追い求める真剣なもので、真摯な姿勢を感じさせられた。ジェンダー・アイデンティティには、男性自身のセクシュアリティ意識と、男性であることを承認する特別な女性の存在が大きく関与しており、したがって男性が女性を獲得する能力が、男として幸福な生活を実現させるためには必要と考えられていることが明らかになった。高齢男性が幸福の可能性を高めるために行っている日常の戦略も示された。それらを考察した結果、男らしさを失っていく、セクシュアリティへの関心はないに等しい、というステレオタイプが社会から一方的に押し付けられたものではなく、高齢男性側からも彼ら自身の戦略によって発信され再生産され続けていることが明らかになった。

とはいえ、男性のそれらの戦略のオーディエンスとなり重要な他者となる女性たちには、男性と異なる意見があることがわかった。さらに、いわば「舞台裏」(Goffman 1959=1974)をも共有する存在として配偶者を得たいと考える死別男性と、「舞台裏」を決して明かさず「表舞台」でのみ男性としての承認を得たいと考える離別男性とでは、セクシュアリティと男らしさの実践、そして老いの受容のあり方が大きく異なるように思われる。

---

<sup>27</sup> 高齢者というカテゴリーに入ってしまうと、高齢者同士の気まずさを感じるようになるだろう。お互いに隠すべき事情が何であるかを読み取ることができ、そのために他者に隠れている努力を理解できてしまうことによって、同類の人たちのそれらに気づかぬ振りをすることになり、また別の作法が必要となっていく。



## おわりに

本研究から明らかになったことは、①現代日本社会の性シナリオとして、社会が高齢男性のセクシュアリティを全面的に肯定しておらず、高齢男性に求める一定の抑圧的な社会的態度があること、②高齢男性自身は、高齢期になったからといって自己のセクシュアリティ意識をそれほど変化させていないこと、③高齢男性は社会規範に抵抗する独自の戦略として、様々な自己を装い演出することによって、社会規範にそぐわない欲求を彼らなりの独自の方法で具現化しようと試みていること、である。

これらについて、男らしさやセクシュアリティ研究においてこれまで軽視されがちであった高齢男性に焦点を当てて本人の意識を聞き取ったことにより、高齢男性が自らのセクシュアリティをどのように生きているかということ、その意味世界や様々な戦略として明らかにすることができた。とりわけ重要な知見として、男性がセクシュアリティと男らしさを密接に関連付けて捉えていること、そして、男らしさを完結させるために異性愛的なセクシュアリティの実践と、その対象として親密な女性の存在を希求していること、そういった女性を獲得するための独自の努力を行っていることが明らかになった。さらには、いかなる男らしさを女性にアピールするか、男性間ではいかなる競争が行われているか、その競争のためにどのような準備がなされているかなどが戦略として示された。高齢期に異性と新たに親密関係を築くためには、社会に対して偽りの行動をとる必要があると考えられており、個人的な問題として様々な対処がなされているが、どれも根本的に満足できる対処の仕方ではなかった。新しい生活様式を試みようとする個人に対して、社会はマスメディアや地域の人々、サークルの友人などを通して厳罰的な姿勢をみせる傾向がみられるからであった。

この考察結果から、異性愛的なセクシュアリティと性役割を強くジェンダー・アイデンティティに組み込んで生きてきた高齢男性にとっては、親密「財」としての女性との生活は、社会的セーフティネットの意味を含んでおり、男として男らしい人生を送るといふことと女性の存在は高い関係性をもっているといふことができる。そのため、男性として高く評価され女性を獲得するための能力は男性にとって大変重要なものとされ、彼らはその能力を高めるための努力を怠らないのである。

他方で、高齢男性たちは社会からの高齢男性についての抑圧的なステレオタイプに真向から逆らうのではなく、親密な女性との関係を近隣住民に隠す等の行いによって、結果として社会的なステレオタイプを高齢男性自身としても再生産し続けていることも明らかになった。

アイデンティティは、他者の承認を受け、他者と共有されることで保たれる。共有する記憶があれば、なお安定的に成立する。この意味で、高齢期を共に生きるパートナーを獲得することには、一つの大きな意味が見出される。死別や離別によってそれまでの人生の記憶を共有する他者を失うことは、親密なパートナーを失う上に自分の過去を喪失するこ

ともなる。

インフォーマントたちが記憶の共有者として女性を選んだのは、過去に経験した幸福な生活と類似したものを望み、過去の成功の経験が自信となっているため同じ形態の親密関係に安心したいがためである。すなわち、インフォーマントたちにとって、《高齢者になる前》の幸福は男性であることと不可分に経験されており、その標準を今なお追求したいと望んでいた。親密な女性との食事、会話、性行為、就寝などは、男性の幸福と密接に関連した位置におかれていたのである。

しかし、高齢男性たちが過去の成功経験に用いた方法は、彼らが若い男性のカテゴリーに帰属していた時に許可された作法であり、高齢期の現在には許可されず適用できない。セクシュアリティには年齢によって社会が定めた不可視の規範があるからである。加齢のために、彼ら自身の帰属カテゴリーが変更されてしまっているにもかかわらず、別カテゴリー所有の作法を用いようとしていることが、高齢男性の行動に対して社会的許可を与えられにくく、戦略や秘密が必要となるのである。

くわえて、離別を経験したインフォーマントにおいては、記憶の共有はさらに限られ、セクシュアルに親密となる女性に対しても戦略や秘密が必要とされる。妻との離別を経験した男性は、永遠の青年という気持ちを維持しながら、少し刺激的なイベントを共有できる親密な女性との楽しい非日常的な関係を求めていた。その関係を維持するために、結婚という制度を利用することも効果的であると考えられている。

他方、妻との死別を経験したインフォーマントは、長い年月のパートナーとの死別によって喪失の感覚を経験した高齢男性たちである。過去の浮気の過ちによって隣の芝が青くないことを学んだ男性も、亡き妻との貞節を守ってきた男性も、再び妻のように日常的に安定したセクシュアリティを介する親密な関係を求めていた。彼らが戦略や秘密、そして新たな記憶の共有者を欲することには、深い悲しみを乗り越え新たに生きる決意が伴っていることが示された。

残された研究課題として、第一に日本社会における社会規範の問題として、高齢男性のための性シナリオを用意すること、高齢男性のセクシュアリティ意識を尊重するための社会の態度や受け入れ方の具体策を講じる必要がある。3名の男子大学生を対象にジェンダー・アイデンティティの調査を行った多賀は、男性性（男らしさ）形成の過程をライフストーリーから捉え、Goffman のドラマトルギーを参考にしてアイデンティティの危機への対処法を分析した。その結果、個人的アイデンティティと整合しない規範に対して、距離を置く、自己改革、否定する、という対処をとる傾向にあることが明らかにされた（多賀 1996）。本研究では、高齢男性は年齢規範に戦略的に同調しつつ、相克する男らしさの規範を自己改革的に実践しようとしていた。このようなアイデンティティの危機を考えるにあたって、セクシュアリティが非常に重要な役割を果たすため、さらに事例を重ねていき、人々による乗り越え方や社会規範の変革の必要性を考えていくことが大切である。

しかし第二に、セクシュアリティの尊重という点からすれば、本論文で高齢男性の立場

から親密な宝物のように述べられた女性についても、また性別にかかわらず高齢者のセクシュアリティの多様性という観点からも、研究が必要である。とりわけ、第 4 章でみられた男女の大きな意識差や、第 5 章でみられた男性間の多様性を、さらに研究を重ねることによって豊かに捉えていくことができると考えられる。

第三に、セクシュアリティに深く関わる事が明らかとなったジェンダー・アイデンティティと性役割についてはその関係性をさらに研究する必要がある。特に日本では固定的な性役割（夫婦間の性別役割分業）が女性の貧困等の問題をもたらしており、高齢男女で再婚に対する意識の食い違いが明らかであった。固定的性役割を尊重・維持することが、将来的に人々のセクシュアリティを含む幸福をもたらすか、セクシュアリティのツール化や抑圧を産んでいないかどうかについて、性役割のありかたが日本と異なる他の国々と比較するなど、セクシュアリティ研究の視点から検討が必要である。

最後に、雑誌分析について他のメディア媒体を参照できなかったこと、インタビューとインタビューアの相互作用について、メタレベルの分析を行えなかったこと、インフォーマントたちが、退職前に収入も社会的地位も高かったという偏りがあることの限界、これらの点にも課題が残されている。特に最後の点は、男らしさのヘゲモニーとして重要な要素であることが指摘されているので（Connell 1995）、セクシュアリティ研究としてはさらに追究する必要がある。

独居の独身高齢男性の増加傾向が著しく、彼らへの生活支援が危ぶまれている今日であるが、配偶者や家族と同居する高齢者にとっても決して家族が庇護の場となっていない。かつて、家族はひとつの経済単位とみなされてきたが、高齢者が子ども家族からの支援を受けるにも物理的限界があるうえに、高齢者自身が子どもからの支援を辞退する傾向が見られる。戦後日本において、夫婦制家族の観念が普及した結果である。

そのため、インフォーマントの高齢男性は子どもたちと同居して老いるのではなく、一人で、あるいは自らの家族を再度結成して自立することを望んでおり、親密な女性を得るために、彼女たちに対して男性たちはセクシュアリティと男らしさを演出する必要性を感じていた。いわば外部の敵（孤独、病気、死など）から生き長らえるために、男女の相互依存関係が強化されることが望まれていたように思われる。

戦後日本社会は、かなり固定的な性役割やセクシュアリティ、そして抑圧的な年齢規範を人々に要請してきたように思われる。しかし、過去に蓄積されてきた自分への情報やイメージによってとらわれた過度に確定されたアイデンティティや安定しすぎるアイデンティティは、一生を通じた人間的成長を阻害し、社会において新たな試みを起こすことを阻むように思われる。

本研究によって、個人の欲求は人生の状況によって変化するもので、その変化とともに生きていく柔軟な思考を大切にすること、アイデンティティは過去のものとの整合性を欠いても良いという考え方が、個人の人生を豊かにする可能性があることを筆者は示唆された。特に高齢者という点から考えてみると、本研究のインフォーマントたちは、現代日本

社会が高齢男性であることを魅力的であると捉えていないと考えており、魅力的ではないとされているものを魅力的なものに変化させる努力を行っていたことが印象的だった。好奇心、感動する能力、変化する力、挑戦的ともいえる姿勢で人生を生きる彼らの選択に学ぶことは多い。

## 初出一覧

本書では既に刊行した論文の一部を改稿したうえで使用している箇所がある。それらの既発表論文は以下の通りである。

- ・「高齢男性の性シナリオの行方：『週刊新潮』および『週刊ポスト』1990－2012年の記事分析」『人間社会学研究収録』8, 115-114, 2012年.
- ・「高齢男性のセクシュアリティとジェンダー・アイデンティティの再構築：妻を失った3人の男性の事例から」『人間社会学研究収録』9, 155-179, 2013年.
- ・“Sexual Relationship of Elderly Males Who Have Lost Their Spouses”, *ANIMA, Indonesian Psychological Journal*, 25 (2) , 151-158, 2010.

## 参考文献

- 赤井成夫 1984 『老婚の時代』神戸新聞出版センター.
- 赤川学 1999 『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房.
- 赤川学 2006 「日本の身下相談・序説—近代日本における「性」の変容と隠蔽—」『社会科学研究』57 (3/4), 81-95, 東京大学社会科学研究所.
- 赤澤淳子・水上喜美子 2008 「地方居住者の社会的ネットワークと主観的幸福感」『仁愛大学研究紀要』7, 1-14.
- 朝日新聞朝刊全国版, 読売新聞朝刊全国版, 毎日新聞朝刊東京版 1998年1月3日 「おじいちゃんにも、セックスを」宝島社広告紙面.
- 浅野 仁 1982 「在宅障害老人の社会的孤立」『社会老年学』30, 155-168.
- 浅野千恵 1996 『女はなぜやせようとするのか—摂食障害とジェンダー』勁草書房.
- 安達正嗣 1999 『高齢期家族の社会学』世界思想社.
- 天野正子 2003 「生と老いの自画像—性差別のパラドックスを超えて」天野正子・木村涼子編『ジェンダーで学ぶ教育』世界思想社, 266-282.
- 荒木詳二 2006 「恋愛と恋愛結婚イデオロギーの誕生について—日欧比較文化の視点から」『群馬大学社会情報学部研究論集』13, 231-248.
- 荒木乳根子 1999 『在宅ケアで出会う高齢者の性』ホームヘルパーブックシリーズ, 中央法規出版.
- 荒木乳根子 2005 「中高年単身者のセクシュアリティ—男女別・年代別にみた全調査内容」『日本性科学会雑誌』23 (Supp. ), 6-32.
- アラン, G. 1989 *Friendship: Developing a Sociological Perspective*, Harvester Wheatsheaf. =1993『友情の社会学』仲村祥一・細辻桂子訳, 世界思想社.
- 池内裕美 2006 「喪失対象との継続的關係：形見の心的機能の検討を通して」『関西大学社会学部紀要』37 (2), 53-68.
- 池谷壽一 2001 「純潔教育に見る家族のセクシュアリティとジェンダー—純潔教育家族像から60年代家族へ—」『教育学研究』68 (3), 16-27.
- 石蔵文信 2011 『夫源病：こんなアタシに誰がした』阪大リーブル031 大阪大学出版.
- 石田英子 1994 「ジェンダー・スキーマの認知相関指標における妥当性の検証」『心理学研究』64, 417-425.
- 一番ヶ瀬康子編 2004 『高齢者心理学—リーディングス介護福祉学』建帛社.
- 伊藤公雄 2000 『男らしさの行方』新曜社.
- 伊藤裕子 2001 「青年期女子の性同一性の発達—自尊感情、身体満足度との関連から—」『教育心理学研究』49, 458-468.
- 井上勝也・荒木乳根子・大川一郎 1991 「老年期のセクシュアリティに関する研究」『老年社会科学』13, 145-161.

- 伊福麻希・徳田智代 2008 「青年に対する恋愛依存傾向尺度の再構成と信頼性・妥当性の検討」『久留米大学心理学研究』7, 61-67.
- 岩上真珠 2013 『ライフコースとジェンダーで読む家族』第3版, 有斐閣.
- ウィークス, J. 1996 『セクシュアリティ』上野千鶴子監訳, 赤川学解説, 河出書房新社.
- 上野千鶴子 1998 『女ざらい ニッポンのミソジニー』紀伊國屋書店.
- 上野千鶴子 2009 『男おひとりさま道』法権.
- M. R. C.: メディア・リサーチ・センター 2012 『雑誌新聞総かたろぐ 2012 年度版』メディア・リサーチ・センター株式会社,  
<http://www.media-res.net/search/msearch.cgi?index=&config=&set>.
- 大沢真理 1993 『企業中心社会を超えて』日本経済評論社.
- 岡林秀樹・杉沢秀博 1999 「高齢者のソーシャル・サポートと生活満足度に関する縦断研究」『高齢者の生活と健康に関する縦断的・比較文化的研究』東京都老人総合研究所.
- 岡村清子 1992a 「高齢期における配偶者との死別—死別後の家族生活の変化と適応—」『社会老年学』36, 3-14.
- 岡村清子 1992b 「団地居住老人の余暇活動」『社会老年学』33, 3-13, 東京都老人総合研究所, 東京大学出版会.
- 小此木啓吾 1983 『家庭のない家族の時代』ABC出版.
- 小此木啓吾・北山修編 2002 『精神分析事典』岩崎学術出版社.
- 小塩真司 2000 「青年の自己愛傾向と異性関係—異性に対する態度、恋愛関係、恋愛経験に着目して—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学)』47, 103-116.
- 落合恵美子 2004 『21世紀家族へ 家族の戦後体制の見かた・超えかた』新版, 有斐閣.
- 介護・医療・予防研究会編 2000 『高齢者を知る辞典』厚生科学研究所.
- 春日井典子 2003 「配偶者間会ごと家族ダイナミクス—介護者の語りをとおして—」『甲南女子大学研究紀要 人間科学編』39, 39-48.
- 片多順 2004 「老いの人類学」研究史『老いの人類学』青柳まち子編, 223-241.
- 金子勇 1987 「都市高齢者のネットワーク構造」『社会学評論』38, 336-350.
- 金子善彦 1987 『老人虐待』星和書店.
- 金水敏 2004 『ヴァーチャル日本語役割後の謎』岩波書店.
- 河合千恵子・下仲順子 1991 「老年期における家族—老人とその配偶者、子世代、孫世代の対人関係についての心理学的アプローチ」『社会老年学』31, 12-21, 東京都老人総合研究所編, 東京大学出版会.
- 河合克義 1996 「大都市におけるひとり暮らし高齢者の生活と社会的孤立問題」『賃金と社会保障』1176, 28-48.

- 河合克義 2002 「大都市における高齢者の社会的孤立と社会保障・社会福祉の課題；東京都港区のひとり暮らし高齢者の生活実態を中心に」『社会政策学会誌』7, 118-131.
- 河合克義 2006 『港区ひとり暮らし高齢者の生活実態調査報告—第一次調査の概要—』東京都港区社会福祉協議会.
- 河合克義・菅野道生 2007 「港区におけるひとり暮らし高齢者の生活と社会的孤立」『賃金と保障』1432, 4-35.
- 菊池章夫・堀毛一也 1994 『社会的スキルの心理学』川島書店.
- 北原香緒里・松島公望・高木秀明 2008 「恋愛関係が大学生のアイデンティティ発達に及ぼす影響」『横浜国立大学教育人間科学部紀要』1, 教育科学 10, 91-114.
- ギルモア, D. 1990 *Manhood in the making: cultural concepts of masculinity*, New Haven & London: Yale University Press.=1994『男らしさの人類学』前田俊子訳, 春秋社.
- キンゼイ, A 1948 *Sexual Behavior in the Human Male*.=1950『人間に於ける男性の性行為』永井潜訳, コスモポリタン社.
- キンゼイ, A 1953 *Sexual Behavior in the Human Female*.=1955『人間に於ける女性の性行為』朝井新一訳, コスモポリタン社.
- 工藤力・西川正之 1983 「孤独感に関する研究(1)」, *The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 22(2), 99-108.
- 経済協力開発機構(OECD)編 2006 『図表で見る世界の社会問題 OECD 社会政策指標—貧困・不平等・社会的排除の国際比較』高木郁郎監訳, 麻生裕子訳, 明石書店.  
=Organization for Economic Co-operation and Development (OECD) 2005 *Society at a glance: OECD Social Indicators 2005 Editions*, OECD.
- 厚生省 HP 1940 『人口問題研究』第1巻第3号彙報「厚生省の優良多子家庭表彰並附帯調査」73-74 <http://www.ipss.go.jp/syoushika/bunken/data/pdf/14143809.pdf>
- 厚生省 1980~2000『昭和55年版~平成12年版厚生白書』  
<http://www1.mhlw.go.jp/wp/>
- 厚生省社会局 1973 『昭和49年版厚生白書』厚生省.  
<http://www.mhlw.go.jp/wpdocs/hpaz197401/body.html>.
- 厚生労働省 2009 『平成21年国民生活基礎調査』厚生労働省大臣官房統計情報部社会統計課国民生活基礎調査室,  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa09/index.html>.
- 小窪輝吉・高橋信行・田畑洋一 1998 「過疎地における高齢者の孤独感と個人的、社会的特性との関連—健康状態、対人的ネットワーク、社会参加との関連を中心に」『鹿児島経済大学社会学部論集』17(3), 1-20.
- 国立社会保障・人口問題研究所 2003 『第三回全国家庭動向調査—結果の概要—』  
<http://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ3/NSFJ2003.pdf>.



- 国立社会保障・人口問題研究所編 2014 『人口の動向 日本と世界—人口統計資料集』厚生労働統計協会.
- 小玉亮子 2004 「今、なぜマスキュリニティ/男性性の歴史か」小玉亮子編『現代のエスプリ (特集 マスキュリニティ/男性性の歴史)』446, 25-35, 至文堂.
- 後藤昌彦・山崎治子・飯村しのぶ・松坂裕子・菊池弘明 1991 「都市における高齢者の社会的孤立」『高齢者問題研究』7, 73-90.
- 小松秀雄 2002 「現代社会におけるエイジズムとジェンダー」『女性学評論』16, 23-42.
- コマロフスキー, M. 1984[1976] 『男らしさのジレンマ—性別役割の変化に戸惑う大学生の悩み』池上千寿子・福井浅子訳, 家政教育社.
- 古谷野亘 1992 「団地老人におけるモラルと社会関係—性と配偶者の有無の調節効果」『社会老年学』35, 3-9, 東京都老人総合研究所編, 東京大学出版会.
- コンネル, R. W. 2000[1995] 『ジェンダー学を学ぶ人のために』日本ジェンダー学会編, 富士谷あつ子・伊藤公雄監修 世界思想社.
- 斎藤雅成 2006 「高齢者の社会的孤立のライフコース的要因に関する事例分析—『累積的な有利・不利』からみた予備的考察」『安田こころの健康財団研究助成論文』42, 219-228.
- 斎藤雅成 2007 「高齢者の社会的孤立に関する類型分析—事例調査による予備的研究」『日本の地域福祉』20, 78-86.
- 佐伯啓思 2004 『自由とは何か』講談社現代新書.
- 笹谷春美 1994 「ジェンダーとソーシャル・ネットワーク—旧産炭地と大都市居住の70歳男女に関する実証的研究」(財)シニアプラン研究機構『平成5年度シニアプラン公募研究』117-138.
- 笹谷春美 2000 「高齢者のネットワークモデルとソーシャル・サポートに関する研究—大都市札幌高齢男女の時系列調査(8年間)の分析」『高齢期における活動的生活維持のためのサポート・ネットワークの役割に関する研究』平成12年度厚生科学研究費補助金(長寿科学総合事業)報告, 66-90.
- 笹谷春美 2003 「日本の高齢者のソーシャル・ネットワークとサポート・ネットワーク—文献的考察」『北海道教育大学紀要』54(1) 61-76.
- 佐藤郁哉 2008 『実践質的データ分析入門 QDAソフトを活用する』新曜社.
- 佐藤(佐久間)りか 2007 「視覚情報とセクシュアリティ—視覚障害者の性概念形成過程に学ぶ—」『女性学研究』大阪女子大学女性学研究資料室論集14, 52-76.
- 柴田博 1985 『間違いだらけの老人像—俗説とその科学』川島書店.
- 柴田博・芳賀博・長田久雄・古谷野亘編 1993 『老年学入門』川島書店.
- 下仲順子・中里克治・河合千恵子 1990 「老年期における性役割と心理的適応」『社会老年学』31, 3-11, 東京都老人総合研究所編, 東京大学出版会.
- 新潮社 2014 <http://www.shinchosha.co.jp/shukanshincho/about/>

- 杉井潤子・本村汎 1992 「老年期におけるソーシャル・ネットワークの研究—性別および役割関与との関連において」『大阪市立大学生活科学部紀要』40 239-253.
- スコット, J. W. 1992 『ジェンダーと歴史学』荻野美穂訳, 平凡社.
- 須長史生 1999 『ハゲを生きる—外見と男らしさの社会学』勁草書房.
- 関村(木村)オリエ 2009 「郊外コミュニティにおける定年退職男性の“男性性”再構築: ライフストーリーからの考察」『人間文化創成科学論叢』12, 335-344, お茶の水大学.
- 総務省統計局 2005 『平成17年国勢調査』<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2005/>
- 総務庁 1996 『高齢者の生活と意識第4回国際比較調査結果報告』総務庁長官官房高齢社会対策室.
- 総務庁 1997 『高齢者の生活と意識—第4回国際比較調査結果報告書』中央法規出版 100-104.
- 副田義也 1986 『老いの発見2老いのパラダイム』岩波書店.
- 袖井孝子・都築佳代 1985 「定年退職後の結婚満足度」『社会老年学』22, 63-77.
- 袖井孝子 1993 「共働きと老親介護」袖井孝子・岡村清子・長津美代子・三善勝代『共働き家族』家政教育社.
- 第17回世界性科学会 2005 17th World Congress of Sexology, 2005. Montreal Declaration. “Sexual Health for the Millennium,” [http://www.jase.or.jp/pdf/montreal\\_Declaration\\_b4.pdf](http://www.jase.or.jp/pdf/montreal_Declaration_b4.pdf).
- 大工原秀子 1979 『老年期の性』ミネルヴァ書房.
- 大工原秀子 1991 『性抜きに老後は語れない』ミネルヴァ書房.
- タウンゼント, P. 1974[1957] 『居宅老人の生活と親族もう—戦後東ロンドンにおける実証的研究』山室周平監訳, 垣内出版.
- 高橋久美子 1980 「定年退職後の夫婦適応」『社会老年学』13, 21-35.
- 高橋久美子 1983 「老年期の性規範—青年および中年夫婦の老人観の分析」『家政学会誌』34(11), 64-73.
- 高橋久美子 1984 「老年期の性—老人の性意識と再婚意思の分析」『家政学会誌』35(4), 276-286.
- 高橋久美子 1985 「老年期における配偶者選択」『福岡教育大学紀要』35(5), 125-136.
- 高橋久美子 1989 「老年期における配偶者喪失—死別への準備と適応」『家政学会誌』40(5), 1-11.
- 高橋久美子 1990 「老年期における配偶者喪失後の生活適応」『福岡教育大学紀要』39(5), 123-136.
- 高橋正人 1991 「老夫婦の配偶者満足度—東京都内の団地調査から」『社会老年学』33, 15-25, 東京都老人総合研究所.
- 多賀太 1996 「青年期の男性性形成に関する一考察—アイデンティティ危機を体験した大学生の事例から」『教育社会学研究』58, 47-64.

- 多賀太 2001 『男性のジェンダー形成 男らしさの揺らぎの中で』東洋館出版社。
- 宝島社 1998 『別冊宝島』1502巻, 宝島社。
- 鑪幹八郎 2002 「ライフサイクルにおける男と女」『鑪幹八郎著作集 I アイデンティティとライフサイクル論』ナカニシヤ出版, 235-254。
- 玉井和志 1990 「団地居住老人の社会的ネットワーク」『社会老年学』30 29-39。
- 玉野和志・前田大作他 1989 「日本の高齢者の社会的ネットワークについて」『社会老年学』30,27-36。
- 玉野和志 1991 「団地老人の社会的ネットワーク」『社会老年学』32, 29-39, 東京都老人総合研究所。
- 丹原恒則 2004 「道徳的な男性性構築の課題 -福沢諭吉の<ヂグニチ><愛><敬><恕>論」『現代のエスプリ (特集 マスキュリニティ/男性性の歴史)』446, 128-140。
- 鶴田幸恵 2009 『性同一性障害のエスノグラフィー-性現象の社会学-』ハーベスト社。
- 東京消防庁 2010 『平成 22 年版火災と日常生活事故のデータから見る高齢者の実態』東京消防庁防災生活安全課,  
[http://www.tfd.metro.tokyo.jp/hp-seianka/2008-1940-12/2010\\_01.pdf#search](http://www.tfd.metro.tokyo.jp/hp-seianka/2008-1940-12/2010_01.pdf#search).
- 東京都福祉保健局東京都監察医務院 2013 「東京都 23 区における孤独死統計 (平成 25 年)」  
<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/kansatsu/kodokusi25.html>.
- 富重健一 1993 「青年期における「異性不安」研究の現状と今後の課題」『東京大学教育学部紀要』339, 97-105。
- 内閣府 1999-2012 『平成 9 年版～24 年版高齢社会白書』内閣府共生社会政策統括官高齢社会対策,  
[http://www.mhlw.go.jp/toukei\\_hakusho/hakusho/](http://www.mhlw.go.jp/toukei_hakusho/hakusho/)
- 内閣府 2013 『平成 25 年版自殺対策白書』共生社会政策統括官自殺対策,  
<http://www8.cao.go.jp/jisatsutaisaku/whitepaper/w-2013/html/index.html>.
- 直井道子 1990 「都市居住高齢者の幸福感—家族・親族・友人の果たす役割」『総合都市研究』39, 149-159, 東京都立大学都市研究所。
- 中川勝男 1982 「国家政策と地域住民の生活講座像の変化」, 布施鉄治, 鎌田とし子, 岩崎宏之編『日本社会の社会科学的分析』アカデミア出版会, 49-50。
- 中根千枝 1977 『家族を中心にした人間関係』講談社学術文庫。
- 西倉実季 2009 『顔にあざのある女性たち—「問題経験の語り」の社会学』生活書院。
- 西村純一 1993 「定年退職期の社会的ネットワークの変化の認知に関連する要因の検討」『社会心理学研究』8 (2), 76-84。
- 日本健康心理学会編 1997 『健康心理学辞典』実務教育出版。
- 日本性科学会セクシュアリティ研究会 2007 『カラダと気持ち シングル版』三五館。
- 沼崎一郎 2001 「ミニスカートの文化記号学—〈男力主義〉による男性の差別化と抑圧—」『現代文明学研究』4, 297-310。
- ノッター, D. 2007 『純潔の近代—近代家族と親密性の比較社会学—』慶応義塾大学

出版会.

野々山久也 2007 『現代家族のパラダイム革新—直系制家族・夫婦制家族から合意制家族へ—』東京大学出版会.

野辺政雄 1999 「高齢者の社会的ネットワークとソーシャル・サポートの性別による違いについて」『社会学評論』50(3)、375-392.

則定百合子・斎藤誠一 2009 「老年期の孤独感と生活意識に関する研究」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』3(1)、101-106, 神戸大学.

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/81001690.pdf>.

パウエル, H. D. 2001 『<老い>をめぐる9つの誤解』久保儀明・檜崎靖人訳, 青土社.

パルモア, A 1995 『エイジズム』奥山正司訳, 法政大学出版社.

東優子 1996 「アメリカのセクシュアリティ:性的抑圧とは何か」『現代性教育研究月報』1996年2月号, 6-9.

東優子 2007 『日本の性娯楽施設・産業に関わる人々への支援・予防対策の開発に関する学際的研究』厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業 平成18年度総括・分担研究報告書.

東優子 2008 『日本の性娯楽施設・産業に関わる人々への支援・予防対策の開発に関する学際的研究』厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業 平成19年度総括・分担研究報告書.

平野順子 1998 「都市居住高齢者のソーシャル・サポート授受—家族類型別モラルへの影響」『家族社会学研究』10(2)、95-110.

平山尚 1985 『障害者の性と結婚 アメリカのセックス・カウンセリングから』ミネルヴァ書房.

福屋武人・浅井義弘・鶴沼秀行・戸沢純子 1993 「老年期の性意識・性行動に関する調査研究I」『川村学園女子大学研究紀要』4(2)、19-37.

福屋武人・鶴沼秀行 1996 「老年期の性意識・性行動に関する調査研究—韓国・台湾における調査及びドイツ・日本を含めた総括—」『川村学園女子大学研究紀要』7(1)、109-119.

福澤諭吉 1888 『男女交際論』慶應義塾出版社.

福島朋子 1995 「自立をめぐって」柏木恵子編『現代のエスプリ 女性の発達』331, 93-102, 至文堂.

フーコー, M. 1987[1984] 『自己への配慮』田村俣訳, 新潮社.

藤崎宏子 1998 『高齢者・家族・社会的ネットワーク』現代家族問題シリーズ, 培風館.

藤原武弘・来嶋和美 1988 「老人ホームの老人の孤独感と社会的ネットワークについての調査的研究」『広島大学総合科学部紀要Ⅲ』12, 55-64.

船津衛 2003 「高齢者の自我」・辻正二・船津衛編, 『エイジングの社会心理学』北樹出版.

- 堀口貞夫 2000 「中高年のセクシュアリティ 男女のパートナーシップの現状について」『日本性=研究会議会報』12:2-18.
- 堀口貞夫 2008 「中高年におけるセクシュアリティとジェンダー」『産婦人科治療』97(1), 18-27.
- 前田恵利・谷村千華・大庭桂子・野口佳美 2009 「看護学性の将来の高齢者ケア選択への関連要因」『老年看護学』13(2), 65-71.
- 前田信彦 1993 「都市におけるパーソナル・コミュニティの形成—ソーシャル・ネットワーク論からの分析—」『日本労働研究機構研究紀要』6, 35-50.
- 前田信彦 2006 『アクティブ・エイジングの社会学—高齢者・仕事・ネットワーク』ミネルヴァ書房.
- 牧野智和 2012 『自己啓発の時代—「自己」の文化社会学的探求』勁草書房.
- 松園万亀雄 1987 「社会人類学における性研究」宮田登・松園万亀雄編『文化人類学4:性の表象』, 6-20, アカデミア出版会.
- 松田智子 2001 「高齢男性の依存性に関する一研究」『社会学論集』34, 99-110, 佛教大学, [http://www.archives.bukkyou.ac.jp/infolib/user\\_contents/repository\\_txt\\_pdfs/syakai34/S034L099.pdf#search='配偶者 依存 高齢期'](http://www.archives.bukkyou.ac.jp/infolib/user_contents/repository_txt_pdfs/syakai34/S034L099.pdf#search='配偶者 依存 高齢期').
- 三宅貴夫 2000 『介護のための老人医療入門』南山堂.
- 宮田登 1996 『老人と子供の民俗学』白水社.
- メヂカルフレンド社 2005 『ケアマネジメント事典』ミネルヴァ書房.
- メディア・リサーチ・センター; M. R. C. 2012 『雑誌新聞総かたろぐ 2012 年度版』メディア・リサーチ・センター株式会社, <http://www.media-res.net/search/msearch.cgi?index=&config=&set>.
- 森幹朗 1980 『老婚への道』ミネルヴァ書房.
- 森岡清美・望月嵩 2007 『新しい家族社会学』培風館.
- 森木美恵 2008 「全国調査『仕事と家族』より 女性の就労観と夫婦間の性交渉の頻度について」『中央調査報』606, 5373-5381, 中央調査社.
- 森田愛子・藤原智恵子・能川ケイ 2000 「高齢者の性に対する看護・介護職者の認識(その1)—在宅ケアに携わっている看護・介護職者の性の認識—」『神戸市看護大学短期大学部紀要』19, 73.
- 文部省高等教育局医学教育監修 2000 『CARE ひとのかたち』大蔵省印刷局.
- 山田昌弘 1996 『結婚の社会学 未婚化・晩婚化はつづくのか』, 丸善ライブラリー.
- 山田昌弘 2005 「現代社会における家族ならびに結婚の意味を問う PartⅢ現代家族の存在意義を問う 家族神話は必要か?—第二の近代の中の家族—」『家族社会学研究』16-2, 13-22, 日本家族社会学会.
- URL 都市機構 2007 『孤独死に対する対策等について』URL 都市機構.
- 湯沢雍彦 1986 「老人の孤独と家族との関係」『臨床精神医学』国際医書出版, 15(11),

- 1773-1778.
- 吉沢勲 1986 「老人と性的問題」 『臨床精神医学』 15 (11) , 1779-1783.
- リクルート 2008 『リクルート・マガジン』 2008.5.30号.  
[http://www.r25.jp/b/honshi/a/link\\_review\\_details/id/1100000](http://www.r25.jp/b/honshi/a/link_review_details/id/1100000). 2009.10.03.
- Becker, G. 1984 The Social Regulation of Sexuality: A Cross-Cultural Perspective,'  
*Current Perspectives in Social Theory*, Volume 5, 45-69.
- Bederman, G. 1995 *Manliness & Civilization: A Cultural History of Gender and Race in the United States, 1880-1917*, Chicago, The University of Chicago Press.
- Bell, Robert R., Jay B. Chaskes 1970 Premarital Sexual Experience Among Cohorts 1958 and 1968, *Journal of Marriage and the Family*, 32, 2 (February) , 81-84.
- Benwell, B. 2004 Ironic Discourse: Evasive Masculinity in Men's Life Magazines, *Men and Masculinities*, 7, 3-21.
- Brewer, M.B., Dull V., Lui L. L. 1981 Perceptions of the elderly: Stereotypes as prototypes, *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 656-670.
- Canetto S.S., Kaminski P.L., Felicio D. M. 1995 Typical and optimal aging in women and men: Is there a double standard?' *International Journal of Aging and Human Development*, 40, 187-207.
- Carpenters, L.M. 2001 From Girls Into Women: Scripts for Sexuality and Romance in Seventeen Magazine 1974-1994, *The Journal of Sex Research*, 35 (2) , 148-168.
- Chudacoff, H.P. 1989 *How old are you? : Age Consciousness in American Culture*, Princeton University Press= 1994 『年齢意識の社会学』工藤政司・藤田永祐訳, 法政大学出版.
- Clark M., Anderson B.G. 1967 *Culture and Aging: An Anthropological Study of Older Americans*, Charles C. Thomas.
- Connell, R.W. 1995 *Masculinities*, London, UK, Polity.
- Connidis, I. A. and Campbell, L.D. 1995 Closeness, Confiding, and Contact among Siblings in Middle and Late Adulthood, *Journal of Family Issues*, 16, 722-745.
- Cramer, K.M., Neyedley, K.A. 1998 Sex Differences in Loneliness: The Role of Masculinity and Fertility, *Sex and Roles*, 38 (718) , 645-653.
- Felix, D.S., Robinson, W.D., Jarzynka, K.J. 2013 The Influence of Divorce on Men's Health, *JOURNAL OF MEN'S HEALTH*, 10 (1) , 3-7.
- Deusch, F.M., Zalenski, C.M., Clark, M.E. 1986 Is There a Double Standard of aging?, *Journal of Applied Social Psychology*, 16 (9) , 771-785.
- DUREX 2005 Give and receive 2005 Global Sex Survey results",  
<http://www.durex.com/jp/gss2005result.pdf>.
- Gagnon, J. 1977 *Human Sexualities*, Glenview III, Scott, Foresman and Co., 5-9.

- Glass, C.J., Dalton, A.J. 1988 Sexuality in older adults: a continuing education concern, *The Journal of Continuing Education in Nursing*, 19 (2) , 61-64.
- Goffman, E. 1959 *The Presentation of Self in Everyday Life*, =1974 『行為と演技—日常生活における自己呈示』 石黒毅訳, 誠心書房.
- Gutman, M.C. 1997 Trafficking in Men: The Anthropology of Masculinity, *Annual Review of Anthropology*, 26, 385-409.
- Haggerty, G.E. 1999 *Men in Love: Masculinity and Sexuality in the Eighteenth Century*, Columbia University Press.
- Hendricks, J., Hendricks, C.A. 1986 *Ageing in Mass Society: Myth & Realities* , Third edition, Little Brown and Company, Boston, USA.
- Holmes, E.R., Holmes, L.D. 1995 *Other Culture, Elder Years*, Second. edition, Sage.
- Holmes, T.H., Rahe, R.H. 1967 The Social Readjustment Rating Scale, *Journal of Psychosomatic Research*, 11, 213-218.
- House, J.S. 2001 Social Isolation Kills, But How and Why? *Psychosomatic Medicine, Journal of Biobehavioral Medicine*, 63 (2) , 267-274.  
<http://www.psychosomaticmedicine.org/content/63/2/273.full.pdf.html>.
- Hummert, M.L., Garstka, T.A., Shaner, J.L., Strahm, S. 1995 Judgements about stereotypes of the elderly: Attitudes, age associations and typicality ratings of young, middle-aged, and elderly adults, *Research on Aging*, 17, 168-189.
- Kaatz, G.R., Keith, E.D. 1970 The Dynamics of Sexual Behavior of College Students, *Journal of Marriage and the Family*, 32 (8) , 390-394.
- Kertzner, D.I., Keith, J.eds. 1984 *Age and Anthropological Theory*, Cornell University Press.
- Kimmel, M. 2008 *Guyland: The perilous world where boys become men*, New York, NY: Harper Collins.
- Kite, M.E., Wagner, L.S. 2002 Attitude toward older adults. In Nelson T.D. ed, *Agism: Stereotyping and prejudice against older persons*. Cambridge, MA, MIT Press, 129-161.
- Knobloch-Westerwick, S., Hoplamazian, G. J. 2011 Gendering the Self: Selective Magazine Reading and Reinforcement of Gender Comformity, *Communication Reserch*, 39 (3) , 358-384.
- Levin, W.C. 1988 Age Atereotyping: College Student Evaluations, *Research on Aging*, 10, 134-148. The Sage Social Sciences Collections.
- Linton, R. 1942 Age and Sex Categories, *American Sociological Review*, 7 (5) , 589-603.
- Lopata, H.Z. 1969 Loneliness: Forms and components, *Social Problems*, 17, 248-261.
- McKain, W.C. 1969 *Retirement Marriage*. Storrs Agricultural Experiment Station.

- Meeuwesen, L. 2006 A Typology of social contacts, Roelof Hortulanus eds. *Social Isolation in Modern Society*, Routledge advances in sociology, 37-59.
- Meyers, M.F. 2001 Masculinity and Sexuality: Selected Topics in the Psychology of Men, *The American Journal of Psychology*, 158.11, 1946-1947.
- Money, J. 1957 *The Psychologic Study of Man*, Springfield, IL, U.S.A., Thomas C. C. Publisher.
- Nakahara, Y. 2010 Sexual Relationship of Elderly Males Who Have Lost Their Spouses, *ANIMA, Indonesian Psychological Journal*, 25 (2) , 151-158.
- Organization for Economic Co-operation and Development (OECD) 2005 *Society at a glance : OECD Social Indicators 2005 Editions* = 2006 『図表でみる世界の社会福祉』高木郁郎監訳, 麻生裕子訳 , 明石書店.
- PAHO, WHO in collaboration with the WAS 2000 *Promotion of Sexual Health Recommendations for Action* in Antigua Guatemala, Guatemala =2003 『セクシュアル・ヘルスの推進 行動のための提言』松本清一, 宮原忍日本語版監修, 日本性教育協会.
- Redelman, M. 2010 How to Make Easier for Patients and Health Professional. Holistic Sexuality Management of the Patient and Their Partner in Breast and Prostate Cancer. Similarities and Differences When the Primary Patient is Male or Female, in Oral Presentatin at The 11<sup>th</sup> Asia-Oceania Conference for Sexology, August 4th, 2010.
- Robinson, K.H. 2002 Making the invisible visible. Gay and lesbian issues in early childhood education, *Contemporary Issues in Early Childhood*, 3 (3) , 415-434.
- Rogers, A. 2005 Chaos to Control: Men's Magazines and the Mastering of Intimacy, *Men and Masculinities*, 8 (2) , 175-194.
- Schrock, D., Schwalbe, M. 2009 Men, Masculinity, and Manhood Acts, *Annual Review of Sociology*, 35, 277-295.
- Spector-Mersel, G. 2006 Never-aging Stories: Western Hegemonic Masculinity Scripts, *Journal of Gender Studies*, 15 (1) , 67-82.
- Stibbe, A. 2004 Health and the Social Construction of Masculinity in Men's Magazine, *Men and Masculinities*, 7, 31-51.
- Thompson, E.H.Jr. 2006 Images of Old Men's Masculinity: Still a Man?, *Sex Roles*, 55, 633-648.
- Townsend, P. 1963 Isolation, loneliness and the hold on life, Townsend, P. ed., *The Family life of old people: An inquiry in East London*. Penguin Books, 188-205.
- UNH; United Neighborhood House 2005 *Aging in the Shadows: Social Isolation Among Seniors in New York*.
- WAS 2014 WAS Declaration of Sexual Rights 2014,  
[http://www.worldsexology.org/wp-content/uploads/2013/08/declaration\\_of\\_sexual\\_righ](http://www.worldsexology.org/wp-content/uploads/2013/08/declaration_of_sexual_righ)



ts\_sep03\_2014.pdf.

Zepelin, H., Sills, R.A., Heath, M.W. 1986-87 Is age becoming irrelevant? An exploratory study of perceived age norms, *International Journal of Aging and Human Development*, 24, 241-256.